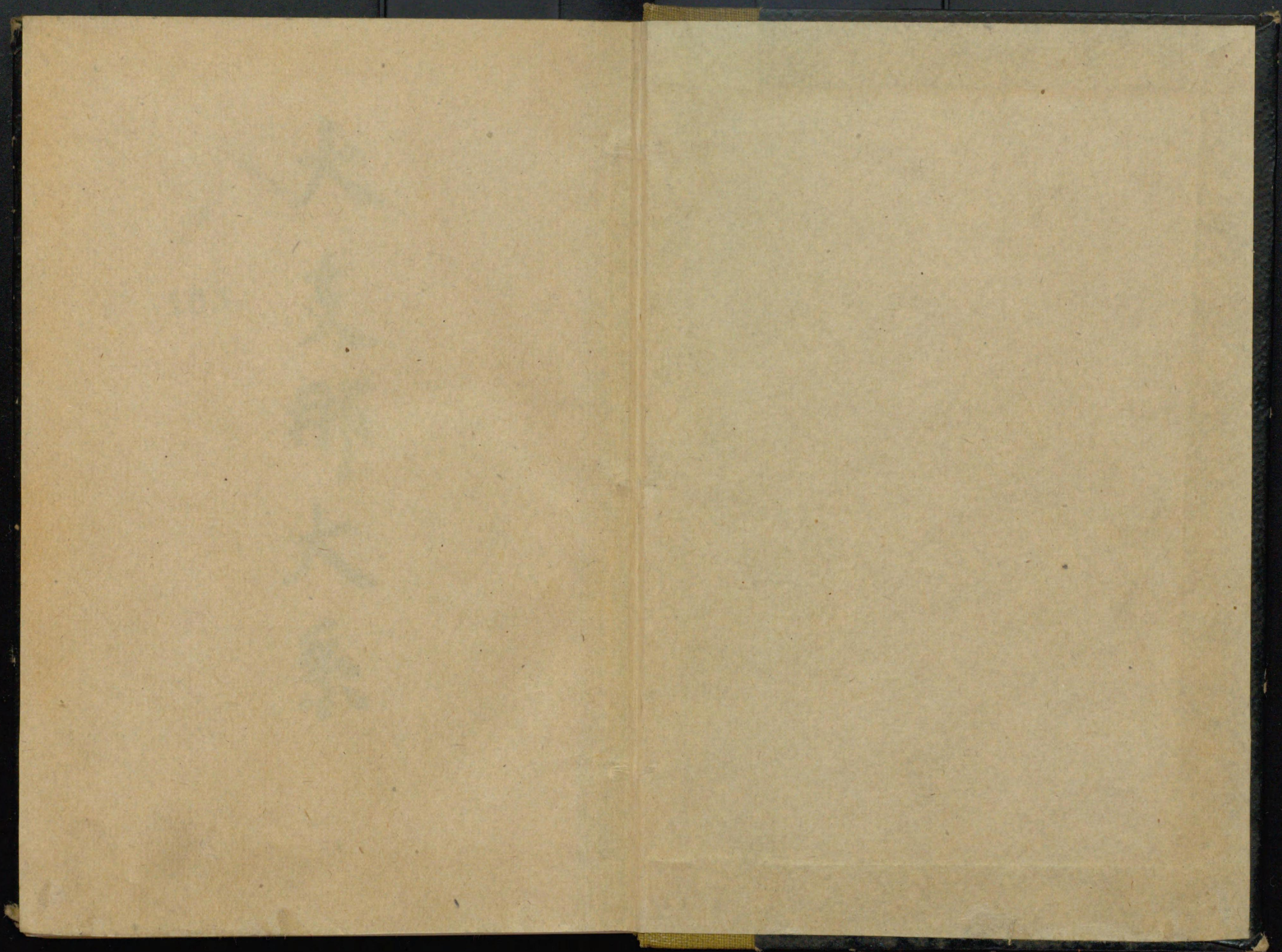


602-21



1200501530639





大支那大系



160

4

第七卷



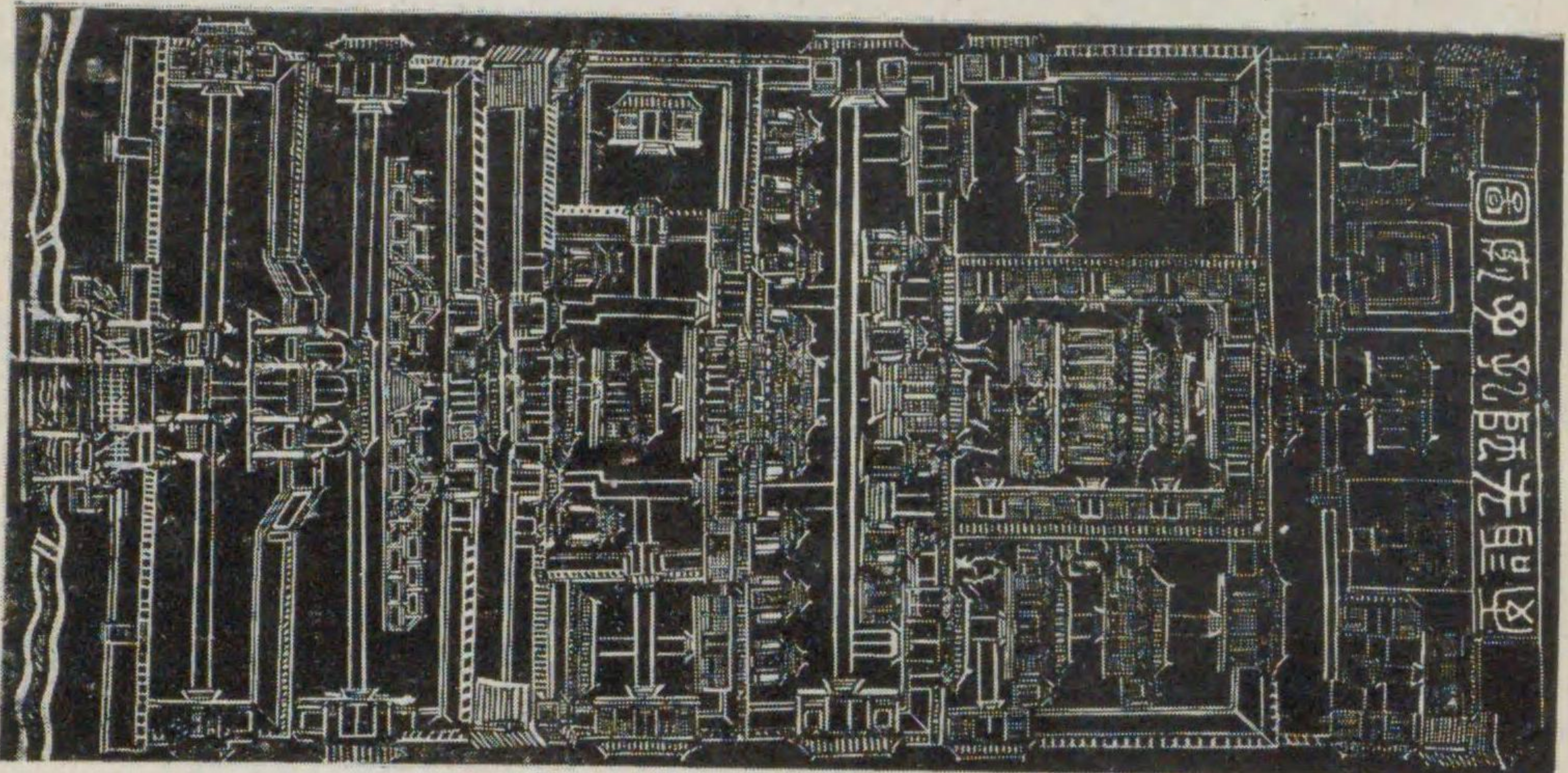
西山省より發見せる宋代の壁画



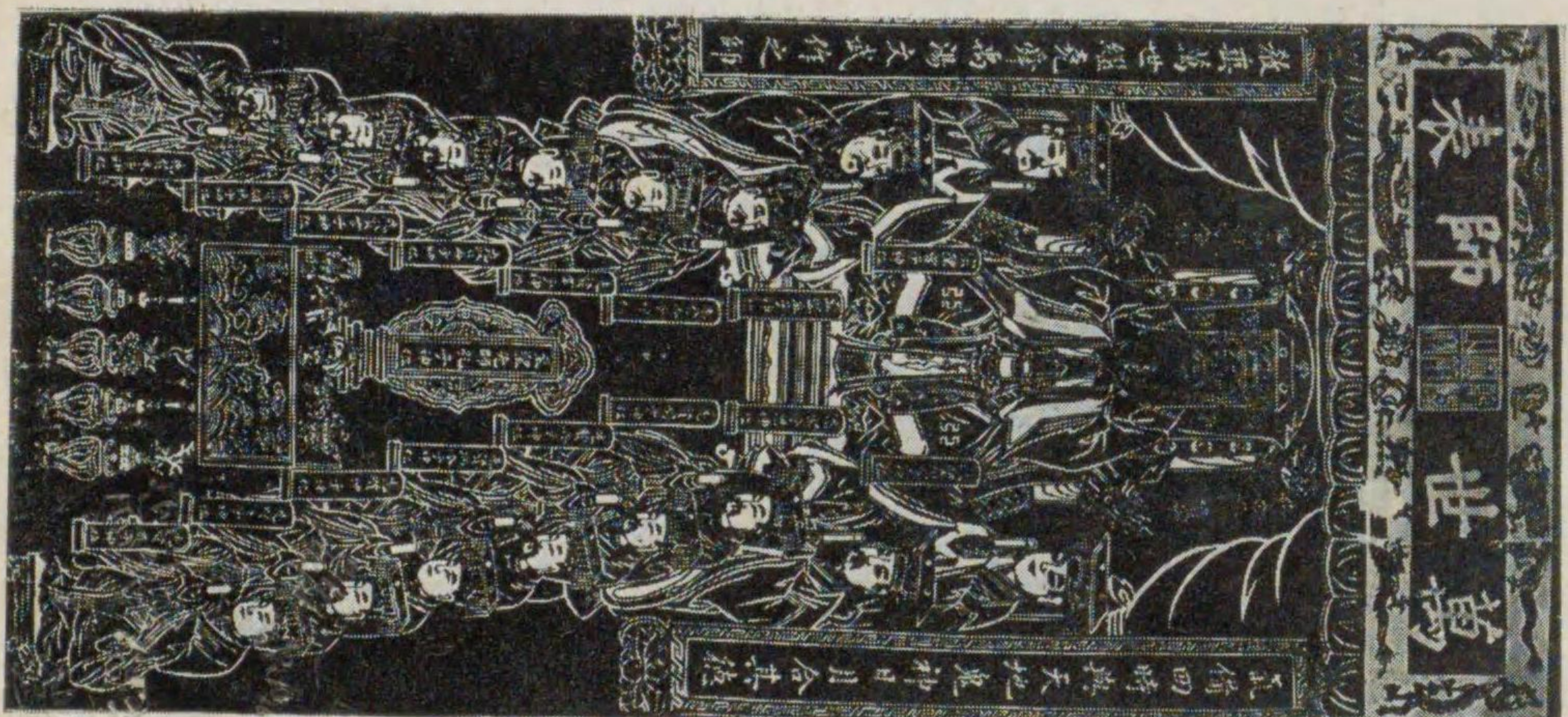
西山省より發見せる宋代の壁画

大支那大系

001



圖面平の殿聖子孔阜曲東山

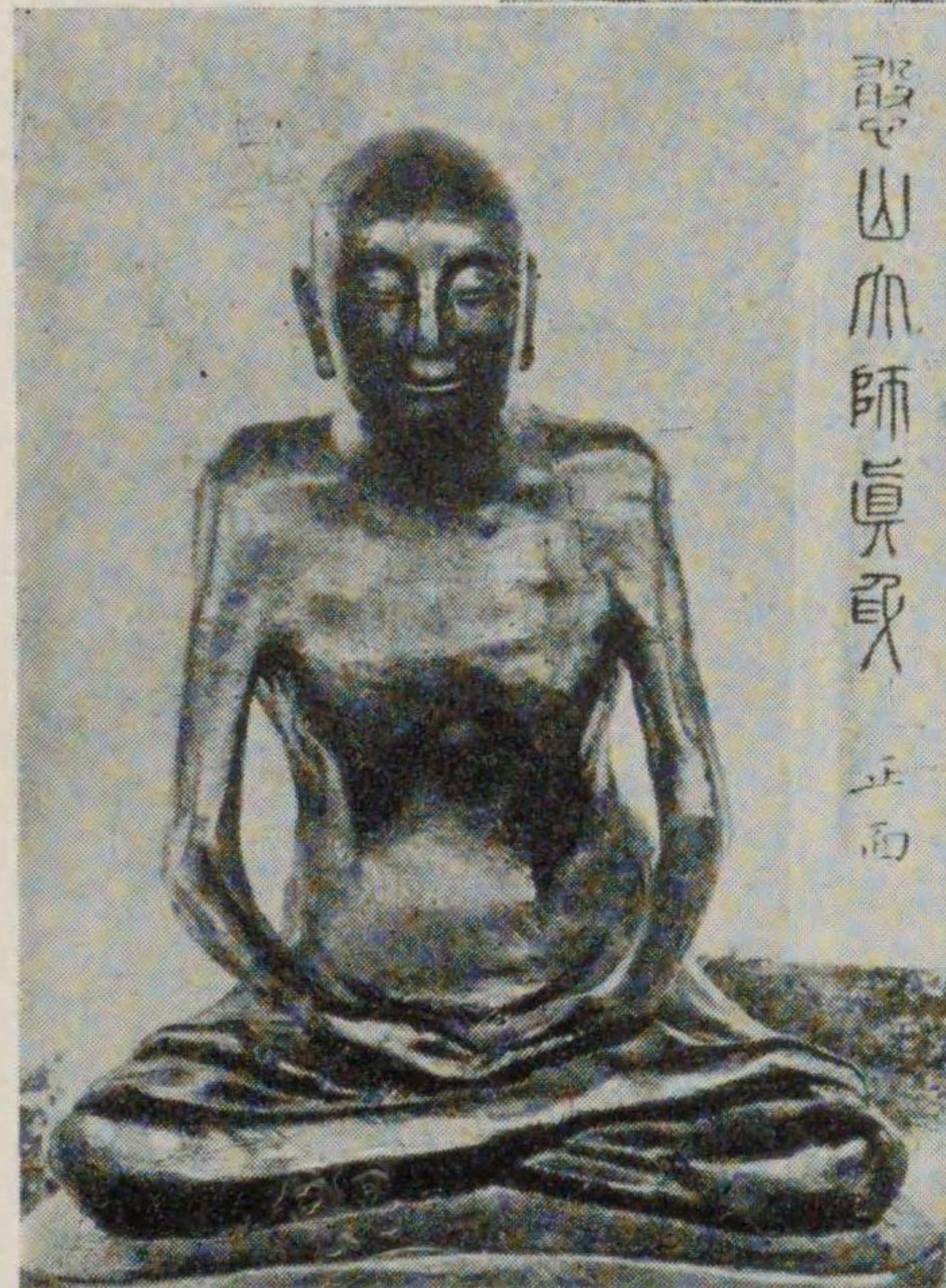


像肖の哲十が及子孔





朱水先生旁系の祠堂

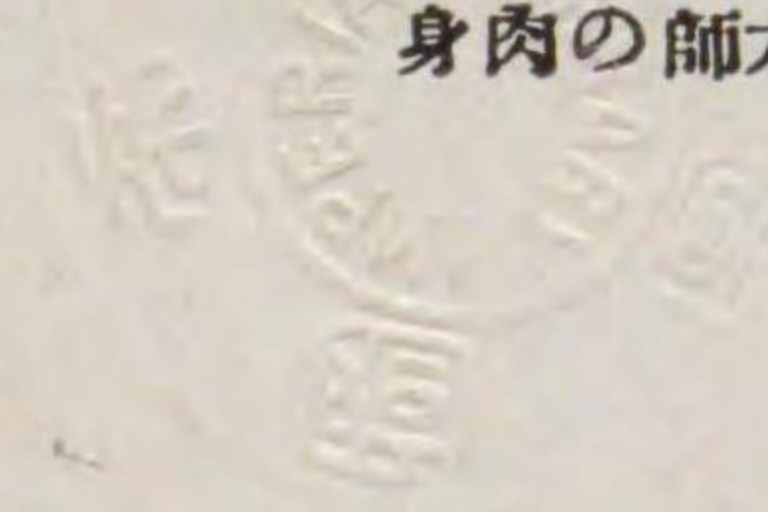


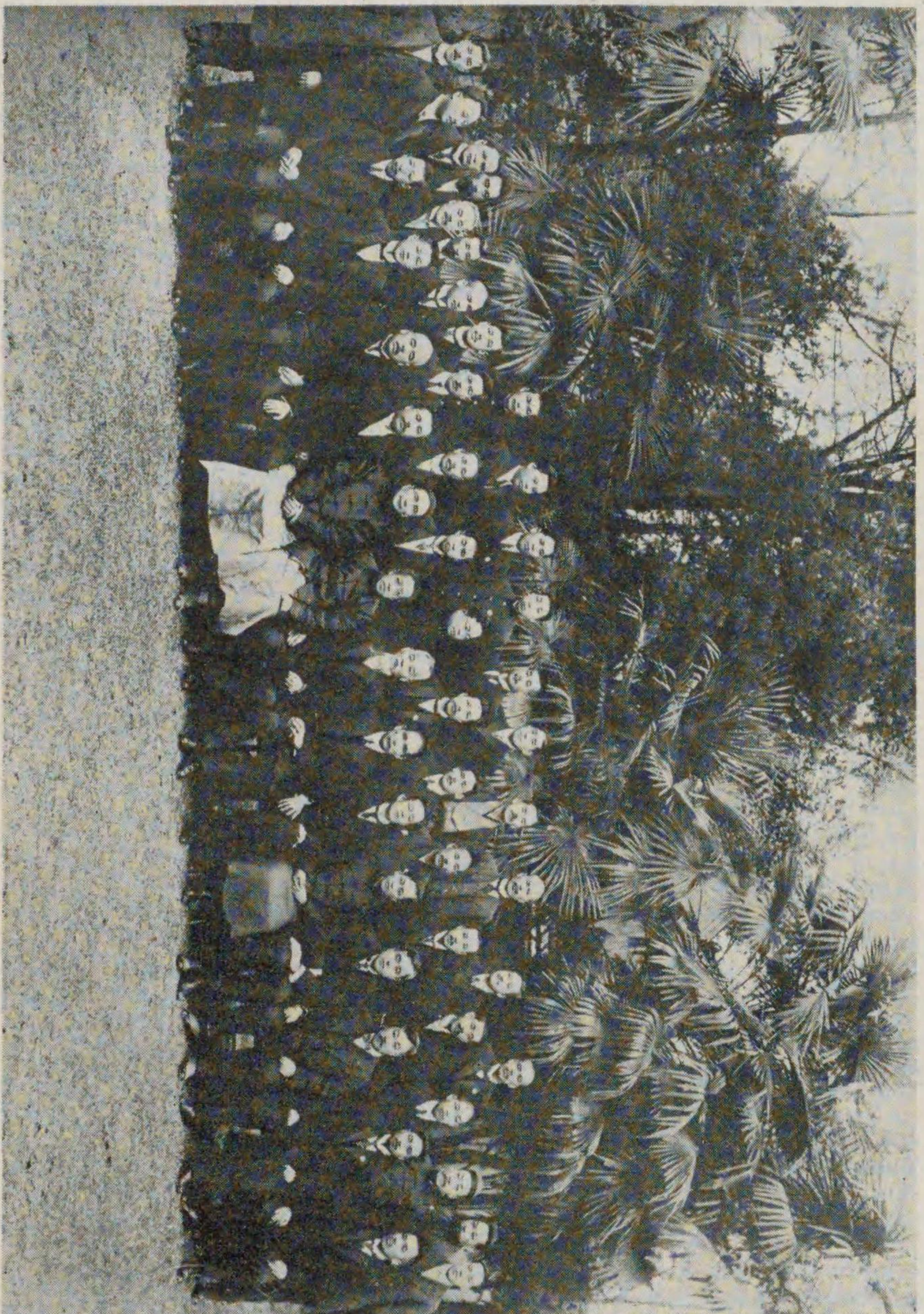
龍山師眞身 正面



月田禪師眞身 正面

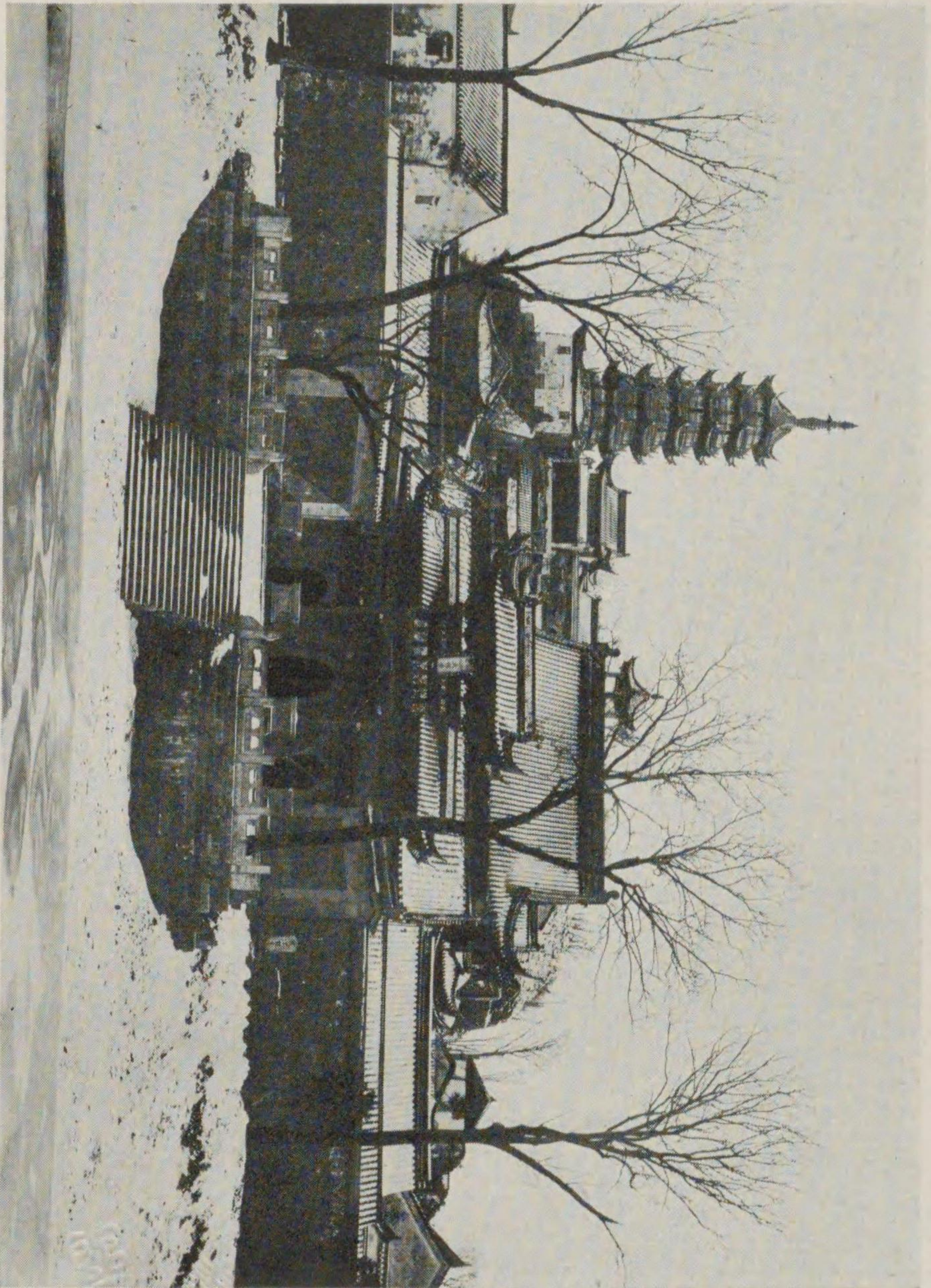
身肉の師大山愁田月の明及祖六溪曹省東廣





(氏章は左氏孫は右の其士博尾寺は央中列前) 流名の本日と頭巨の黨命革

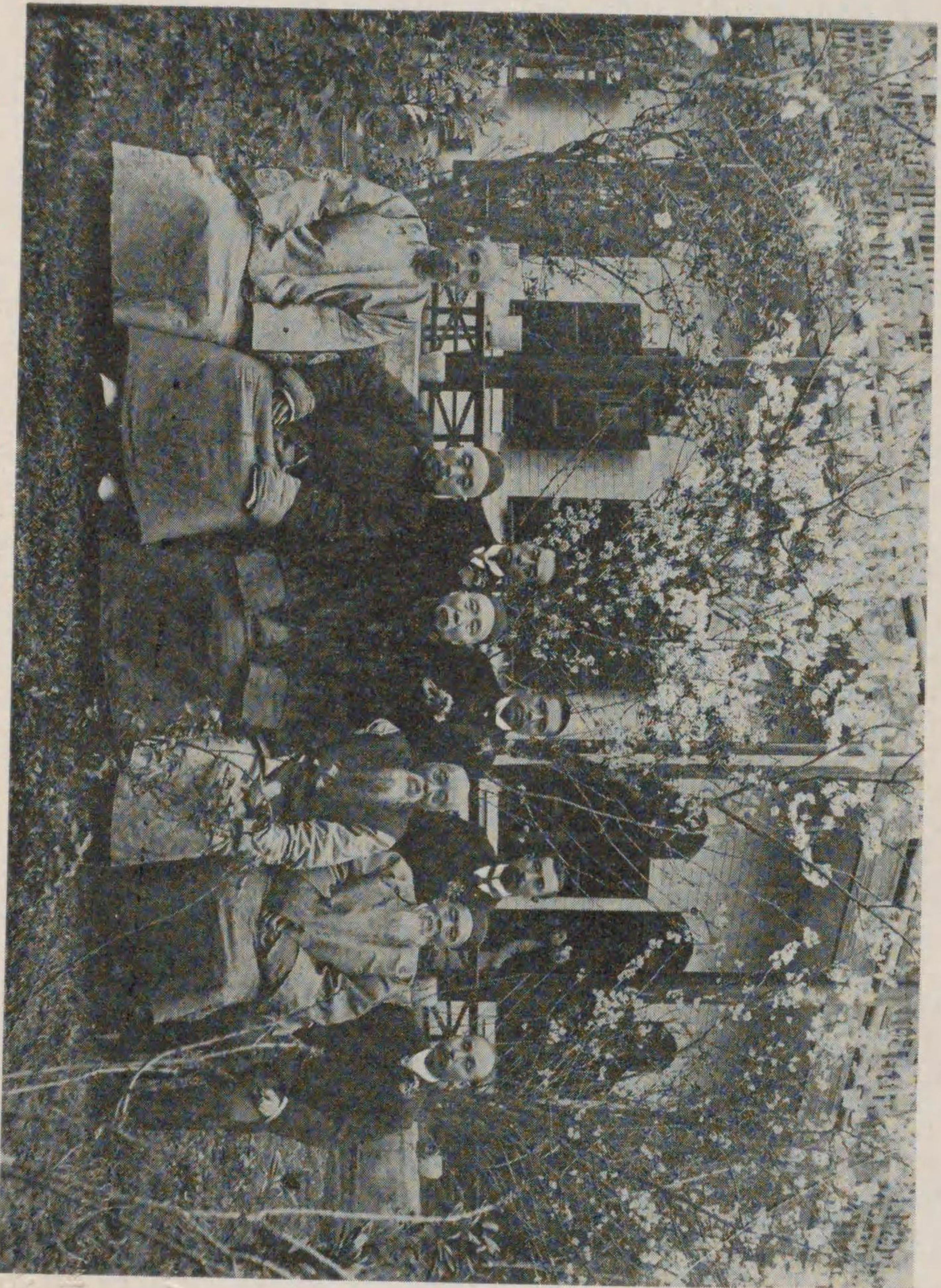
THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY



寺山金江鎮るせ興復の氏藩回曾後亂平太

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
ASIAN LIBRARY

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
ASIAN LIBRARY



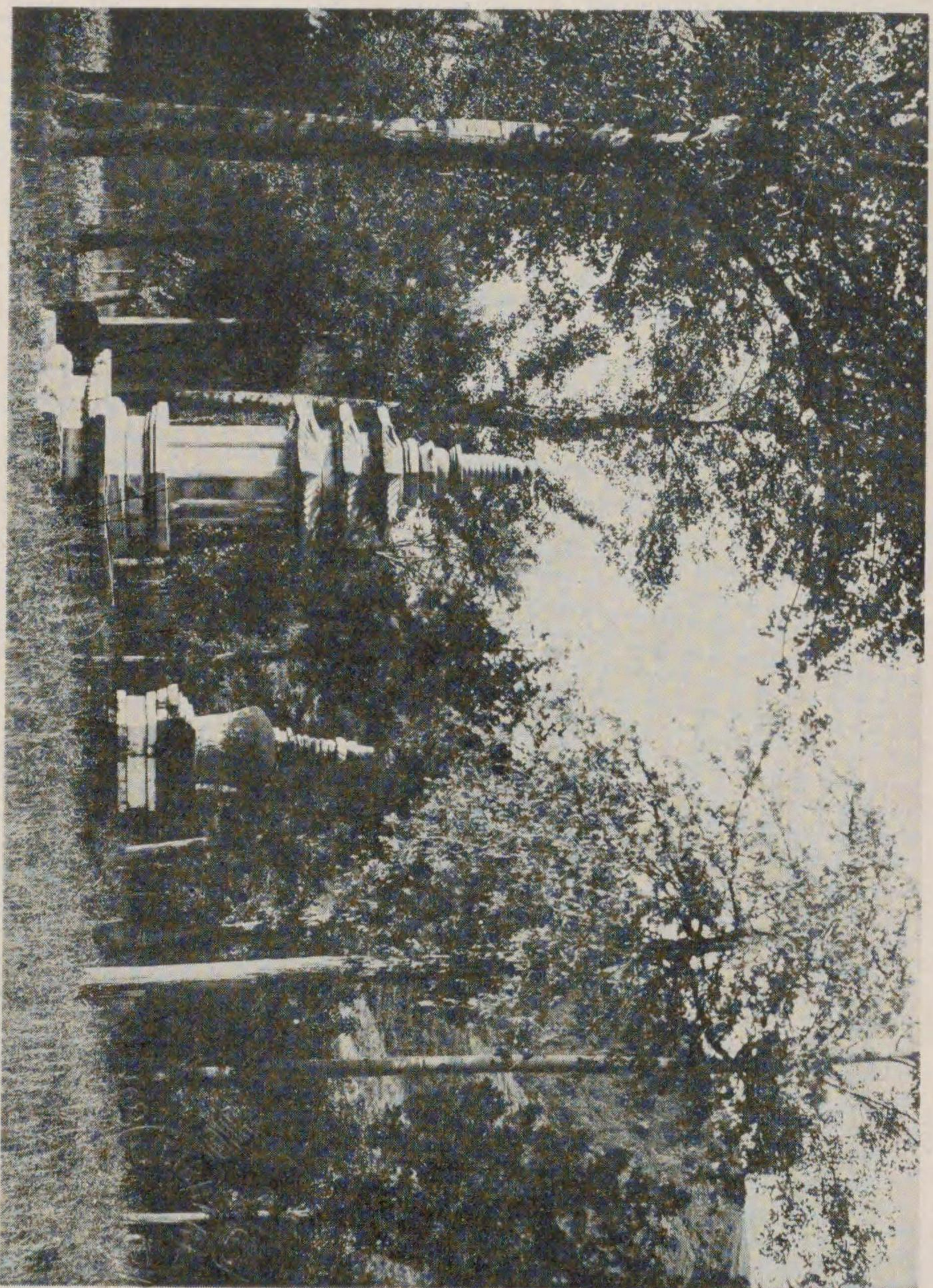
湖大儒王運園先謙諸氏像
前右列三人目園運四目先謙氏

THE UNIVERSITY OF CHINA LIBRARY
10087



明の陽明進士及弟の記念碑





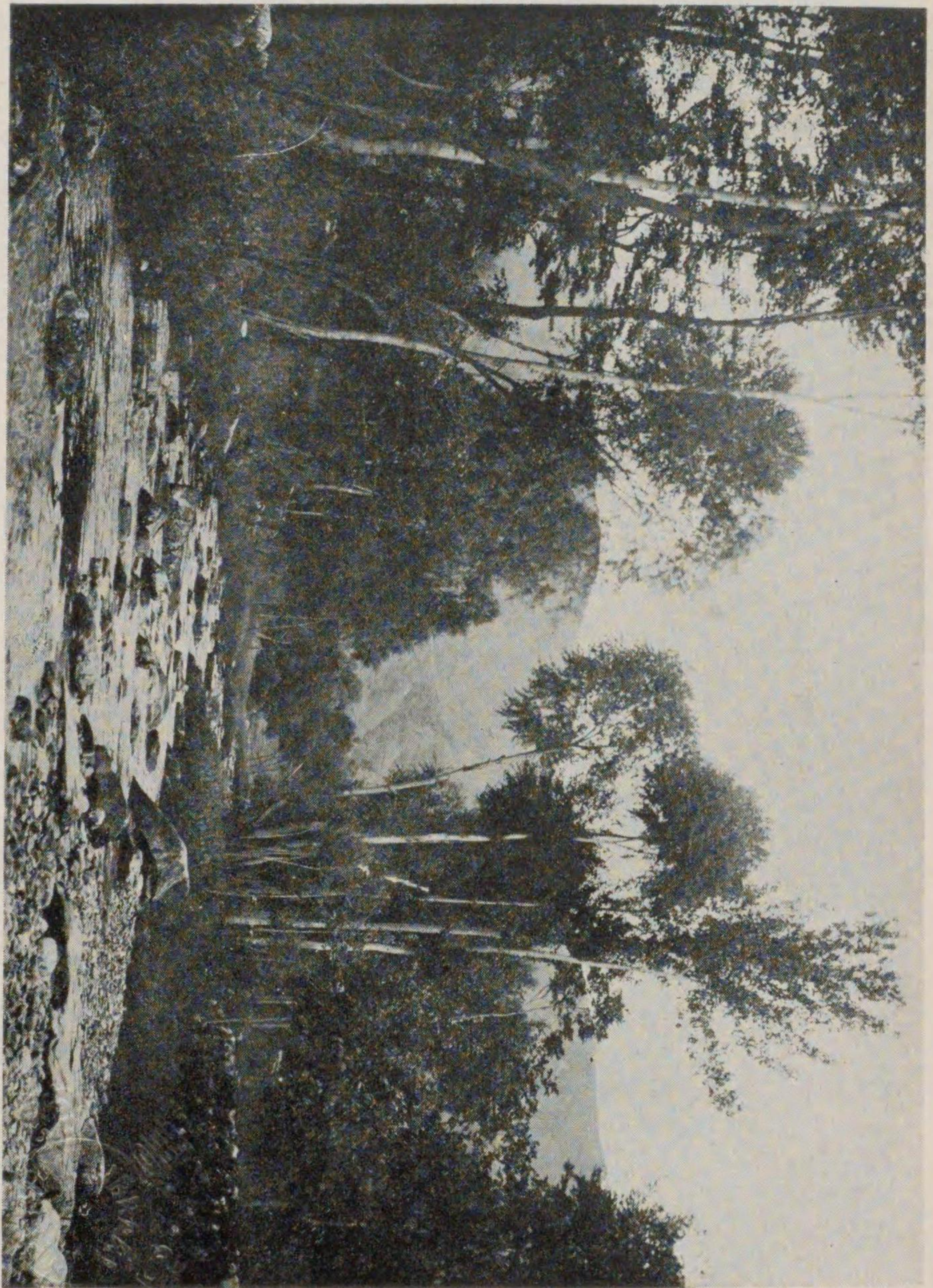
塔の師法宛靜隋省西山





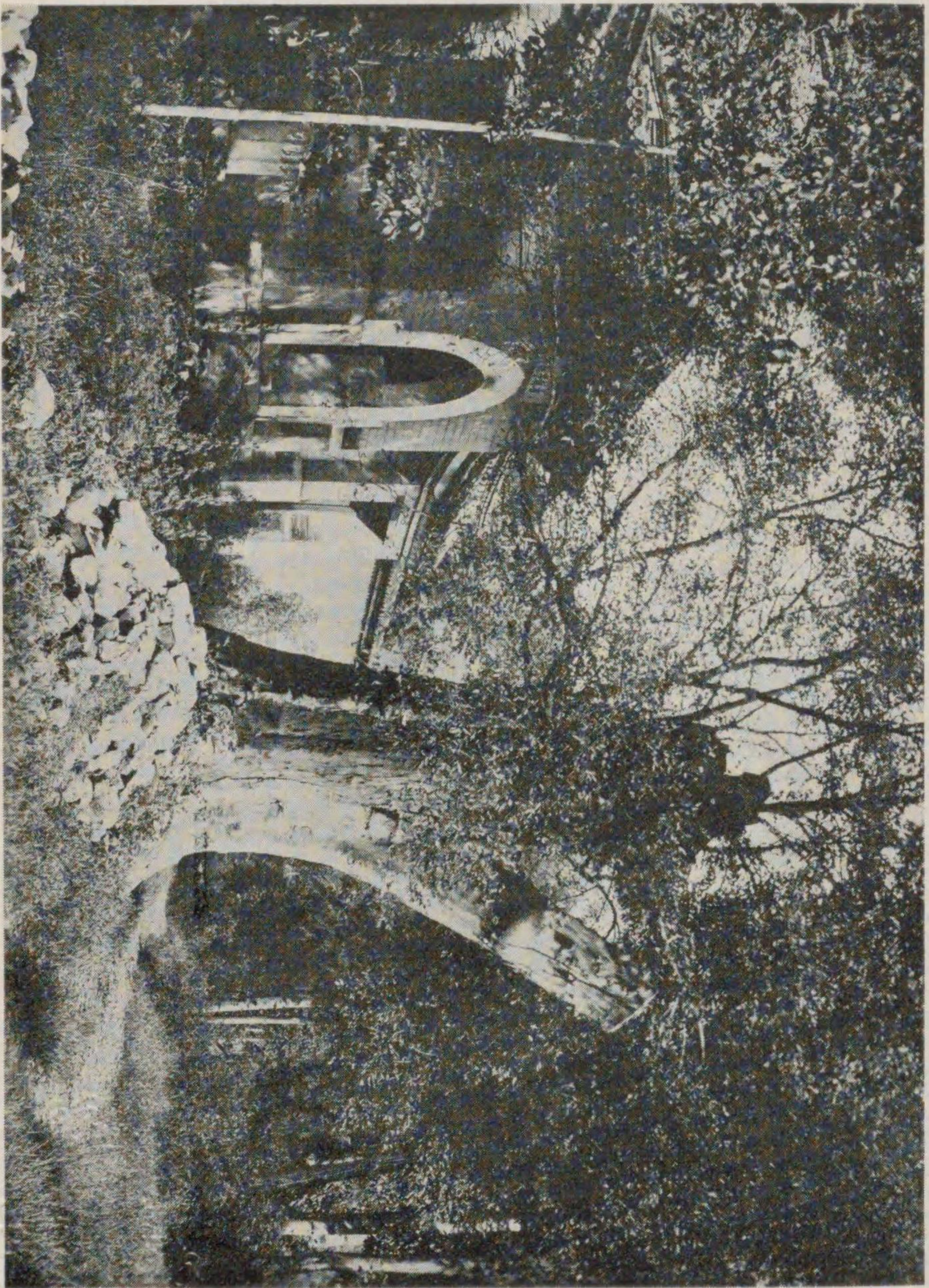
蘇州北寺の報恩塔





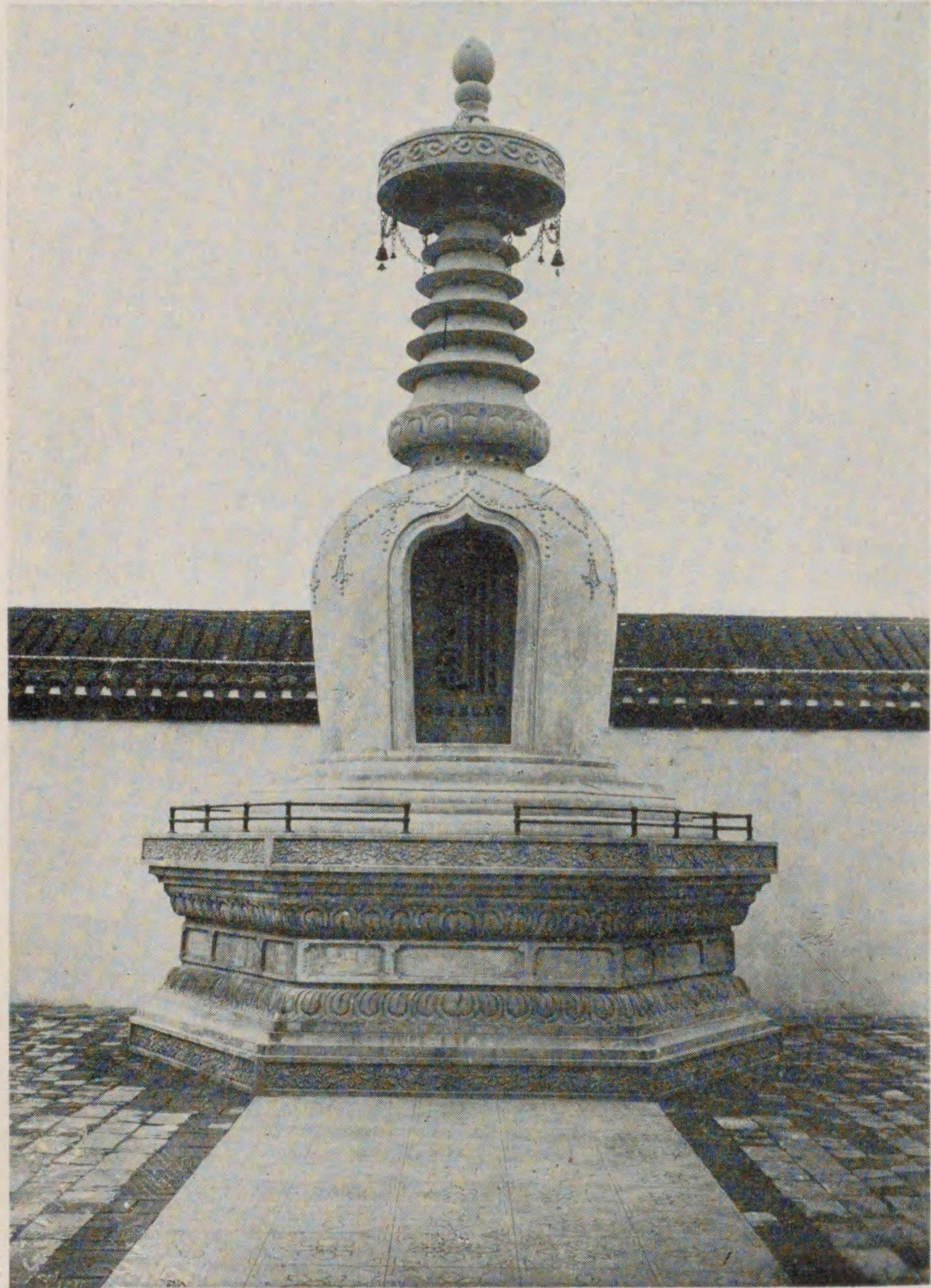
唐の古蹟西山雲居水源头真景





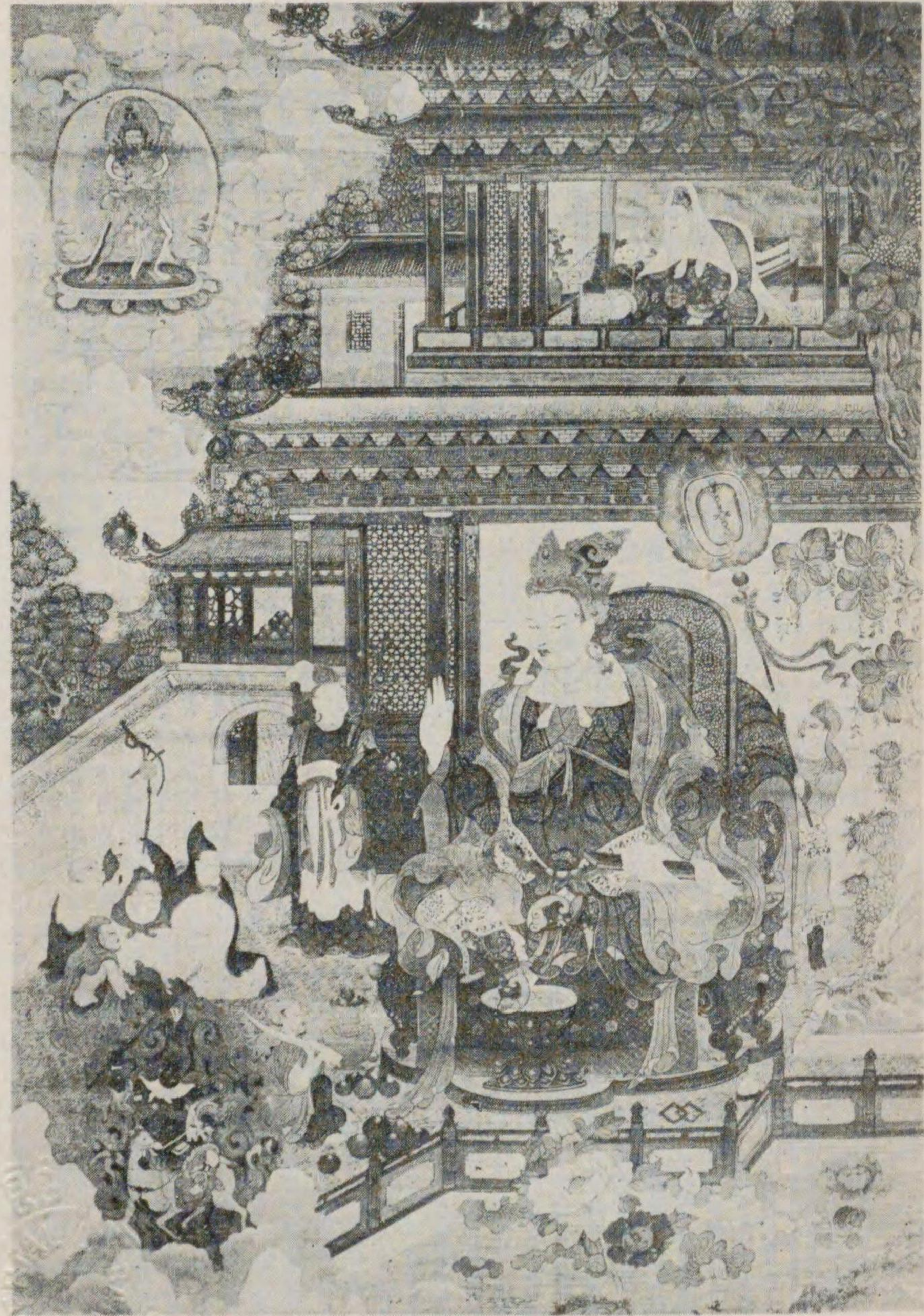
建創師法苑靜庵樹香蹟古の階

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
1910



清末佛教中興のたしめたる仁山居士の墓



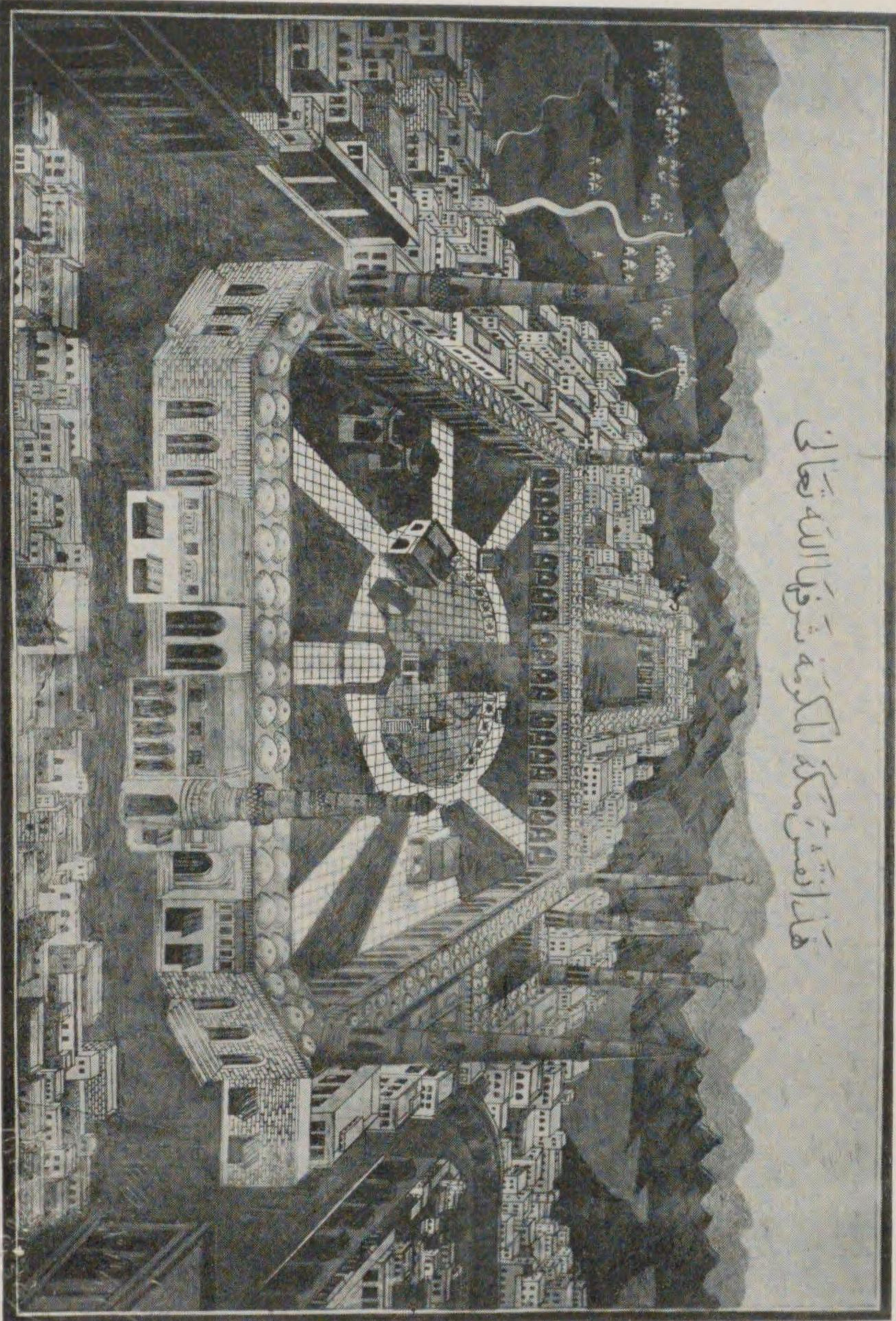


西藏喇嘛第二輩班禪昆山王の像

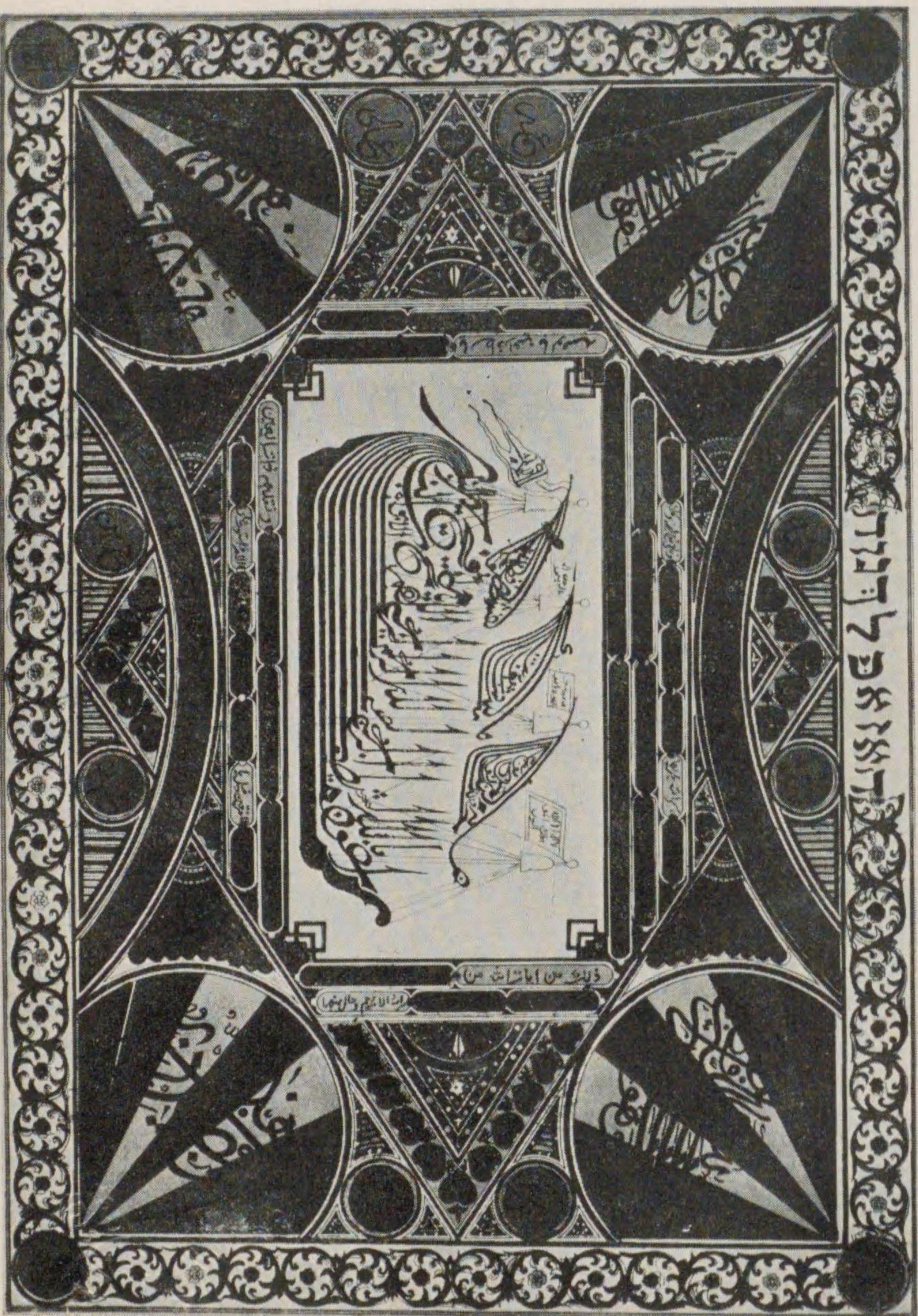




مَا أَقْبَسَ مَكَّةَ الْمُكَرَّمَةَ شَرَفَ اللَّهِ تَعَالَى

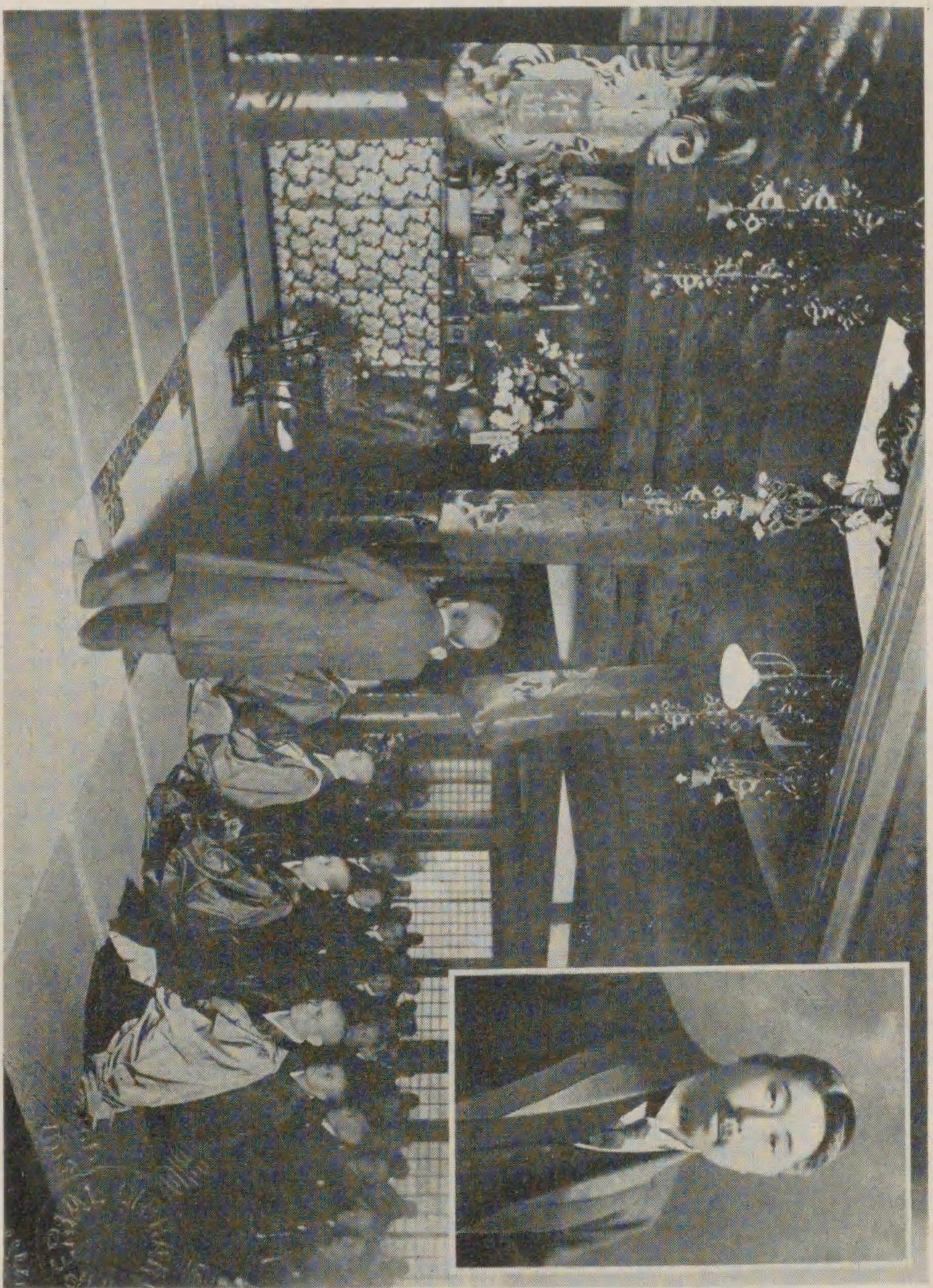


聖殿のカツラ地聖の教回



回教徒の海を渡る船圖

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



大正五年冬興進氏會に於ける養父の香



自序

予は、萬里閣書房の需に應じて、極めて難解なる『支那の思想と宗教』を編するに當りて、予の取りたる態度を告白すると云ふことは、蓋し讀者諸君に對する、著者としての義務であると信じたるを以て、左に其の梗概を一言することとしたのである。

由來、思想と云ひ、宗教と云ふても、要するに、是は一の無形なるものであつて、何人も其の形態を捉ふることは出來ないものである。然るに、此の無形なる思想其の物は、發して社會の文物、制度ともなり、又は宗教、哲學ともなるものにして、思想其の物の作用ほど、微妙にして不可思議なるものはないのである。

故に、予はかゝる微妙不可思議なる思想其の物を描寫するに當り、如何なる態度を取るべきかに就ては、心潛に之れに惑ふたのである。何となれば、若し此の思想其の物を哲學的に考察せんか、一人一時代を叙するにも、非常なる努力と紙數を要するものなるに、其の努力と膨大なる紙數は、要するに單なる哲學的思索の消長を知るに過ぎないものである。

而して、之れは獨り思想方面のみに非ずして、宗教方面に於ても、一教又は一教祖を叙するにも是れ亦容易ならざる努力と紙數を要するものなるが、其の結果は單なる神學的の消長を叙説するに止まるものである。故に、予は兩者共に其の專書ある今日に當りて、進んで其の詳細なることを説くよりも、寧ろ極めて概括的に、上下數千年の思想及び宗教を概観することとしたのである。

何となれば、如何なる思想も宗教も、要するに社會を離れて、單獨に存立するものには非ずして必ずや或種の思想が醗酵して、或種の社會を現出すると同時に、或る社會には、必ず或る思想を産出すると云ふことは、恰も因が果となり、果が因と爲ると云ふ循環作用を示すものである。

しかして、其の思想が高潮に達する時には、莊嚴無比の王朝も、是が爲めには顛覆せらるゝかと思へば、之れと反對に、一の王朝が出現すると云ふが如き事實は、獨り漢民族のみが、繰返したる事實には非ずして、世界の全人類が有史以來今尙ほ之れを繰返へしつゝある。極めて明白なる事實である。

是れ、予が本篇を帥するに當りて、無形なる思想と云ふフィルムより發して、或は社會の文化、制度となり、又は宗教、哲學、乃至は美術、文學となると云ふが如き、微妙なる作用も、之れを歴

史と云ふ幕の上に映寫するに於ては、フィルム其の物を觀るよりは、寧ろ其の實體を明白にするの便があると信じたからである。

こゝを以て、あらゆる思想及び宗教を説明するに當りて、思想及び宗教をフィルムとして、之れを歴史と云ふ幕の上に映寫せしめて、兩者の實體を觀ることゝしたのが、即ち著者の態度であつた。

しかし何分にも著者の微力を以てして、大膽にも上下數千年に亘る、支那大陸の思想及び宗教を概観せんとしたのであるから、不充分の點が頗る多いのは、大方に對して慚謝する所である。

されば、本篇は思想史にも非ず、又宗教史にも非らず、勿論政治史にも非らざるが、只漢民族の實生活より發生したる社會組織と、民族心理の發達せる徑路とは、出來得る限り親切に之れを觀察して、思想及び宗教の變遷せる状態は、大體に於て之れを概観せんとしたのが、本篇を帥するに當りて、著者の終始一貫せる態度であつたと云ふことを告白して小序とする。

昭和五年六月二十九日

大支那大系（第七卷）

思想宗教篇 目次

第一章 支那の國民性と其の社會組織

第一節 總論……………一

第二節 太古時代の風尚……………二

イ 緒言……………二

ロ 天皇氏歳首を立つ……………三

ハ 地皇氏の繼承……………五

ニ 人皇氏の九州分治……………五

ホ 有巢氏の木居と木食……………六

第三節 三皇時代の民度

- へ 火食の時代來る……………六
- ト 太古時代に對する總評……………七
- イ 伏羲氏の建設せる社會……………八
- ロ 農業を創始せる炎帝神農氏……………九
- ハ 醫藥の發明と互市の開始……………一〇
- ニ 報祭の舉行……………一一
- ホ 黃帝軒轅氏の機械製作……………一二
- へ 三皇時代の概評……………一三

第四節 五帝時代の民度

- イ 少昊、顓頊、帝嚳の治世……………一四
- ロ 帝堯の聖徳と童謠……………一五
- ハ 擊壤の歌と華封人の壽……………一七

ニ 帝舜の徳化……………一九

ホ 五帝の總評……………二〇

第五節 太禹の鴻業

- イ 天下授受の大法確立す……………二二
- ロ 太禹の治水……………二三
- ハ 舜帝讓位の命……………二四
- ニ 太禹の辭退と帝舜の再命……………二四
- ホ 太禹の徳行と其の人生觀……………二四
- へ 禹貢の九州……………二六
- ト 夏の行政區劃……………三〇

第二章 武力に依る政治革命の發生

第一節 成湯の革命

- イ 夏桀の失徳……………三四

第二節 武王の革命と周公の經綸

| | | |
|-----|-------------|----|
| 口 | 成湯の人格 | 三 |
| ハ | 湯の革命宣言 | 三 |
| ニ | 仲虺の辯明 | 三六 |
| イ | 武王の革命 | 四 |
| ロ | 昌の德行 | 四二 |
| ハ | 武王の誓言 | 四四 |
| ニ | 周公旦の經綸 | 四四 |
| ホ | 周公の重農主義 | 四八 |
| ヘ | 周公の教育方法及其の他 | 五一 |
| 第三節 | 本章の總結 | 五三 |

第三章 漢民族の思想的淵源たる易學

第一節 易の起源

| | | |
|-----|---------------|----|
| イ | 易の創作せられたる時代 | 五五 |
| ロ | 天地萬物を包含せる易 | 五五 |
| ハ | 易より見たる社會相 | 五七 |
| ニ | 易の勃興せる時代と其の原因 | 六〇 |
| ホ | 易に現はれたる宇宙觀 | 六三 |
| ヘ | 易の人生觀 | 六六 |
| ト | 易に現はれたる鬼神觀 | 六九 |
| チ | 國民性に及ぼしたる易の影響 | 七一 |
| 第二節 | 儒教の精髓たる中庸 | 七二 |
| イ | 周末の思想界概觀 | 七二 |
| ロ | 中庸の姉妹篇たる大學 | 七五 |
| ハ | 中庸の眞髓 | 七七 |

第三節 春秋時代の鬼神觀

- 二 中庸の修養法……………七九
- ホ 儒教哲學の體系……………八二
- イ 鬼神に對する概念……………八三
- ロ 孔子の鬼神觀……………八七
- ハ 祭祀の意義……………八九
- ニ 易と卜筮……………九三
- ホ 漢民族の天命觀……………九七
- ヘ 本章の總結……………九九

第四章 周末に現はれたる二大思潮

第一節 儒教の成立

- イ 宗法主義的社會の崩壞……………一〇一
- ロ 防禦的態度に立ちたる孔子……………一〇七

第二節 道家思想の醞釀

- ハ 孔子の家系と其の人格……………一一〇
- ニ 儒教の繼承者……………一二三
- ホ 本節の總評……………一二六
- イ 古代に於ける民間の信仰……………一二七
- ロ 社會進化と精神上の不安……………一二九
- ハ 老子と道教……………一三三
- ニ 莊子及び列子……………一三五

第三節 列子と印度思想の影響

- イ 史記に現はれたる莊子……………一三六
- ロ 列子に現はれたる西方の聖人……………一三三
- ハ 本章に對する概評……………一三四

第五章 秦漢二朝の思想及び宗教

第一節 始皇の封禪と求仙

- イ 始皇の統一……………一三七
- ロ 方士の活躍……………一三九
- ハ 方士の起源に就いて……………一四一
- ニ 封禪と金人……………一四三

第二節 漢の高祖の定鼎

- イ 高祖の相貌……………一四五
- ロ 高祖の統一……………一四七
- ハ 闔達なる高祖……………一四九
- ニ 高尙なる縦横策……………一五一

第三節 西漢前期の治績

- イ 東帝の治法……………一五三
- ロ 宰相の責任……………一五五

ハ 各司の專責……………一五五

ニ 惠、文、景三朝の總評……………一五七

第四節 孝武皇帝と方士

- イ 董仲舒と魯の申公……………一五八
- ロ 丹砂、鍊金説の擡頭……………一六一
- ハ 西域の經略と封禪……………一六四
- ニ 武帝の功罪……………一六五

第六章 道教の建設時代

第一節 道教の初期

- イ 古代に於ける信仰……………一六七
 - ロ 民間古代の信仰……………一七二
 - ハ 讖緯學者出現の濫觴……………一七六
- 第二節 秦末漢初の思想界……………一七九

第三節 道教の開創

- イ 始皇の錯覺……………一七九
- ロ 漢初の思想界……………一八一
- ハ 儒學の復興……………一八三
- ニ 漢代の諸子……………一八五
- ホ 本節の概評……………一八八
- イ 道教の始祖張道陵……………一九一
- ロ 張道陵の生家……………一九四
- ハ 老子と道教の關係……………一九六
- ニ 本章の總評……………一九八

第七章 佛教の渡來と其の普及

第一節 佛教渡來以前の西域の交通

- イ 佛教東漸 就いて……………二〇一
- ロ 佛教傳來當時の狀況……………二〇三
- ハ 二僧の鬪法と譯經……………二〇四
- ニ 月支國の沙門支謙の來朝……………二〇六
- ホ 民間の信佛の嚆矢……………二〇七

第二節 三國兩晉時代の佛教

- イ 孫權の信佛……………二〇八
- ロ 魏の文帝と佛教……………二〇九
- ハ 兩晉時代の佛教……………二一一
- ニ 牟子の理惑論……………二一二

第三節 東晉時代の佛教

- イ 佛圖澄の來朝……………二二四
- ロ 慧遠法師の道化……………二二六
- ハ 佛教各宗の林立……………二二六

第四節 帝王の信仰

- 二 法顯の歸國と緒三藏の來化……………二三八
 - ホ 魏の太武と文成……………二四〇
 - イ 犠牲の禁止……………二三三
 - ロ 地論宗の創立……………二三三
 - ハ 達摩の渡來……………二三四
 - ニ 傅翕と曇鸞……………二三六
 - ホ 慧文と眞諦……………二三元
- 第五節 隋朝佛教の概観……………二三〇
- イ 天台の智者……………二三〇
 - ロ 文帝の護法……………二三四
 - ハ 文中子の三教合一論……………二三五

第八章 道教の大成と外來宗教

第一節 佛教の影響を受けたる道教

- イ 道教の宇宙論……………二三六
- ロ 潔齋の方法……………二四三
- ハ 黄帝の登場……………二四四
- ニ 李譜と冠謙之……………二四六
- ホ 隋の文帝と道教……………二四七

第二節 唐朝の勃興と外來宗教

- イ 唐以前の回顧……………二四八
- ロ 漢代の美術及び工藝……………二五二
- ハ 本節の概評……………二五四

第三節 外來宗教の傳來

- イ 祇教の傳來……………二五六
- ロ 摩尼教の傳來……………二五八

第九章 道、佛、儒三教の消長

第一節 唐朝道の教崇拜……………二六九

イ 唐朝初期の佛教……………二六九

ロ 佛經の翻譯に就いて……………二七〇

ハ 佛教の影響を受けたる道教……………二七四

第二節 道藏の編纂……………二七六

イ 則天武后の道經整理……………二七六

ロ 道藏編纂と其大成……………二七七

ハ 道教の分派……………二八一

第三節 儒教の隆盛……………二八三

イ 太宗の文學尊重……………二八三

ロ 唐朝に於ける詩學の大成……………二八五

ハ 史學の發達……………二八六

ニ 繪畫の發達……………二八七

ホ 書道の發達……………二八九

第四節 唐代に創立せられたる佛教各宗……………二九〇

イ 玄奘三藏の歸朝と法相……………二九〇

ロ 律 宗……………二九一

ハ 禪 宗……………二九一

ニ 淨土宗の建立……………二九三

ホ 華嚴宗の大成……………二九四

ヘ 眞言宗の傳來……………二九六

ト 本章の歸結……………二九七

第十章 宋代に勃興せる儒教の理學

第一節 太祖の崛起

- イ 五代の紛亂……………一九九
- ロ 新學勃興の動機……………三〇一
- ハ 韓退之の思想……………三〇四

第二節 宋儒の學說

- イ 宋儒の二潮流……………三〇〇
- ロ 程明道の認識論……………三〇三
- ハ 程明道の人性觀……………三〇四
- ニ 明道の識仁篇……………三〇五

第三節 程門の子弟

- イ 朱子の學說……………三〇七
- ロ 宋學を大成せる朱子……………三〇九
- ハ 朱子の辦學論……………三一一
- ニ 陸象山の哲學……………三二三
- ホ 門人楊簡の見たる象山……………三二六

第十一章 宋、元、明の思想及宗教

第一節 宋朝の思想及び宗教

- イ 宋朝の思想……………三二六
- ロ 宋朝の宗教……………三三〇

第二節 元の侵入と支那文化の西漸

- イ 元の勃興と文化吸收……………三三四
- ロ 支那文化の西漸……………三三六
- ハ 西藏の喇嘛教……………三三九
- ニ 元の世宗と喇嘛教……………三四一
- ホ 元の道教及び回教……………三四五

へ 太祖の外人登庸……………三四六

ト 本節の概評……………三四九

第三節 明代の思想及び宗教……………三五〇

イ 民族主義の發露……………三五〇

ロ 明の學界……………三五一

ハ 基督教傳來……………三五五

ニ 本節の總評……………三五八

第十二章 清朝の思想と宗教

第一節 清朝の入關……………三六三

イ 愛親覺羅氏の勃興……………三六三

ロ 清朝の入關と士大夫の氣節……………三六五

ハ 康熙帝の文學尊重……………三六八

ニ 康熙帝の學術整理……………三六九

第二節 清朝と各宗教……………三七二

イ 康熙帝と基督教……………三七二

ロ 科學に對する帝の態度……………三七三

ハ 雍正帝と佛教……………三七六

第三節 基督新教の傳來と同教の叛亂……………三八〇

イ バイブルの漢譯……………三八一

ロ 布教權の確立と民教の衝突……………三八二

ハ 回教徒及び太平天國の亂……………三八四

ニ 會國藩の討匪檄……………三九一

ホ 清朝の思想界概評……………三九六

第十三章 革命思想の淵源

第一節 明末清初に於ける革命思想……………四〇〇

イ 黄宗羲の學說……………四〇〇

口 顧炎武の日知録…………… 四〇五

ハ 王船山の黄書…………… 四〇八

第二節 清末の思想界と譚嗣同の哲學…………… 四一六

イ 三氏以後の學界…………… 四一六

口 譚嗣同の閱歴…………… 四一八

ハ 新政の提唱と殉難…………… 四二〇

ニ 譚嗣同の思想的立脚點…………… 四三二

ホ 本章の總評…………… 四三五

第十四章 孫文の提唱せる革命思想…………… 四三七

第一節 革命思想の普及…………… 四三七

イ 革命黨の組織…………… 四三七

口 革命思想の鼓吹…………… 四三一

ハ 東京に於ける革命黨…………… 四三三

ニ 三民主義…………… 四三五

ホ 國旗の制定と革命の進行…………… 四三八

第二節 革命後の政争と思想の勝利…………… 四四〇

イ 民國初年の混亂…………… 四四〇

口 第一、第二、第三の革命…………… 四四一

ハ 共和政體の復活…………… 四四三

ニ 吳佩孚の曹錕擁立…………… 四四五

第三節 孫文學說の概要…………… 四四七

イ 行易知難說…………… 四四七

口 三事を以て證と爲す…………… 四四九

ハ 革命黨の責任…………… 四五一

ニ 本章の概評…………… 四五五

第十五章 結論…………… 四五五

大支那大系

| | | |
|---|------------------------|----|
| イ | 歴史と思想及び宗教…………… | 四六 |
| ロ | 漢民族の歴史を構造したる思想と宗教…………… | 四九 |
| ハ | 後漢以後の思想及び宗教の概観…………… | 四〇 |
| ニ | 西洋思想と支那思想…………… | 四三 |
| ホ | 支那の思想及び宗教の將來…………… | 四三 |

—終—

大支那大系

第七卷

思想・宗教篇

水野

梅

曉

大支那大系

思想宗教篇

支那の思想と宗教

大支那大系

思想宗教篇

第一章 支那の國民性と其の社會組織

第一節 總論

予は、茲に支那に於ける宗教と、思想と云ふ問題で、本篇を起草するに當り、豫め讀者諸君の常識に訴へて置き度い問題がある。夫は如何なる問題であるかと云へば、支那の國民は果して如何なる特質を有し、又彼等の組織せる社會は如何なるものであるかと云ふ點を明かにする必要があるからである。故に、予は思想及び宗教を論ずるに先き立ち、出來得る限り簡明に支那の國民性と、其の社會組織の概要を説明したる後、支那に於ける思想及び宗教の問題を説明する事とした。

何となれば思想も、宗教も、要するに、國民性を基礎として發達したる、社會の上に顯はれたる一つの表現であるからには、支那に於ける思想と宗教を語るには、順序として其の國民性と社會組織を説明すると云ふ事が、評者に對する著者の義務であると思ふのである。

併し一口に云へば、支那の國民性であり、又其の社會組織であるが、之を歴史上よりみても、支那と云ふ國は、西洋紀元前五千年代より、種々の口碑を傳へてゐる老大民族である上に、其の民族

思想・宗教

支那の國民性と其の社會組織

大支那大系

の分布せられて居る地點は、現在に於ても東は朝鮮の國境より、西は西藏の高原を経て印度に其の境を接し、北は滿洲里に於て露西亞と其の境土を接し、南は佛領印度支那及び英領ビルマと接觸すると云ふ、極めて廣大なる版圖を有する上に、漢民族は、西藏族、回教族、滿洲族、蒙古族迄も包擁して其の中心勢力と成つて居る。

故に漢民族の思想は、即ち支那の思想ともなり、亦宗教ともなつて居るから、漢民族の種的傾向が、即ち予の所謂支那の國民性でもあり、亦其の社會組織の中樞をなすものであるから、本篇を草するに當りても、漢民族の思想を中心とし、其の他民族が齎らしたる宗教及び其の影響は、順次に之を説明することにした。

第二節 太古時代の風尚

1 緒言

凡そ世界の各種民族が、發達したる徑路を尋ねれば、如何なる民族でも、太古の事情を説明するに當りては、殆んど半神半怪の神話を以てするのが常であつて、遠く其の例を印度のベタの經典、

及び佛書の起世本因經、又は基督教の創世紀等に求むる迄もなく、近くは之を我が國の古典たる古事記等に徴しても、其の大部分は即ち奇跡的の神話が多量に含まれて居ることは、世人周知の事實である。然るに之に反して、支那の太古史は如何なる方法を以て、人文發達の徑路を示して居るか

と云ふに、勿論多少の神秘的色彩は帯びて居つても、其の大半は極めて健實なる事實の上に立脚して居ると云ふことは、支那民族の特質を研究し理解する上に於て、最も重要な點である。故に予は驀直に支那の太古史に現はれたる、人文發達の徑路より、之れを觀察することゝした。然れども、其の時代は西洋紀元を溯ること五千年と云ふ太古の事柄であつて、恰かも西洋文化の淵源が、亞弗利加のナイル河畔に發生したると殆んど同時代に於て、亞細亞大陸の中央たる黄河の上流に崛起したる民族であるから、嚴格なる意味に於ける史的考察としては、決して完全なるものと云へないが、其の太古史に現はれたる記事に依りて、彼等が抱懐しつゝありし思想の一端は、之れを窺ふことが出来るのである。

天皇氏歳首を立つ

天皇氏は『木徳を以て王となり、歳は攝提より起る、無爲にして化す』と云ふて居る。この木徳

支那の國民性と其の社會組織

思想・宗教

大支那系

とは、木、火、土、金、水の、五行の一徳を指すものであつて、此の五行思想は、漢民族が宇宙の現象を説明するに當り、總て萬物は陰陽の二氣を以て基調と爲し、此の二氣が互に相錯して、天地萬有を生ずるものとして居る。故に其の萬有の發生する徑路は、即ち木、火、土、金、水の五行と爲つて、現はれたと云ふ思想を示すと同時に、天あれば地あり、地あれば人ありと云ふ觀念より天地人の三才と云ふことを唱へて居る。故に太古の事象を説明するに當りても、其の王者を天皇氏と唱へ、其の徳は木徳として居るのである。

次に、歳は攝提より起ると云ふは、天地の間を、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌亥の十二支に分ち、寅の月を以て歳首としたと云ふ事であつて、要するに之れは曆の創作せられたる起源を説明する言葉であると同時に、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸の十干を作りて、之れを木、火、土、金、水の五行に割り當て、後世に至り年、月、日、時及び方位等を記載する符號とあつたと云ふ事を説明したものであつて、之れが果して歳首を寅の月としたか否やは疑問である。何となれば、帝堯の時代に曆を造つたと云ふ説と矛盾するからであるが、かゝることを一々論究する必要はないのである。

次に『無爲にして化す』と云ふのは、後世に於けるが如く、武力を以て民を壓伏したのでもなく又法律を以て民を強制するのでも無く、只だ陰陽の二氣に依りて生じたる五行の第一徳即ち木徳を以て起ちたる王者は、其の間に何等の作爲を用ひずして、民は自然に治められたと云ふことを形容した言葉に過ぎないのである。

ハ 地皇氏の繼承

天皇氏に繼いで起つた王者は、地皇氏である。此の地皇氏は天地自然の法則たる、木より火を生ずると云ふ原則に基いて、火徳を以て王となり、其の兄弟は天皇氏と同じく各々十二人有つて共に一萬八千才の壽を保つたと云ふて居るが、之れは天地自然の發達の順序として、天皇氏に繼ぐに地皇氏を以てしたと云ふことを、極めて簡明に説明したまでである。

ニ 人皇氏の九州分治

右の如くにして發達せる太古の社會は、人皇氏に至りて九人の兄弟を有し、其の兄弟は各々分れて九州に長となつて、百五十世を保ち、其の間の合計四萬五千六百年であつたと云ふて居るのは、要するに茫々たる宇宙の間に、多數の人類が棲息するに至りたる、極めて重大なる問題を右の如く

支那の國民性と其の社會組織

思想・宗教

大支那系

天然自然の發達として天地人の三皇の名を以て、最も簡単に説明すると同時に、天皇氏、地皇氏の世を経て、人皇氏となつたと云ふ瞬間に於て、九人の兄弟が各々分れて九州に長となり、治世を分擔したと云ふ家族的の共同性を閃めかして居る所に、漢民族の思想的特徴が現はれて居るのは、洵に面白味のある所である。

ホ 有巢氏の木居と木食

人皇氏の後を繼ぎたる有巢氏は、木を構へて巢を造り、木實を食ふたと云ふて居る。これは人類が穴居の域を脱して、漸く木居の時代に進んだと云ふ徑路を物語ると同時に、弱肉強食の俗を變じて、肉食以外に、植物性の食物をも攝取する事となつたと云ふ、社會生活の進化を示したものである。

ハ 火食の時代來る

爾後燧人氏の時代に至りて、始めて燧を鑽つて、人に火食を教へたと云ふて居るが、これは人類が、原始以來、萬物を生食し來たれる動物的生活を脱して、火力を用ひて、萬物を沸煮したる後に食すると云ふ、人類特有の社會に進みたることを物語るものである。されど以上の記事に對しては、何れも皆書契以前のことであるから、其の年代と國都とは、之を考へられないと云ふ言葉を以て、あつざりと片付けて居る所にも、亦漢民族の特徴が現はれて居る。

ト 太古時代に對する總評

右の如き簡單なる記述の中にも、漢民族の頭腦中に抱懷せる思想が、極めて堅實であると云ふことが分かるのである。何となれば彼等は悠久にして、而かも廣漠たる太古の事象と、王者の徳とを説明するに當りても、天皇氏は木徳を以て王となり、地皇氏は火徳を以て之れを代り、兄弟十二人は各々一萬八千歳の壽を保つたと云ふて、其の間に何等の事端の發生を述べて居らぬ所に、平和的の氣象を現はして居る。而已みならず人皇氏に至りては、兄弟九人が各々分れて九州に長となり、之れを分治する事百五十世の永きに亘つたと云ふて居る所にも、亦言外に平和的協調の意味を含くまし、有巢氏に至りては、土居せる人類が木居に進み、弱肉強食の民が、植物性の食物を攝ることとなつたと云ふ、生活様式の進化を示したる後、燧人氏に至りて、人類に火食を教へたと云ふ所に、劃然たる人類と、動物との分界點を示して居るのは、實に驚く可き着想と云はねばならぬ。

支那の國民性と其の社會組織

思想・宗教

然しながら、夫れはいづれも皆文字製作以前の事であるから、其の年代と國都の所在とは、之れを考へるわけには行かぬと云ふて、其の間には、何等神秘的の方面より、宇宙の發達せる徑路を説明しやうとして居らぬ所に、如何にも常識的の民族たることを示して居る。

第三節 三皇時代の民度

1 伏羲氏の建設せる社會

燧人氏に代つて、天下に王となつた太昊伏羲氏は、風姓であつて、其の形は蛇身人首と云ふて居るが、之れも見方に依りては、讀んで字の如き怪物には非ずして、穴居より木居に進みたる半獸半人的の原始生活から、稍々人間性を帯びたる生活に入らんとする社會の有様を、言葉尠なく云ひ現はしたものであると見れば、見られぬ事もない。が、茲に一つの注意すべき點は、伏羲氏は、風姓であつたと云ふて居る所に、始めて社會に生存せる人類が、一定せる姓名を用ひたと云ふことを物語るものであるから、一段の進化の跡が見らるゝのである。

伏羲氏は、又天地の變を見て、人事の變に應ずる、易の八卦、(即ち乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤)を畫し。又文字を作りて、大事あれば、大なる繩を結び。小事あれば、小なる繩を結んで、記憶に便したと云ふ、舊來の習慣を改め、文字に依りて記録することとし。又嫁娶の制を定めて、男女の兩性は、禮を以て結合し、夫婦と云ふ生活を営ましむることとした。と云ふて居るが、斯る生活を營む爲めには、勢ひ生活の資源を求むる方法を講ずるの必要を生じ、茲に始めて網罟と稱する大小の網を結んで、魚族及び禽獸を漁獵する方法を教へ。更に牛、羊、豚等の家畜をも養ふて、之れに庖厨を加へて調味したる、食物を攝らしむることとしたと云ふて居る。

然しながら、此の時代迄は尙ほ未だ一定の土地に定住して、農を專業とする社會は出現せられず。伏羲氏に繼ぎたる女媧氏、無懷氏等の十五氏の世を経て、炎帝神農氏の世に至りて、始めて農を業とする社會が現はれたと云ふて居る。

口 農業を創始せる炎帝神農氏

太古に於ける伏羲氏の社會的建設は、實に目覚しきものがあつて、文字の製作、婚姻の制定、漁獵、牧畜の開始等を始め、燧人氏の創始せる火食に一步を進めて、庖厨の術を教へたと云ふことは前述の通りなるも、伏羲氏以後の社會は、十五世と云ふ久しき期間に亘りて、何等進化の跡を示さ

大支那大系

す。炎帝神農氏に至りて彼等の社會は又一大躍進を見た。この神農氏は、姜姓の人であつて、其の形は人身牛首と云ふて居る。之れは人類の生活様式が、生食より火食に變じ。男女の兩性も亦狂意に野合せる風習を故め、一男一女が禮に依りて婚を訂し。自己を現はす爲めの、一定せる姓名を必要とする時代となり、人類としての社會組織は、略ぼ備はらんとするも、其の社會には未だ一定せる土地に安住して、農を專業とする風尙起らざりしため、其の生活の様式には、尙ほ半人半獸的の所があつた。故に其の時代の元首を形容して、人身牛首であつたと云ふたと、見れば見られぬ事は無いのである。

されど予は斯る閑問題の爲めに道草を取ることをやめて、炎帝神農氏が、人民に農業を營ましむる爲めに、木を斷つて耜を造り。木をたわめて耒を作りて、耕作に便せしむる事とした。是れが即ち漢民族が農業を開始する基礎となつたのである。

ハ 醫藥の發明と互市の開始

しかのみならず、炎帝は百草を嘗めて、人に醫藥の途を教へ、日中に市を開きて、有無を交換するの途を教へたる爲め、後世に至りても漢民族は、帝の徳を忘れずして、之れを稱するに神農氏を以てし、醫藥を業とするものは毎年冬至の日を以て、神農祭を行ふて、其の徳を謝して居る。

ニ 報祭の舉行

右の如く、百度其の揆を改めたる炎帝は、毎年十二月を以て、蜡祭と稱する祭祀を行ひ。百穀の田より生ずることを、天地の神に感謝せしむることとしたのである。而して此の蜡祭は、支那に於ける祭祀の起原であつて、之れより以前の漢民族は、未だ天地神明に對して、其の徳を謝する爲めに祭祀を行ふが如き事は無かつたのである。然るに帝は、百穀の豊熟するを見て、天地の神祇に感謝すると云ふ、天然自然の道德的觀念より溢れ来る、報恩の感念を祭祀と云ふ形式を以て、現すこととしたのである。が、しかし、之れは惟だ單なる報恩感念より出發したるものであつて、他の宗教にて行ふ祈禱又は懺悔等とは、全く其の意義を異にするものであるから、直ちに之れを宗教的の動作として取扱ふことは、聊か早計ではあつても、兎にも角茲に始めて、人類以上の天地神明に向つて其の徳を謝すると云ふ事となつたのは、漢民族が始めて人類以上の、或る物に對する憧憬の第一歩を示したるものなれば之れは思想上又は宗教上より見れば、極めて意義ある出來事であつたと云はねばならぬ。而して帝は陳より曲阜山東に移り、世を博ふること八世にして、五百二十年の後に

思想・宗教

支那の國民性と其の社會組織

滅びた。

ホ 黄帝軒轅氏の機械製作

平和なる支那も、人類が一定の土地に住し、一定の職業に従事することゝなつた關係から、炎帝の子孫第八世の時代に至れば、天下の諸侯は互に其の繩張りを争ふて、相ひ侵伐する事となつた。此の時に當りて、姫姓の人、名は軒轅と云ふ有力者が現はれ、炎帝八世と戦ふて之を滅し、取つて代つたのが即ち黄帝である。此の黄帝は、即ち有史以來の文化を大成して、彼等漢民族のために、偉大なる功業を立てた人である。故に漢民族は之れを尊んで、製作の聖人と爲すのみならず、現在の中華民國では、黄帝即位の甲子の年を以て開國紀元となし。本年（昭和五年）は即ち黄帝紀元四千六百二十一年と稱して居る。而して此れは我が國では神武紀元前の二千三十七年に當り、西洋では耶蘇紀元前二千九百六十七年の事である。

今試みに黄帝の製作せる各種の器械を列擧すれば、先づ天下不逞の徒を征する爲めに指南車を作り、方向を惑はずして一定の目的地に到達する事を得せしめたる以外に、舟車を造りて、水陸二者の交通を便にしたるを初め、日月星辰の象を見て天文の書を作り、師大撓（人名）をして、斗（北斗

星）建（尖端）を占ひ、甲子（十干十二支）を以て、曆を紀せしめ、容成（人名）に命じて曆を作らしめ。隸首に命じて算數を作らしめ、伶倫（人名）に命じて嶰谷の竹を取つて、十二律の笛を制せしめ。黄鐘の宮を以て六律、六呂を生ぜしめて、以て氣の應を候ひ。十二鐘を鑄て以て五音を和せしめたと云ふが如き、多方面に亘りて機械、工業、天文、曆數、音樂、律呂等の學術、技藝の創作、又は改善を試みて、人類の生活を高尚優美ならしめたと云ふ事實が、果して的確なる史實に合するや否やは別問題としても、黄帝の世に至りて初めて、鑄金の術が現はれたのを見ると、黄帝の治世は、要するに彼等漢民族の爲めには、一つの劃期的躍進を示した時代であると云はねばならぬ。

へ 三皇時代の概評

以上伏羲、神農、軒轅の三皇は、何れも皆漢民族が永久に忘るゝ事の出来ない、利用厚生の途を開きたる、所謂製作の聖人であつて、今日に至るも尙ほ支那文化の根柢は、皆三皇の時代に胚胎し來つたものとして居る。殊に軒轅氏の如きは、在位百十年間に亘りて、各種技藝の基礎を築きたるものなれば、祖先崇拜と懷古の念の旺盛なる漢民族は、上述の如き記録を、徹頭徹尾現實なる史實として、實生活の充實に没頭するものなれば、空虚なる哲理とか、又は神秘的なる宗教等には、

支那の國民性と其の社會組織

後世に至るも尚、耳を傾くるもの尠なくして、其の大部分の人民は、上記の如き記録に現はれたる事實に對して絶対信を抱き。一にも現實、二にも現實と云ふことを尊ぶ國民性を馴致したのである。

其の理由は云ふまでもなく、上述の如き歴史に據りて作り上げられたる、社會に成長したる國民なれば、如何なる場合に於ても、現實を離るゝ事は絶対に爲し得ないと云ふ、第二の天性が養はれ。之が自然に鞏固なる國民性と化したるものなれば、後世に到りて種々の思想家が輩出して、結局は孔子に依りて大成せられたる、儒教の倫理觀を基礎とする現世教以外の方面に走る事を好まず。數千年の久しきに亘りて、儒教が獨歩したと云ふ理由も、右の如く現實に重きを置きたる歴史教育の普及せる結果であると云はねばならぬ。

第四節 五帝時代の民度

1 少昊、顓頊、帝嚳の治世

黄帝の子、玄囂は、世に少昊金天氏と稱して居る。これは太昊伏羲氏の法を治めたと云ふので少

昊を稱へたのである。在位八十年にして、其の陵は今の山東省曲阜にある。

顓頊高陽氏は、黄帝の孫であるが、少昊に代つて帝位に即くや、今の河北省高陽縣に都し、神人を治め。南正重(人名)に命じて天を掌らしめ、之を神に屬し。火正黎(人名)に命じて地を掌らしめ、之を民に屬し。互に相侵すこと無からしめ。又曆を改めて、孟春を元とした。其の陵は今河北省清豐縣廣陽里にある。

帝嚳高辛氏は、炎帝の曾孫である。生れて神靈ありて、自ら其の名を云ひ。顓頊に代つて帝位に即き、今の河南縣偃師縣の亳に都した。其の陵は同省の滑縣に在る。

以上の記録は、極めて簡單ではあるが、顓頊の世に至りて、神人分活の事を記し、又帝嚳は生れて神靈あり、自ら其の名を云つたと云ふ記事が有るのをみれば、支那の思想界も人文の發達と共に、複雑なる社會状態を呈し來りて、人事以外に神事を語るものが現れたり云ふ一端を示したるものなれば、極めて簡單なる右の記録中にも、思想上より見れば、大に味ふ可き資料であると思はれる。

口 帝堯の聖徳と童謠

支那の國民性と其の社會組織

帝堯陶唐氏は、帝嚳の子にして、初めは唐に封ぜられたるも、即位の後は今山西省臨汾縣の平陽に都し、陵は今山西省荷澤縣にある。帝は五帝の中でも、最も有徳の君として、後世より模範的の帝王と仰がれて居る。其の功業としては、曆を改めて、日行三百六十六日を以て一周天と定め月行十二回を以て一年と定め。三年毎に一閏月を置いて、春夏秋冬の季節を正し、民に正確なる時を授けたるを初めとして、有徳の人舜を畎畝の中より抜いて、之れに天下の政を攝行せしめたる而已ならず。遂に其の位を實子丹朱に譲らずして、舜に譲ると云ふが如き、常人の爲し難き所をなして、民の爲めに福を造つたと云ふ明君である。

而して其の德行仁政は、尙書の堯典に詳記してあるから、茲には改めて之を述べないが、惟だ帝堯が如何に意を用ひて、天下を治めたかと云ふ治蹟の一端を述べれば、帝は在位五十年にして、天下が果して治まつて居るや否や、又億兆の民が己を戴くことを喜んで居るや否やを知らんと欲して之れを左右の者に問ふても、外朝の者に問ふても、在野のものに問ふても、誰も知る者がないので帝は一日微服して街頭に出でたるに、

我が丞民を立つるは、爾の極に匪ざるは莫し。知らず、帝の則に順ふ。
と云ふ童謡が歌はれて居るのを聞いた事がある。之れは天が萬民を生ずれば、必ず(爾堯を指す)

の如き聖徳の君を出して、吾等の極(標準)を示す者である。故に吾等萬民は、識らず、知らず、帝の則に順ふて、其の堵に安んずる事を得ると云ふ意味とを諺ふたのである。

ハ 擊壤の歌と華封人の壽

帝は又或る時微服して郊外に出で、一老人が哺を含んで腹を鼓ち、壤(樂器の名)を撃つて歌ふて居るのを聞かれた。其の歌は、

日出で、作し、日入つて息ひ。井を鑿ちて飲み、田を畔して食ふ。帝力何ぞ我にあらんや。

と云ふものであつて、萬民が悉く其の居に安じ、其の業を樂しみ嬉々として腹を鼓しつゝある有様を見たと云ふ逸話であるが、帝は又「華」と云ふ地方に行かれたる時、其の國境守備に任ずる封人が、帝をみて嘻、請ふ聖人を祝せんとて

「聖人をして壽富にして、男子多からしめん」と云ひたるに對し、帝は

「男子多ければ懼れ多く、富めば則ち事多し。壽ければ辱多し」と答へたれば、封人は更に、

天萬民を生ずれば、必ず之れに職を授くるものなれば、男子多きも之れに職を授ければ、何の懼るゝことかこれあらん。富めば人をして、之を分かつしめば、何の事かこれあらん。天下に道あれ

ば、物と與に皆昌へ。天下に道無ければ、徳を修めて間に就き。千歳にして世を厭へば、去つて上僊して、彼の白雲に乗じて、帝郷に至れば、何の辱かこれあらん。

と云ふたとの事である。之れは堯の徳が、各方面に行き渡つて居つたと云ふ事を示すと同時に、思想史の方面から觀察すれば、天下道あれば、物と與に昌へ、天下道なければ、徳を修めて間に就き、千歳にして世を厭へば、去つて上僊して、彼の白雲に乗じて、帝郷に到れば、何の辱かこれあらんと云ふ言葉の内には、早くも既に支那の思想界には、現實を超越したる仙人と云ふ、超人的の生活と、帝郷と云ふ別天地を想像して居つたと云ふ事を立證するものなるも、勿論此れは其の時代の實録でないから確實なる資料とはならないのである。

以上の外に帝堯の徳を讃する爲めには、彼等の神聖視する尙書の堯典にも、
欽明、文思、安安、允に恭しくして克く讓る。四表に光被して、上下に格る。克く俊徳を明かにして、以て九族を親しむ。九族既に睦しくして、百姓を平章す。百姓を昭明にして、萬邦を協和す。

と云ふて居る。此の言葉は、後世に至りて君徳を讃美する標準的の言葉と爲つて居るばかりでなく、現に我が今上陛下の元號「昭和」も是れが出典となつて居る。殊に本年（昭和五年一月三十一日）の宮中に於ける御講書初めには、鹽谷博士が此の一節を進講せられたと云ふ程に、重要視されて居る。

二 帝舜の徳化

帝舜有虞氏は、前に述べたるが如き、聖徳の君堯帝が、彼を田野の中から抜いて、攝政の重任を授けられたる而已ならず。遂に天下を以て彼に讓られたと云ふ事は、即ち支那の政治的にも、文化的にも極めて重大なる事件の發生であつた。しかしてかゝる大事を執行せらるゝ思想的の根據は、「即ち天下の君となるには、必ず萬人に優れたる盛徳がなければならぬ」と云ふ原則を、實地に示されたこと云ふまでのことであつて、別段の理由はないのである。

帝舜、姓は姚、名は重華、顓頊六世の孫と云はれて居る。其の徳行は考懐を以て聞え、今の山東省歴山の麓に耕した時代には、人々皆彼の爲めに其の畔を讓り。雷澤に釣をすれば、人々皆彼の爲めに其の居を讓り、河濱に陶器を造れば、其の器に苦窳だものを作る人が無くなつたと云ふ有様であつて、舜の居る所は、直ちに一の聚落となり。二年の後には邑となり。三年の後には、都となつたと云ふ程の感化力を持つた人であつた。故に堯帝在位七十年の後を承けて、即位したる後は、八

支那の國民性と其の社會組織

元、八愷、九官、十二牧等の文武官を設けて、天下を経論して、大なる治蹟を擧げ。民は五絃の琴を作りて、左の如き南風の詩を歌ふて、其の徳を謳歌した。

南風の葦するや、以て吾が民の愷を解くべく。南風の時は、以て吾が民の財を阜にすべし。

と云ふを見れば、平和の氣象と、太平の樂が溢れて居ることが判る。其の上、時に又景星とか、郷雲とか云ふ、天地自然の祥瑞が現れたと云ふので、百工（文武百官）は相和して、

郷雲爛たり、禮漫々たり、日月光華あり、旦復た旦

と云ふ歌を謠ふて、光天化日を樂んだと云ふことである。其の陵は今の湖南省寧遠縣の九嶷山に在る。

ホ 五帝の總評

以上は神武紀元前一九三〇年（耶蘇紀元前二五八〇年）より、同じく一五九五年に至る四百數十年間に輩出せる明君の下に、人民の生活は向上し、文化は發達したと云ふ跡を示すものなるが、中央には、司空、司徒、秩宗、士、共工、納言、后稷、虞、典樂等の九官の外に、八元、八愷等の文武官を置き、地方には四岳、十二牧等の官を置いて人民を統治し。不逞の徒を懲すには、五刑の制

度を定むると云ふ有様であつて、漢民族の形成せる社會は、五帝の世に當りて、其の面目を改め。殊に堯舜の世に至りて、特に光輝を放たれた。

第五節 太禹の鴻業

1 天下授受の大法確立す

漢民族の文化も、政治組織も、既に三皇五帝の世を経て、夏の禹王の世となれば、總ての面目が一新せられ、漢民族の理想たる『天下は天下の天下であつて、一人の天下ではない』と云ふ思想が發達して、有徳の者に非ざれば、天下萬民に君臨する事は出來ないものであると云ふ、大位繼承の法則が確立せられた。

然し此の法則の確立せられたのは、即ち帝堯が、位を舜に譲りたるに始まりたるものを、帝舜が再び之れを禹に授けたと云ふので、天下を保つべき君主の天職は、絶対に徳に依るべきものであつて、力に依るべきものでないと云ふことを、明確に政治の上に顯はされたるものなれば、後世堯舜二帝の如き禪讓は行はれないにしても、君主は徳に據る可きものである。と云ふ絶対的の條件が

支那の國民性と其の社會組織

確立せられたと云ふことは、支那の思想史及び政治史上より云へば、實に重大なる出来事であつた。

口 太禹の治水

然らば帝舜は如何なる理由に依りて、天下の大位を禹に譲られたかと云ふに、禹は姓は姒、名は文命と云ひ、其の家系は顓頊の後裔に當たり、舜を助けて支那大陸に彌漫せる大洪水を治むるに、十有三年の勞苦を重ねて、萬民を水澤の中より救ふた人である。故に其の勞苦は到底尋常一様のものに非ずして、治水の完成をみる迄は、其の家門を過ぎて、之に立寄りぬと云ふ程の眞劍さであつた。

故に太禹は、斯る鴻業を樹つるに當り、陸行には車に乗り、水行には舟に乗り、泥行には橇に乗り、山行には橇に乗り、九州を開いて、九道を通じ、九澤を陂と爲し。九山を渡つて、其の功を告げれば、帝舜は此の鴻業を嘉みし、百官を率ひて天下の政治を攝行せしめられたのである。

ハ 舜帝讓位の命

爾後帝舜は、太禹の鴻業に對し、左の如き命を傳へて大位を讓るの決心を示された。

帝曰く、格れ爾禹、泮水予を傲しめたるに、允を成し、功を成す。惟れ爾賢にして、克く邦に勤め、克く家に儉にして、自ら滿假せず。惟れ爾賢なるも、爾惟れ伐らず、天下爾と功を争ふもの無し。予乃の徳を懋なりとし、乃の丕績を嘉みす。天の曆數、汝が躬にあり。汝終に元功に陟れ。人心は惟れ危く、道心は惟れ微なり。惟れ精、惟れ一にして、允とに厥の中を執り、無稽の言は、聽くこと勿れ、弗詢の謀は、庸ゆること勿れ。愛すべきは君に非ずや。畏る可きは民に非ずや。衆は元后に非ざれば、何をか戴かん。后は衆に非らざれば、與に邦を守ること罔し。欽めよや。乃の有位を慎み、敬しんで其の願ふべきを修めよ。四海困窮すれば、天祿永く終らん。惟れ口は好を出し、戎を興すことを。朕が言は再びせず。

右は帝舜が天下の大位を其の實子に譲らずして、大賢禹に讓る時の命である。之れが即ち漢民族の理想が「君は民の爲めに其の極を立てるものである」と云ふ意義を事實に現はしたるものであつて、其の要諦は「惟れ精、惟れ一、允に其の中を執れ」と云ふ點に置かれて居る。故に右の文章は支那の思想を研究するには、極めて貴重なる資料である。

大支那系

は歸である。故に龍を視ること、猶ほ蠃蜒の如きものである。』と曰はれたので、龍は首を俛れて尾を低て逝いた。

と云ふ事であるが、此の一節は漢民族が天を敬しんで、一切の事象を天に托して疑はざるの信念を抱くと云ふ事を示したるものであつて、これは決して大禹一人のみの死生に對する觀念には非らざるも、斯る事變に遭遇したる際は、匹夫、匹婦でも泰然自若として、死を見る事歸するが如きものがあらねばならぬと云ふ教訓に外ならぬのである。されど此れが後世に於いて支那人特有の運命觀を發生したる起源となつたものと思はれるのである。

へ 禹貢の九州

大禹が舜を輔けて水を治めたのは、堯の在位時代の舜の攝政時代であつて、其の大功に依つて大位を讓られたることは前に述べた通りである。然るに大禹が十三年の永きに亘りて、治水の爲め天下を周遊し、地方の形勢、物産の状況に通曉したる結果治水の傍、天下を九州に分ち、各地より其の特産品を天子に奉らしむる品目及び租税の課賦率をも定めて上奏したる文章が、即ち有名なる禹貢である。故に此の禹貢は支那に於ける最古の地理書でもあり、又經濟書でもあつて、寔に

貴重なる文献である。

然れども、或る一部では、禹貢は勿論堯典、舜典等の文書は、悉く後儒が儒教的臭味を以て編纂したる偽書であると云ふ説も唱へられて居るが、假令へ此等の古典を初め總ての古史が、後人の偽作であつたとしても、春秋前後より前後漢を通じて、創作せられたものであるから、尠くとも二三千年を経たるものなれば、其の眞偽は別として、今日では此れ等の古書は、即ち吾人の知らんと欲する、支那の國民性を十二分に顯はして居るものなれば、科學的方法に依る史學、又は考古學的の研究資料には、不充分であるとしても、予は斯かる科學的研究方法に超越して、此れ等の古書を重視するものなれば、茲に禹貢の全文を要約して、左に抄録することゝした。

思想・宗教

一、冀州は、今の滿洲、遼河以南より、渤海の北海岸に沿ふて、今の河北、山西、河南の一部に亘る地域である。其の土は、白壤にして、其の賦は上の上を錯へ。其の田は、中の中である。二、兗州は、今の河北及び山東の一部に亘る區域である。其の土は、黑墳にして、蠶桑に適し。草木は繁茂す。其の田は、中の下なるも、其の賦は貞(正)しくして、作ること十有三載の永きに亘るも、同じである。其の貢は、漆、絲である。其の貢品を入れる、筐は、織り出したる文を用ひてある。

支那の國民性と其の社會組織

己に宅することを得。九山は刊して旅する事を得。九川は源を濂ぎ。九澤は己に陂(堤防)を爲くなり。四海合同することとなり、六府(官の府庫)は孔だ治まり、庶土は交に正しきものとなりたるも、財賦を慎みし、咸く三壤に則り、賦を中邦に成すこととした」と云ふ總括的の説明がしてある。

此の説明に依れば、全國の河濱は皆人民の居住に適するものとなり。山岳は木を切つて旅行者に便なる道路が開かれ。九澤には堤防を造つて乾土となり。四方の民は自由に皆會同する事を得て、官府は甚だ治まり。如何なる土地も皆正しくはなつたが、此の上は民に對する課税を慎しまねばならぬ。故に田の上、中、下、を分かちて、交通の便なる中部地方に課税して、邊疆には課税をせぬこととしたと云ふ意味を述べてある。

ト夏の二行政區劃

故に支那は、大禹の經論に依りて、其の領土も古代に比すれば、著しく膨大なるものとなり。其の貢賦も定つたから、茲に初めて一定せる領土内に、一定の人民が居住して、一定の租税を負擔する國家組織の完成を見たのである。されば禹は、更にこれを左の如き五服の行政區劃を定めて、

天下を駕御するに便したのである。

- 一、甸服、之れは天子の都する地方を基點としたる、五百里内を指したものであつて、其の中の百里内よりは『總』と稱する禾稟の付いた儘の租を納めしめて、稟は國馬の飼育に充て、二百里内よりは『鏗』と稱する禾穗のみを納めしめ、三百里内には『秸』を納めしめて、之れに勞役を課し。四百里内には『粟』を納めしめ、五百里内には『米』を納めしむることとした。
- 二、侯服、之れは甸服外の五百里を指すものであつて、其の中の第一の百里は『采』と稱して、一定のものを課せざる代りに、隨時王事に服せしめ。第二の二百里は『男邦』と稱して之れも亦王事に供せしめ。第三の三百里内は『諸侯』と稱して、天子のために四方を斥候せしむるものであつて、要するに此の侯服は王室の藩屏として、主として武力に依る守衛の任に當らしめたのである。

三、綏服、之れは侯服外の五百里であつて、其の内の三百里は、天子の文教を揆つて政を行はしむるも、二百里は武を奮つて天子を衛らしむることとしてある。

四、要服、之れは綏服の次の五百里にして、其の内の三百里は『夷』と稱して、平常の教を守つて天子に事へしめ。其の次の二百里は『蔡』と稱して、其の法を簡略にし罪人などを此所に放

大支那大系

つこともあつた。

五、荒服、之れは要服外の五百里であつて、天子の都を距る二千里外の五百里であるから、其の内の三百里は『蠻』と稱して法を以て拘束せず、徳を以て之れを懐け、來れば之れを撫し。去るものは之を追はず。次の二里は『流』と稱して、其の他の流移に随つて、之れに政聲を布かんとするものであるから、殆んど之れは化外の民である。

故に此の五服は、一つの行政區劃ではあるが、其の目的は主として、交通關係に重きを置いて、人民の負擔に輕重を附すると同時に、政教を布くにも、其の民度に應ぜしむることとし、劃一的の制定を避けて、其の宜しきに随はしめたものである。

而して此の五服は、一方の尖端より一方の尖端に至るには、相距ること五千里の遠きに達して居るが、果して其の當時にありて、今日の如き劃然たる五百里を以て、一區劃とすると云ふ制度が行はれたかと云ふことは、勿論大なる疑問とするも、之れを領土の整理に對する理想として觀る時は實に巧妙を極めたものであつて、漢民族の組織的頭腦の精緻なりしことを知るに足るものである。

さもあらばあれ、禹貢の最後の結論には、『東は海に漸り、西は流沙に被び、朔と南に聲教を暨ほし。四海に訖つた。故に禹は玄圭(天色の珠)を錫げて、其の成功を告げた』と云ふ言葉を以てして

居るのを見ると、其の統治權の及ぼされたる範圍は、前代に比すれば大なる擴大を見たと同時に各地よりの貢品、及び其の貢品を盛る容器、及び包装までが規定せられたのであるから舜の末年は支那の社會も、漸く國家的の組織と、文化を有する事となつたと云はねばならぬ。

思想・宗教

支那の國民性と其の社會組織

第二章 武力に依る政治革命の發生

第一節 成湯の革命

1 夏桀の失徳

前に述べたるが如き、大禹の盛徳鴻業も、其の後十有七世を(四百三十二年)經て、桀の世に至つて、終を見る影もなく滅亡することになつた。此の桀と稱する第十七世の君主は、民のために其の極を立てると云ふ原則と背馳して、暴逆の限りを盡して人民の怨府となり。成湯の革命を誘致した。其の年代は神武紀元前一四九九年(西洋紀元前一八〇三年)であつた。而して此の成湯の行ひたる革命は、天に代りて民の爲めに暴を除くと云ふ、政治的意識を以て行はれたるものであるから、臣を以て君を殺すと云ふ感念は毫末も存在せず。徳を失ひ民を毒する獨夫紂を誅すると云ふ思想を以て、事に膺りたるものであるから、其の心理状態は一言にして之を盡くせば「暴を除き良を安ずる」と云ふことに歸着するものである。

故に武力を以て決行する殺伐なる革命も、彼等漢民族よりみれば、堯舜が禮を以て行ひたる禪讓と、其の結論に於て何等選ぶ所が無いと云ふ觀念である。故に徳を以て民を治めたる堯舜も聖人であるが、武力を以て民を救ふた成湯も亦聖人であるとして、之を迎ふるものであるから、支那人としては成湯の革命は、恰も大禹が一生の心血を注いで、天下を経綸したると同一なるも、只其の手段が一は文を以てし、一は武を以てしたと云ふ相異があるのみであると云ふのが、即ち彼等の革命に對する觀念である。故に支那民族自身より見れば、堯舜二帝が確立したる天下授受の大法は、成湯の革命に依りて破壊せられたのでなくして、却つて之を確實に裏書せられたと云ふのが、支那人の政治に對する根本的の意識である。

口 成湯の人格

湯、姓は子、名は履、其の先は契と云ふて、帝嚳の子である。堯に仕へて司徒(教育を掌る)となり、商(地名)に封ぜられてから、八世を経たる名門の後である。然るに彼を呼んで成湯と云ふのは、即ち武力を以て殘を除き、虐を去る事に成功したと云ふので、之れを成湯と稱するに至つたのである。湯は、始め毫に住せし時、伊尹と云ふ賢人を聘して、之れを夏の桀王に薦めたるに、桀は

武力に依る政治革命の發生

不徳にして此の賢人を用ひされば、伊尹は再び湯の許に歸つた。然るに當時に於ける桀の徳は益々荒んで、諫者關龍逢（人名）を殺したれば、湯が人を派して此れを弔問せしめたと云ふので、桀は怒つて湯を捕へて、夏臺に幽閉した。

爾後幾何もなく宥されたる湯は、出で、人が綱を四方に張り、「天より降り、地より出で、四方より來る者は、皆我が綱に掛れ」と祝するものあるを見て、「嘻、之れを盡せり」とて、即ち綱の三面を解ひて、左せんと欲せば左せよ。右せんと欲せば右せよ。命を用ひざる者は、我が綱に入れ」と祝したと云ふことを聞いて、天下の諸候は「湯の徳至れり。禽獸に及ぶ」と云ふて之れを稱讚した。其の後湯は伊尹を相として、桀を伐つて之れを南巢地名の野に放ち。諸候は湯を尊んで天子を仰ぎ殷の天下となつた。其の時代は神武紀元前四九三年（西洋紀元前一〇六年）であつた。

ハ 湯の革命宣言

湯は、伊尹を相として桀を伐ち鳴條の野に戦ふに當り、湯誓なる一文を草した。此の湯誓は、即ち今日の所謂革命宣言でもあり、又革命の指導原理でもあるから、其の大意を左に意譯することゝした。

王（湯）曰く、格れ。爾衆庶は、悉く朕が言を聞け。台（我）小子敢て爾を稱（擧）ぐるには非ずして、有夏（桀）罪多きを以て、天より命じて、之を極せしむるものである。今、爾有衆は、我后（桀）我衆を恤まず。我が穡事（農事）をすて、夏に割正（剝削）せらる。予は、惟だ爾の衆言を聴き夏氏罪多きを見て、上帝を畏れて、敢て之れを正さざるを得ないのである。今汝等は夏の罪なりと云ふも、台（我）は如何んぞ之れを座視せらよふ。
夏王は、衆力を率ひて遏め。夏邑を率ひて割かんとするも、有衆は率ひ怠つて、協はずして、時日曷か喪びん。予（有衆）は汝（桀）と皆亡びん。と曰ふて居る。夏の德斯くの如くなれば、今朕は必ず行（征討）にかん。

爾 尙くば、予（湯の自稱）一人を輔けて、天の罰を致せよ。

予は大に汝に賚（賞）へん。爾信（疑ふこと勿れ）ぜざるなし。朕は言を食まず。爾誓言に従はずんば、予は則ち汝の孥（妻子）までを戮して、赦す俛あること勿らん。

と云ふて居る。其の意味は「爾衆庶は來つて、朕の言を聽け。予は敢て亂を好むものではないが、桀の罪が多ければ、天が予に命じて之を極せしむるのみならず、今爾等有衆は我が君桀は我が衆を恤まずして、我農事を棄てしめたる上に、多數の租税を剝削して我等を滅ぼさんとして居る。

武力に依る政治革命の發生

然るに予は夏氏に罪あるを聞いて敢て之を正さざる夏の罪に非ずして、予が天上より受けたる命に背くものである。然るに夏王は、衆力を用ひて益々勞役に服せしめんとするに、爾等有衆は、相率ひて怠業状態に入つて、非協同的態度を取つて、『斯くの如くにしては、我等は何月かは必ず滅ぶるものであらうが、我等は桀と共に滅びるであらふ』と云ふまでに夏の徳は衰へて居る。故に予は必ず行つて、之れを伐たんとする者なれば、冀く爾等有衆は、予一人を佐すけて、天の討伐を致せよ。予は大に爾等の功を賞して、決して食言しない。爾等は予の言を信ぜよ。若し予の誓言に従はざれば、予は爾等の妻子までも誅戮して、赦さぬ』であらふと云ふ意味を述べて居る。

二、仲虺の辯明

この湯王の革命宣言は、其の圖に中りて、天下の人心を失ひたる夏の桀王は滅ぼされた。しかしかゝる武力を以てしたる荒療治は、如何に支那でも世態人情の上には、幾分か不穩當の點があると云ふので、伊尹と共に湯を輔けて、大業を成さしめたる左相仲虺は、後世之れを以て口實となし。天下を亂る者の出で來らんことを恐れ。左の如き辯明書を作つて、天下に發表した。

嗚呼、天、民を生ずれば、欲有れば、主無ければ、則ち亂れるものなれば、天は聰明なる者を生じて、之れを又めしむるものである。然るに有夏は昏徳にして、民を塗炭に墜るれば、天は則ち王(湯)に智勇を錫ひ。萬邦を表止して、再の舊服を續ぎ、茲に厥の典に率(従)ひ。天命を奉じたのである。

夏王は罪あるに、上天を矯誣ひて、以て命を下に布くも、帝(上帝)は、之れを用て滅とせず。商(殷の舊號)を式て、命を受けしめ。厥の師を爽にせしめた。

賢を簡(賢を疎略にするの意)にし、勢に附くものは、寔に繁として其の徒(其の數多きを云ふ)あるも、肇に我(仲虺の自稱)は、有夏(夏の治下)にありしを云ふに邦せしに、苗の莠あるが如く粟の秕あるが如く、小大共に戰々として、辜なくしても懼れざるを得なかつた。矧や、予が徳言の聽聞するに足れるものあるに於てをや。

惟れ、王(湯)は聲色を邇かづけず。貨利を殖せず。徳を懋むるものには、懋むるものを官となし。功を懋むるものには、懋むるものを賞し。人を用ゆるには、惟れを已の如くにし。過を改むるに吝ならず。克く寛に、克く、仁にして、彰に兆民に信ぜられた。

葛伯の如きは(夏の諸侯)、乃ち仇に糧するが如く(糧を征すること、仇敵の物を奪ふが如き暴政を行ふもの)なるを以て、初めて葛を征したるに、東征すれば、西夷怨み。南征すれば、北狄

武力に依る政治革命の發生

怨みて、「奚すれぞ、獨り予を后にする」と云ふて、徂攸の民は、室家相慶して曰く「予が后（湯王）を俟つ、后来れば、其れ藹せん」と。民の商を戴くこと、厥れかくの如く、舊きものであつた。

賢を佑け、徳を輔けて、忠を顯はし、良を遂しめ。弱を兼ね、味を收め、亂を取り、亡を侮どり、亡を推し、存を固ふすれば、邦乃ち昌となり。徳日に新になれば、萬邦惟れ懷くものなるも、志自ら滿すれば、九族すらも離るゝものなれば、王（湯）は懋めて、大徳を昭かにし。中を民に建て、義を以て事を制し。禮を以て裕を後昆に垂れんとするのである。

予れ（仲虺）は、能く自ら師（衆）を得るものは、王となり。人の已に若くものなしと謂ふものは亡び、問ふことを好めば、則ち裕になるも、自ら用ゆれば、則ち小となるものであると云ふことを聞いた。

嗚呼、厥の終を慎むこと、惟れ其の始の如くにし。有禮者は之れを殖（封）し。昏暴者は之れを覆へし。欽んで天道を崇むれば、永く天命を保んずるものである。

此の辯明は、随分苦い所も有るが、其の究極する所は「徳日に新にして、中を民に立つれば、民が之れを信ず」と云ふにあつて、其の思想的根據は飽く迄も「暴を除き良を安んずると云ふ事を反

覆したに過ぎないのである。

しかし此の時代迄は、大體に於て宗法主義を以て立ちたる社會であつても、未だ後世の如く所謂忠君思想が、擡頭して居らぬ時代であるから、革命と云ふ行爲が稍々人情に於て缺くる所があると云ふよりは、寧ろ後世の奸雄が、湯を以て口實として、天下を亂すものあるを懼れて、之れを妨止せんとするのが主眼であつたことは、本篇の前文に明かである。しかし本篇は、後世に於て忠臣義士を出す淵源ともなり。又亂臣賊子に口實を與へる動機ともなつて居るのを見ると、本篇は忠臣義士、亂臣賊子に對する分水嶺の觀を爲すものである。

第二節 武王の革命と周公の經綸

1 武王の革命

前述の如き湯王の徳を以て築かれたる殷の天下も、世を経ること三十一世、年を閱すること六百二十九年にして、周の天下となつたのは、神武紀元前四六二年（西歴紀元前八一三年）であつた。而して此の夏を亡ぼしたるは湯王の三十一世の孫、名は受（諡は紂）は、有らん限りの暴虐を逞しふし

武力に依る政治革命の發生

たる爲め、終に姓は姬、名は發(後に諡して武王と云はれた)に依つて、恰も湯王が桀王に對して行ひたると、同様なる革命的手段を以て、亡ぼされたのである。

發の家系は堯の功臣后稷十六世の孫であつて、彼の父、名は昌が、殷の徳が衰へたる時代に當りて、自ら其の徳を修めたるに依り、天下の諸侯は悉く之れに歸し、昌を呼ぶに西伯を以てして、其の盟主と仰ぎたるも、昌は天下を三分して、其の二を保ちつゝ、尙ほ殷に仕へた。然るに紂は昌の徳望を憎んで、之れを羌里に捕えて幽囚したれば、其の人望は益々盛んとなりたる上に、賢人呂尙を得て相となし、遂に其の子發が紂を伐つて、天下を統一するの基礎が築かれたのである。故に發は天下を統一して、國を周と號するに至つて、之れを尊んで「文」と諡した。故に後世の人は、昌及び發の父子を呼んで、文武の二王と並稱するに至つた。

口昌の德行

昌は如何にして、斯くの如き天下の人心を得たかと云ふに。その祖先の後稷が農事に精通し、後世に至つては農業の神と稱せらるゝ程の家系に成長したる關係より、彼の家庭は歴代農業に力を用ひて、相當なる地盤を有したる上に、其の民に教ふるに禮讓を以てしたので、足一度び周の地に入

れば、耕者は皆畔を譲り、途に長者に逢へば、幼者は必ず之れに途を譲ると云ふ有様であるから、虞、茜の二國の君が、互に土地を争ひ。之れを西伯に訴へん欲して、周に行きたるに其の風俗の厚きを見て、二君は大に之れを恥ぢ、我等の争ふ所は、即ち周人の恥とする所であると云ふて、西伯に見えずして歸り、共に其の田を譲つたと云ふ事があつて、夫れが大なる評判となり、漢南の四十餘國は、皆西伯を以て受命の君と稱するに至つたと云ふ事である。

之れに反して、紂は淫荒度無く賢者の諫めを用ひずして、之れを殘殺すると云ふ有様なれば、周が兵を率ひて殷都の附近に迫るに及び、殷の賢臣祖伊は、紂に對して「天子よ、殷の命は已に訖りて、格人(聖人君子)元龜(卜筮)も、敢えて吉を知ること無きに至つた。之れは先王、我が後人を助けざるには非ずして、唯だ王(桀)が淫戯して、自ら斷つたのである。故に天の我を棄て、康食せしめざるは、天性を慮らず、典に迪率せざるを以て、我が民が亡びんことを、欲せざるものなくして、天はなんすれぞ、威を下さざるや、大命攀(至)らざれば、今王は厥れ我を如何するものぞと言ふて居る」と告げたるに、紂は「嗚呼我の生たれるは、命天に在るに非ずや」と答へたれば、祖伊は「嗚呼爾罪多くして、上天に參在するものなれば、爾好く命を天に責むることを得るものならんや、殷の亡ぶるは、爾の功(罪)を指して、爾の國に戮せらるゝに非ずんばあらず」と答へたと云ふ

武力に依る政治革命の發生

を見れば、殷の亡びたるは、武王の革命を待つ迄もなく、既に亡びざるを得ない勢であつた。

ハ 武王の誓言

右の如き形勢の下に文王の遺業は、其の子發に依りて繼承せられ、文王薨去後の十三年に至りて發は天下の諸侯を孟津(今の河南)に會し、期せずして會したる八百の諸侯と共に、紂を討つたと云ふことである。此の十三年と云ふ説には、古より異論多くして或は文王薨後の十二年であると云ふ説も有り。又文王の薨後に武王が即位してからの、十三年であるとも云はれて居るが、予はかゝる考證を試みんとするものには非ずして、武王が諸侯を孟津に會するに當りて發したる「泰誓」を左に意譯することとした。

王(武)曰く、嗟我が友邦の家君越(及)我が事を御する庶士よ。明かに誓を聽け。

惟れ天地は、萬物の父母にして、惟れ人は萬物の靈である。宜に聰明なるは、元后にして、元后は、民の父母である。今商王受は、上天を敬せずして、災を下民に降し、沈湎して色を冒り、敢て暴虐を行ひ、人を罪するに族を以てし、人を官するに世を以てす。

惟れ官室、臺榭、陂池侈服して、以て爾萬姓を殘害し、忠良を林、爰し、孕婦を刳剔するを以て

皇天震怒して、我が文考に命じて、肅(謹)で天威を將(行)はしめられたるに、元勳未だ集らざるを以て、(文王の大業を遂げずして崩じたるを云ふ)肆に予れ小子發は、爾友邦の家君と共に、政を商に觀たるも、惟れ受は悛むる心固くして、乃ち夷居(平居)して、上帝神祇に事へず、厥の先宗の廟を遺て祀らず、犠牲、黍盛(祭品)は、凶盜に既(盡)さるゝも、乃ち吾に民あり。命ありと曰ふて、其の侮(慢心)を懲らすことをしない。

天は下民を佑けて、之れが君と作し、之れが師と作すものなれば、惟だ其の克く上帝を相けて四方を寵綏するものなれば、罪あるも、罪なきも、予れ曷んぞ、敢て厥の志を越ゆることあらんや。力を同ふすれば徳を度り、徳を同ふすれば義を度るものなるに、受は臣億萬あるも、惟れ一心である。商の罪は、貫盈せるを以て、天命じて之れを誅せしむるものなれば、予れ天に順はざれば、厥の罪惟れ鈞(受と均)からん。

予れ小子、夙夜祗懼れ、命を文考に受け、上帝に類(祭の名)し、家土に宜(祭の名)し、爾の有衆を以て、天の罰を底(致)すのである。天は民を矜れみ、民の欲する所は、天必ず之れに従ふものなれば、爾 尙は、予一人を弼け、永く四海を清めよ。時なるかな、失ふ可からず。

之れは、即ち武王革命の第一宣言書であるが、更に第二、第三の泰誓あるも、茲には之れを略す

武力に依る政治革命の發生

大支那大系

ることとする。

革命成功の後の武王は、乃ち武を偃せ、文を修めて、馬を華山の陰に牧し、牛を桃林の野に放つて、天下に再び武を用ひざるの概を示し、又紂が民より剝削したる鹿臺の財と、鉅橋の粟は、これを散じて四海の民を賑はし、紂が拘禁せる殷の賢人、箕子の囚を解き、紂を諫めて殺されたる、比干の墓を封じ、商容の住せし閹門には、之れを表彰する等の方法を以て、天下の耳目を一新し、然る後に周の宗廟及び天地山川等を祭つて、武功の成就せる事を告げて居る。

二 周公旦の經綸

周公旦は文王を父とし、武王を兄とする周室の懿親にして、武王の子成王の爲めには叔父に當る人であるが、殷を亡ぼしたる武王は、日尙ほ淺く許多の經綸を貽して崩ぜられた。後の幼主成王を輔けて、自ら攝政の位に上り、周室八百年の基礎を固めたるのみならず、三皇は五帝以來の文物制度を參酌して、特殊の經綸を施したる人であるから、周公は漢民族の生みたる、唯一無二の大政治家であつた。故に其の經綸を説明するに當りては、尠くとも周禮、儀禮等の諸書を引用せねばならぬが、斯くの如き方法を以て、之れを説明することは、本編の如き短篇の能くする所でないから、

思想・宗教

茲には只周公は民を治むるには、如何なる方法を以てしたかと云ふ概況を説明するに止めて置く。周の官制の根本は、重きを地方制度に置き、之れを郷、遂の二者に分ち、之れを大司徒及び遂人の下に管掌せしめて居る。其の郷と云ふのは、五家を比と爲し、五比を閭となし、四閭を族となし、五族を黨となし、五黨を州となし、五州を郷となし。遂は、五家を隣となし、五隣を里となし、四里を鄙となし、五鄙を縣となし、五縣を遂となすものであつて、此の制度は、即ち一方に於ては、地方自治の根源ともなり、又軍旅編成の基本ともなつたものであるから、散漫せる支那の社會は、此の時に於て始めて、小は隣里、郷黨より、大は天下國家に至るまでの人民を、打つて一丸と爲すことを得て、部落々々に割據して、酋長の如くなりしものが、勢力を占めたる社會の風尚は、茲に一變せられたのである。

又學術の方面に於ては、詩、書、禮、樂等の典籍を編纂せられ、神明に對しては、天地、日月、星辰、風雨、雷電、山嶽、河海等の萬有を祭るの式を定め、又人の死して鬼となりたるものに對しては、宗廟を建て、之れを昭穆の序に分つて、歳時に祭祀する事とし、王室の典禮としては、吉凶に應じて大禮を行ふは勿論、曆を作つて天下に正朔を分かち、爵祿の賞罰の權を天子に收めて之れを行ひ、諸侯及び諸臣の喪に對しても亦弔諡の典を行ひ、王后世子に對しても王位の繼承は勿論、其

武力に依る政治革命の發生

の身分に對する待遇方法を定め、中央官府の外に、王室に對する官府を設けて、官中、府中の別を明かにしたと云ふが如き、實に破天荒なる大改革を行ひ、漢民族の組織せる社會は、此の時に至つて始めて統一ある國家としての形體と、實質とを具へることゝなつたのである。

然らば其の中央の官制は如何なる方法を以てしたかと云ふに、中央には天官、地官、春官、夏官等の諸官を以て、一切の組織を編制せしめ、又之れを監督する方法を定め、地方にありては先ず其の行政區劃を定めて、之れに地方官を置いて、一切の職務を變理せしめた。其の主眼とする所は、前にも述べたるが如き、郷、遂の方法を以て、地方自治を行はしめたのである。

殊に戸籍の編成に對しては、最も慎重なる注意を拂ひ、獨立せる公民と、奴隸との區別は勿論、異種族の歸化したる者。又は捕虜等に對する方法を定め、警察に關しては、身分又は職業等に對して、各之れに適應するの機關を設け、其の取扱ふ事項の中には、政治に關するもの、公安に關するもの、交通に關するもの、風俗に關するもの等に分類し、保健、醫藥に關する規定をも設けると云ふ有様であつた。

ホ 周公の重農主義

周室は由來農を基礎として立つた王者であるから、農業に對しては特に意を用ひて、之れを保護したるは勿論であるが、土地に關しては「普天の下、王土に非ざるはなし」と云ふ主義を以て、全國の土地は全部之れを王者の所有とする觀念の下に、一般の農民には一定限度の土地を定めて、耕作せしむるを以て原則とし、特殊のものには特殊の田を置いて、之れを耕さしめた。例せば、士田は、士大夫の子に依りて之れを耕され、賈田は、市に在る賈人に授けられ。官田は庶人の官に就きたる者の家族に耕さしむると云ふが如きものであつた。従つて牧畜を業とする者には、牧田又は牛田と云ふが如きものを給し。官田は無税とするも、普通一般の農夫其の他に對しては、一定の租税を課したのである。其の外に又園圃、山林、藪澤、宅地等を區分して、各々之れが利用の方法を講じ。園圃には必ず果樹を植へしめ。山林、藪澤には、各々之れを利用するに適當なる職司を設けて有効に使用せしめたものである。例せば、角人、羽人、掌葛、掌染、掌炭、掌茶、掌蜃等を置いて漁獵は勿論、有用植物たる纖維、染色、茶其の他のもの、栽培、又は採收に當らしめたる外、宅地には必ず桑を植へしめて、人民の被服の用に供せしめ。或は井田の法を設けて、八家に九方形の土地を與へ、八家をして之れを共耕せしめ。其の一方形の土地の收入を公家に納めしむると云ふが如き方法も行はれたと云ふことである。遂には又必ず遂溝を設けて、灌溉に便せしめたる外、五穀の

武力に依る政治革命の發生

栽培は勿論、牧畜に關しても、種々方法を設けて六畜の飼育を奨勵し、又は礦物の採收をも行はしめたのである。

右の如く庶政並び行はれたる結果、工業は發達して、金石、珠玉、羽革、象牙等に至るあらゆる材料を利用して、日用の諸器物は勿論、裝飾又は祭祀等に用ひる器具を製作せしめたのである。故に社會の進歩と共に、商業の發達を促がし、物々交換の域を脱して、貨幣を使用するの風尚が行はれて來たので、大宰の下に、小宰、司市、質人、泉布等の諸官を設けて、商業の發達を促すと同時に、一面には市場の取締をなし、又市場に滞貨多き時は、司市は、泉布と稱する財政官と協議の上之が買上げをなす事もあり。又物價を公定して、市價の暴騰、暴落を取り締らしめたのである。

右の如く商業が殷盛に赴くと共に、貨幣の制度も茲に一變して、金玉を貨本位となす貨幣と、布帛を以て製する賄と稱する補助貨を以て、市場の周轉に便せしめたので、殷代より使用せられたる獸骨、又は貝類等を以て、貨幣とするの風尚が一變すると共に、度量衡の制度も當然一定せられたるべき筈なるも、其の標準が如何なるものであつたかと云ふことは、周官にては之れを知る事を得ず、惟だ司市は、量度を司ると云ひ、質人は其の度量を同じうして淳制を一にし、巡つて之れを考へ、犯す者あれば、擧げて之れを罰したと云ふのを知るのみである。要するに周公は、重農主義を本位としたる以外に、商工業の發達にも心を用ひたと云ふ事が明かである。

周公の教育方法及其の他

由來支那の君主は宗法主義的社會の主長であるから、天子は即ち萬民の師表として、祭政一致の權力を有するものなるを以て、當時に於ける教育は、皆官府に於て行ふものなれば、教育の恩澤に浴するものは、皆中流以上の子弟であつて、下層社會の人民は之れに與らず。所謂君子の徳は風、小人の徳は草として、小人は君子の徳風に靡かしめると云ふことが、教育其の物の目的であつた。

故に其の課程に於ても、日常倫理を基本としたる、平明淺近の實踐道徳を教ふるに止まり、其の終局する所は、天地の間には、上帝と稱する一種の主宰者があつて、萬物を統制するものなれば、之れを崇拜するは勿論であるが、其の外にも亦偉人の魂魄とか、又は祖先の靈魂とか、冥々の内に存在して、吾人に禍福を與ふるものなれば、吾人は報本反始の意味に於て、祭祀の禮を忽せにすることは出来ないといふのが、實踐倫理の基調である。故に學に大小の區別があつても、教育其の物の區別には非ずして、大學には貴族、大人の子弟が入學し、小學には士庶人の子弟を入學せしめたと云ふに過ぎないのである。

従つて其の教化の主體として、最も力を注ぎたるものは、即ち禮儀であつた。而して此の禮儀には、上は王室の典禮、祭祀、又は朝堂の儀式等は勿論、下つては郷黨の間に於て、長幼の序を正す爲めの郷飲酒の時に於て禮を初めとし。あらゆる場合に於て社會の規律と、秩序を失はざらしむる爲めの禮教を基本とする教育なれば、其の課程の配列にも、禮、樂、射、馭、書、數と云ふが如き順序を以てし、先づ禮を以て體を正し、樂を以て心を和らげしむると同時に、衆人の行動を一定せしむることとし、次に射馭の二者を置いて、武藝を學ばしめて、一國又は一郷の安全を圖らしむることとし。之れに必要な文字及び數學を學ばしむるものとなつて居る外に、六儀と稱する祭祀、賓客、朝廷、喪紀、軍旅、車馬の各種類に亘りて、あらゆる場合に、禮を主としたる行動に出でしむる爲めに教育したのである。故に教化を掌る大司徒(官名)の主管事項は、六德(智、仁、聖、義、忠、和)、六行(孝友、睦、婣、任、恤)、六藝の三者を兼備したる人格者を養成するにあつた。

其の外、軍旅、救恤、刑罰、財政其の他各般の制度を確立し、殊に父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の五者を人倫の基本として、冠、婚、喪、祭の四禮を定めたることは、恰も今日の法治國に於いて、あらゆる問題を法律の規定に基づきて處理するが如く、周公は茲に一の禮治國を造りて、漢民族が古來より一種の徳目に依りて、社會共同の安全を保ちつゝありしものに對して、周公は更に

一步を進めて、精神主義を制度化したる徳治主義より、之れを行爲に顯はさしめしと欲して、社會の改造を企てたのが、即ち周公の全經綸であつた。故に彼等漢民族は、茲に周公を得て始めて鞏固なる、宗法主義の國家と社會とが建設せられたのである。故に後世に於ける儒教の發達も、要するに周公の大成せる、禮治主義の演繹に外ならないのである。されば、周公は支那の文化史及び思想史の上では、實に古今に獨歩せる唯一人者であつたと云はねばならぬ。

第三節 本章の總結

予は支那に對して、敢へて唯物史觀的の考察を試みんとするものではない。されど、モルガン氏の分類せる、先史民族進化の階段に就いて、之れを野蠻、蒙昧の二者に分ち、野蠻時代を上、中、下の三期に分ち、第一期の穴居時代には、語言を形成したるものとし。第二期の用火時代には、古石器を使用したるものとし。第三期の弓矢時代には、新石器を使用したるものであつて、此の時代には、總ての男女は雜交群居したるものとし、蒙昧時代に至つても、亦之れを三時に分ちて、第一期の陶垣時代は、牧畜、種植を發明し。第二期の銅器時代には、牧畜、種植は極めて盛んになつたが、夫れでも其の第一期、第二期には、尙ほ血族の群婚より、亞血族の群婚時代に過ぎなかつたが

武力に依る政治革命の發生

第三期に至りて、鐵器及び文字を發明するに至り、始めて一時的の配偶より、固定的の夫婦となつて、茲に氏族社會を形成して、女系中心の社會より、男系中心の社會が出現して、國家の形體を備へた。

と云ふ説明は、偶吾人が古典的の眼光を以て、支那の國民心理と社會發達の徑路とを説明したる前記の各項と、其の揆を一にして居るものあるは、寔に興味のある問題であつて、唯物史觀的の考察を俟つ迄もなく、彼等漢民族は二千餘年前に於て、既に優美なる文字を用ひて、社會發達の徑路を叙すると共に、完全なる國家社會を形成したる能力を見れば、如何に漢民族の頭腦が緻密にして、而も偉大であつたかと云ふことが解ると同時に、如何なる場合にも實際問題に立脚して行く處を見ると、有史以來數十回に亘る易姓革命に遭遇しても、彼等の文化と思想とは、毫も變化することなく、官治の外に超然として、自己の生存に必要な自治を實行して居るのである。故に此れは世界の人文史上に於ける一大特色であると云ふも、決して溢美の言ではないと思はれる。讀者は幸ひに、前記各節の説明に依つて、支那民族の特殊なる國民性と、社會組織の發達せる徑路とを理解せらるれば幸である。

第三章 漢民族の思想的淵源たる易學

第一節 易の起源

1 易の創作せられたる時代

易は、漢民族の最も尊重する經典であつて、其の中に包含せらるゝ思想は、後世に於けるあらゆる學說を産出せる母體の如き觀がある。故に支那の思想界を知らんとするには、到底之れを見逃がすことは出来ないのである。従つて此の易の創作者は果して伏羲氏が八卦を劃したものであるか、又此の八卦を變じて、六十四爻となしたのは、何人であるか不明なるも、一説には伏羲氏が燧皇の圖に依つて、八卦を製したるものを、神農氏が之を演べて六十四爻となしたとも云はれて居り。又夏の禹王が之れを作つたと云ふ説もあるが、周の文王が姜里に囚へられた時に、伏羲氏の作つた八卦を演じて、六十四爻と爲したと云ふ小説もあつて古來より易の創作者に就いては、諸説紛々として定説がないのである。

漢民族の思想的淵源たる易學

大支那大系

されど之を其の内面より見る時は、易の繫辭傳には「易の起るは、其れ中古に於てせられたる乎易の作られたるは、其れ憂患にありし乎」と云ふて居るのみならず、又「易の起るは、夫れ殷の末世、周の盛徳に當る乎」と云ふて居るのを見ると、陰陽の二氣を起點として、天地乾坤の二卦を創造し、之れに依りて八卦を畫したるは、何れの世にあるかを知らざるも、此れを大成せられたる時代は、殷末周初であつたと云ふことは明かである。何となれば、原有の八卦に對して、象辭を作つたのは文王であつて、爻辭を作つたのは周公であり、更に孔子は之れに十翼を作つて、其の旨を闡明にせられたと云ふのが、一般の定論であるからである。

口 天地萬物を包含せる易

伏羲氏が畫したと云ふ八卦は、未だ文字の製作せられざる以前であるから、或は之れは象形文字の起源であるとも云はれ、又陰陽の二氣を本としたものであるから、之れは即ち生殖器に基づいたものであると云ふ説も行はれて居るが、著者は伏羲氏の畫したる八卦に、文王、周公、孔子の諸聖が手を加へて、所謂四聖が合作したと云ふ所に、絶大の妙味があると共に、思想其の物から云ふても、象傳の如きは實に雄大極まるものである。例せば乾の象傳には、

大なる哉乾元、萬物を資けて始め、乃ち天を統べ、雲行雨施して、品物の形を流し。終始を明にして、六位時に成り。時に六龍に乗じて、以て天を御す。乾道は變化して、各性命を正して、大和を保合し、乃ち利貞にして、首として庶物を出し、萬國咸く寧し。と云ひたる後を承けて、坤の卦に於ては、

至れる哉坤元、萬物資かつて生れ、乃ち順ふて天に承く、坤は厚ふして、物を載せ。徳は無疆に合し、含弘光大にして、品物咸く亨る。牝馬は地の類にして、地を行くこと疆り無く、柔順にして利貞なり。君子の行く攸、先に迷ふて道を失ふも、後に順ふて常に得。西南に朋を得て、乃ち類と行き。東北に朋を喪ふも、乃ち終に慶あり、安貞の吉は、地の无疆に應ず。

と云へるが如きは、天地は陰陽の二氣を以て、萬物を發生せしむの状態を説くと同時に、其の文章は双管的の美文を以て、一切の事象を包含し盡したるは、聖人の合作と云ふを憚らぬ思想である

ハ 易より見たる社會相

又易に三種あり、一は連山。二は歸藏。三は周易と云ふて居るが、此の連山と云ひ、歸藏と云ひ周易と云ふも、此れは決して、易に三種の別があると云ふものに非ずして、連山とは、漢民族が黃

漢民族の思想的淵源たる易學

思想・宗教

河の上流たる、山岳地方に棲息したる時代に於て行はれたるものは、主として山岳其の物を對象としたる、狩獵等に關する事象を以て凡てを説明せんとしたる傾向を有し。歸藏とは、即ち黄河の上流より、徐々に進んで平原地帯たる今の河南、山東方面の平野に出で、來りて、穴居生活を營む時代には、平原の事象を以て凡てを説明せんとしたる傾向を有したる點を指さしたるものであつて、周易と云ふのは、既に石器時代を終りて、銅器時代に進み、住するには宮殿（家屋）を有し、又祭祀には禮樂を用ひ、家庭には妻妾及び臣僕等を有する時代となつて來たので、此れ等の生活様式を加味して、天地及び人事の變化を説明せんとしたるものである。故に易に三者ありと云ふも、其實、右の知く易の發達したる時代を、三者に分つたものに外ならぬのである。

其の證としては、易經全篇を通じて、最も多く現はれて來るものは、漁獵に關するものであつて試みに之れを例せば、『即ち鹿は虞ることなし、惟だ林中に入る。』とか、又『田に禽有り、言を執るに利あり』とか、『虎尾を履むも、人を啞はず』とか、又『乾庚（肉）を噬んで、金矢を得たり』とか、『虎視耽耽、其の欲逐逐』とか、『井谷に鮒を射る』とか、『包んで魚有り』とか、『鴻陸に漸（至）る、其の羽は、用つて儀と爲す可し』とか、『雉を射て、一矢を亡ふ』とか、『公は戈して、彼の穴に在るを執らへた』とか云ふ言葉は枚擧に遑ないのを見れば、此の時代には、金屬を用ひて獵具を造

り、鳥獸又は魚鼈等を捕へたるものが、漸次に發達して、其の捕へたる鳥獸等の皮毛を以て、衣服等の裝飾としたと云ふ事が、旁證せられるのである。

次に、漁獵に繼いで起りたるは、即ち牧畜なりしことは『羝羊藩に觸れて、退く事能はず、遂ふこと能はず』とか、『馬を喪ふも遂ふこと勿れ、自ら復らん』とか、『牝牛を畜ふ』と云ふが如き言葉も多數に見えるが、交通及び商族に關しても、『涉に遇ふて、頂を滅するは凶』とか、『其の輪を曳き其の尾を濡す』とか、『荒を包んで、以て河を馮る』とかと云ふ言葉が現はれて居るのを見ると、此の時代には未だ舟を用ひて居ないから、河川を徒渉して、其の頂を設する所に至れば、即ち凶であることは當然であるが、しかし其の一面には、牛車又は馬車を用ひて居つたと云ふことが明かである。

次に『旅は其の次を焚けば、其の童僕を喪ふ』とか、『億れば貝（錢）を喪ふ』とか云ふ言葉を見れば、未だ此の時代には、金屬を以て造りたる通貨のない時代であつて、貝殻を以て通貨とせらるる時代であると同時に、童僕も亦或る意味に於ては、之れを商品として取扱はれて居つた事も、想像し得らるゝのである。

しかし農業も或る程度までには、發達せんとするの傾向を有して居つたと云ふことは、其れ亡び

んか、其れ亡びんか、苞桑に繋る」とか、又は「杞を以て瓜を包む」とか、又は「碩果は食はず」と云ふやうな言葉が有ると同時に、「田に三狐を獲る」とか、「田に禽無し」とか云ふ言葉があるのを見ると、狩獵の傍ら耕種に従事して居つた事が現はれて居る。次に、器具又は工業に關しては、頗る其の例に乏しくして「石に困して、藜藜に據り、其の宮に入つて、其の妻を見ず」と云ふ言葉があつて、石を以て、家をつつた事が想像せらるゝが、「穴に入れば、不速の客、三人有つて來る」とか、又「株木に困して、幽谷に入る」と云ふが如き言葉があるのを見ると、一般的には尙ほ穴居の風が盛んであつた事も想像せられるの故に全篇に現はれて居る器具は、土器（缶、瓶、甕、七、鼎、石器）圭、王鉞、七、斧、草器（黻、纒、縞）木器（車、輿、柅、機、枕、檢、校、革器（鞞、括囊、鼎耳革、鼓）金器（金矢、金柅、金車、鼎、簋、簠、黄耳金鉞）と云ふやうなものであつて、之れを分類すれば、日常用品たる器具の外に、祭祀に用ふるものと、刑罰に用ふるものと、武器と獵具とが含まれて居る。故に此の時代には、後世の所謂工藝を専門とする職業は成立して居らぬことが明かである。

二 易の勃興せる時代と其の原因

此の時代は、尙ほ群婚の遺習を留めては居るが、要するに最早一夫一妻の風俗が、漸く確立せられんとするの時代であつた。故に男子が女子の家に出嫁するの風習も、「屯如たり、馬に乘つて、班如たり、寇に匪ず婚媾である」とか、又「先張の孤も、後説の孤も、寇に匪ず、婚媾である」と云ふが如き、言葉があるのを見ると、男子が馬に跨がりて、來れるは、即ち土匪が掠奪を目的として來たものでなくして、婚姻の爲めに、乘つて來たものであると云ふ形容であるから、此の時代は、尙女系を尊重して、男系は之れに及ばざりしものが、徐々に男系本位の家族制度が確立せられ、男子は妻を娶り、妾を畜ふることゝなつたと云ふ事は「婦を納るは吉なり」とか、「妾を得るには、其の子を以てす」とか、「咸は亨る利貞なり、女を取に吉なり」とか、女子が嫁するに當つて、「媵嫁」と稱して、自己が使用せる女子、又は親戚等の少女と共に嫁するの風のあつたことは、「歸妹は娣を以てす」とか、又は「其れ君の袂は、其の娣の袂の良主には如かず」と云ふが如き言葉があるかと思へば、「子は克く家を爲す」と云ふ言葉があつて、終に男系の子を以て、其の家を相續せしむるの風が現はれて居る。

かくして生産も日に發達し、財産の所有權が成立せらるゝと共に之れを保護するの必要を生じ、政治組織も愈々複雑となつて、政令、刑罰等の發生を見るに至り、天子の下には、王侯と稱する特

殊の階級を生じ、地方にありては、又之れを捍衛する爲めに、公、侯、伯、子、男の有力者が現はれ、其の有力者の下には、實力を以て、外敵を防ぐ専門的の武人の出現を見るに至り、又内外の事務を處理する爲めには、一時的の官吏、又は世襲の臣を生ずる事となり。それと同時に一切の事件を記録するための史を必要とし、又紛雜せる事務を處する爲めには、以上の如き機關のみにては、人事に對する疑問を解決する事が出来ないことゝなつた。

故に之れを一言以て蔽へば、當時に於ける社會は日に複雑となり。古來より最も重要視したる、天地、神明に仕ふるための巫祝と稱する専門家を必要とすると共に、祖先に對しても、亦歳時の禮を失はぬと云ふ、一種特別の風俗を生じたのである。しかし祭祀について、最も重きを置きたるものは、則ち戦争であつた。故に祭祀と戦争の二者を除いては、別に政治と稱すべきものは無かつたことは、益々前述の如き階級を發達せしめ、支配階級に屬する凡ての権力者は概して之れを大人と稱へ、被支配階級あるものは、一括して之れを小人と稱へられることゝなり。家族制度の根柢は、此の結婚制度の確立と、祭祀の勵行とに依つて、牢として拔くべからざるものとなり。今日に至るも尙ほ支那の社會は、家族に對する觀念は、恰も宗教信仰者が宗教に對するが如き觀念を生ずるに至つたのは、即ち周易時代に培はれたる、支那特有の思想であり、又風俗でもある。

ホ 易に現はれたる宇宙觀

右の如き思想的傾向に進みたる、彼等の宇宙觀は、周公の時代に至りて、頗る組織的とあり。しかも行き詰ることなき循環性に富みたる、變化極りなきものであるとなし、其の信念を以て、易の序卦傳には、左の如き説明をして居る。

天地あつて、而して後、萬物を生ずるものなれば、天地の間に盈つるものは、惟だ萬物である故に之れを受くるに、屯を以てした。が、屯とは、盈るの意であつて、物の始めて、生じたるを指すものである。物生ずれば、必ず蒙々なるを以て、之れを受くるに、蒙るを以てした。蒙とは蒙であつて、物の稚なきを指すものなるが、稚きものは、養はざるを得ざるを以て、之れを受くるに、需を以てした。需とは、飲食の道であつて、飲食には、必ず訟が起る。故に之れを受くるに、訟を以てした。訟へば、必ず衆が起るものなるが故に、之を受くるに師を以てした。師とは衆である。衆あれば、必ず比するものなるが故に、之れを受くるに、比を以てした。比すれば必ず畜ふる所があるが故に、之れを受くるに、小畜を以てしたる、物を畜へたる後には、禮がある故に、之れを受くるに、履を以てした。履とは、泰にして而して後、安きものである。故に之

れを受くるに、泰を以てした、
と云ふが如き順序を以て、混沌未分の時代より、進んで乾坤の二卦となつて、天地既に開らくれば、即ち之れを受くるに、屯を以てすると云ふ方法を以て、徐々に進んで、小畜より泰に至る迄の社會の發達する経路を示して居るが、其の究極する所は、泰に至つたからと云ふて、決して永久に其の泰と云ふ康を保ち得るものに非ずして、更に變化が起るものである。故に一步を進めて、次の如き卦を配列して、之れが説明を繼續して居る。

泰は通することを指すものなるも、物は通を以て終るべきものでない。故に之れを受くるに、否を以てした。物は否を以て終るべきものでない。故に之れを受くるに、同人を以てした。人と同じにするものは、必ず歸する所がある。故に之れを受くるに、大有を以てした。有は事大に事へて、好く謙なれば、必ず豫(樂)しむものである。故に之れを受くるに、豫を以てした。豫なれば、必ず隨ふものがある。故に之れを受くるに、隨を以てした。喜んで人に隨ふ者には、必ず事件が起る。故に之れを受くるに、蠱を以てした。蠱とは事である。事あるの後は、大となるものなるが故に、之れを受くるに臨を以てした。臨とは大である。物は大にして、而して後看る可あり。看る可くして、而して後合する所ある。故に之れを受くるに、噬嗑を以てした。噬嗑

とは合である。物は以て荷合すべからざるが故に、之れを受くるに、賁を以てした。賁とは飾である。故に飾を致して、而して後に亨くれば、即ち歸くるものである。故に之れを受くるに、剝を以てした。

と云ふて居るが、之れも亦泰極まれば、必ず否となり、否極まれば、必ず又同人と謀つて、徐々に之れを恢復して、漸く其の大を致すものなるも、其の結果は賁に至りて、裝飾の美を盡し、十二分の亨受を全ふすれば、必ず剝に至ると云ふ、循環作用を述べて居るが、更に又歩を進めて、左の如き序列に由りて、其の次の變化を説明して居る。

剝とは剝であつて、物は遂に盡す可からざるものなれば、剝極まれば、上より下に反るものである。故に受くるに復を以てした。復とは即ち不妄である。故に之れを受くるに、无妄を以てした。无妄にして而して後畜ふ可し。故に之れを受くるに、大畜を以てした。物を畜へて而して後は養ふべきものなるが故に、之れを受くるに、頤を以てした。頤とは養である。養はざれば、即ち動くことが出来ない故に、之れを受くるに、大過を以てした。物を過を以て終る可きでない故に之れを受くるに、坎を以てした。坎とは陷である。陥れば必ず麗(付)する所がある。故に之れを受くるに、離を以てした。離とは麗のことである。下略

大支那大系

と云ふが如き説明を下して、易の序卦、三十卦全部の説明をして居るが、此の卦名は、果して何人に依りて付せられたるかを審にしないが、徹頭徹尾人生の行路と、吉凶禍福の去來とは、恰も宇宙の日月が運行して、四時の循環が其の序を違へざるが如く、人間の一生も、亦四時の代序の夫れ如く、周期的に運行するものである。故に泰に處しても否を忘れず。剝に處しても、復を翼はしむると云ふ、堅實なる教訓を垂れて、大宇宙の自然的法則と、人生の行路とを合致せしめんとすると同時に、人生は即ち宇宙であり。宇宙は即ち人生であるとの信念を抱かしめんとするのが、即ち易經の眞諦である。

へ 易の人生觀

易は宇宙が四時運行して違はざるが如く、人生も亦循環して、宇宙と其の運命を共にするものであると云ふ信念を抱かしむる爲めに、萬有と人生とに對して、其の接觸を如何に説明して居るかと云ふに、此の問題に對しても、頗る常識的、左の如き解釋を試みて居る。

天地有つて、而して後萬物有り。萬物有つて、而して後男女あり。男女ありて、而して後夫婦有り、夫婦ありて、而して後父子あり。父子ありて、而して後君臣有り、君臣ありて、而して後上下あり。上下ありて、而して後禮儀錯る所あり。

上下あり。上下有りて、而して後禮儀錯る所あり。と云ふて、天地と萬物との間に、直ちに男女と云ふ自己を認識せしめ。此の男女と云ふ自己が、夫婦としての結合を爲して、而して後、父子、君臣、と云ふが如き關係を發生したと云ふて居る所に、頗る徹底せる人生の意義を示したものである。故に社會の單位は、自己と云ふ一男一女の結合せる夫婦が、即ち其の基であると云ふ所に、人生觀を立てたものであるから、之れを社會人又發達の經路より見ても『天地ありて而して後男女あり、男女ありて而して後父子あり。父子ありて而して後君臣有り。君臣有つて而して後上下あり。上下ありて而して後禮儀錯る所あり』と云ふ所に、社會の進化に對する經路と、社會に對する倫理的觀念を發生せしむる意義を付けて、禮教主義の社會建設に入らんとする傾向を示したる。最も簡潔にしてしかも雄渾なる思想を含蓄するものと云はねばならぬ。

故に夫婦に對する觀念は、之れを永遠ならしめねばならぬと云ふので、左の如き説明を下して居る。

夫婦の道は、以て久しからざる可からず。故に之れを受くるに、恒を以てした。恒とは久であるが、物は以て其の所に久居すべからざるものなるが故に、之れを受くるに、遁を以てした。遁

思想・宗教

とは退のことである。
 と云ふ言葉を以て、恒久不變の中にも、亦直ちに退一步の工夫を示して、其の變に應じて驚愕せざらしめんとするは、全篇六十四卦は勿論、每卦の中に含める六爻の中にも、一の例外なき循環作用の連續的説明を下して、かゝる循環限りなき天地に處しても、惟だ聖人のみは、必ずあらゆる場合に於て、天地の大道と合致して、萬物自然の情を見ることを得るものなるは、即ち聖人の聖人たる所以であるとして、左の如き説明して居る。

天地の道は恒久にして已まず、行く所あるに利あり。終れば即ち始めあるを以て、日月は天を得て克く久照し。四時は變化して克く久成し、聖人は其の道を久しうして天地を化成し。其の恒とする所を觀じて、天地萬物の情を觀ることを得るものである。

と云ふのが彼等の人生觀の極致であるが更に之れを人事に當て欲むれば、如何なるものかと云ふに『天は尊く、地は卑くして乾坤定まり卑高以て陳して、貴賤位し。動靜常ありて、剛柔定まる。』とも云ひ。又『女は位を内に正し。男は位を外に正す。男女の正しきは、天地と大義なり。』と云ふが如きは、人生觀に加へて、處世觀をも説明して居る所に、彼等が現はれて居る。

ト 易に現はれたる鬼神觀

易の本體は前述の如く人事の變に對して、あらゆる場合に適應せしめんとする。極めて理智的に實際問題を處理する指針を示すものであつて、其の間に何等秘密的色彩を帯びたるものでないにも拘らず。後世に至りて、之れに儒教的色彩が加はるゝに伴ふて、頗る多量の鬼神觀を持ち込みて、其の説を絶對的のものたらしめんとするに至りたるは、易の繫辭傳に。

易は天地に準ず。故に能く天地の道を彌綸す。仰いで以て天文を觀、俯して以て地理を察す。是の故に幽明の故を知る。始めを原ね、終りに反る。是の故に死生の故を知る。精氣の物たる遊魂の變である。是の故に鬼神の情狀を知る。天地と相似たり、故に違はず。知は萬物に周うして天下を濟ふ、故に過たず。旁行して流せず、天を樂しみ命を知る。故に憂へず、土に安んじ、仁を敦ふす。故に能く愛す。天地の化を範圍して、而して過しめず。萬物を曲成して遺さず、晝夜の道を通じて而して知る。故に神は方无くして、易に體無し。と云ひ。又一陰一陽之れを道と謂ふ。之れに繼ぐものは善なり。之れを成すものは性なり。仁者は之れを見て、之れを仁と謂ひ。知者は之を見て、之れを知と云ふ。百姓は日に用ひて知らず、故に君子の道は鮮し。諸を仁に顯

漢民族の思想的淵源たる易學

はし、諸を用に藏し、萬物を鼓して聖人と憂を同うせず。盛徳大業至れる哉。富有は之れを大業と謂ひ。日新は之れを盛徳と謂ひ。生々は之れを易と謂ひ。象を成す之れを乾と謂ひ。法を效之を坤と謂ひ。數を極めて來を知る。之を占と謂ひ。變に通ずる、之れを事と云ひ。陰陽の測られざる、之れを神と云ふ。と云ひ、又
寂然として動かす、感じて遂に天下の故に通ず。天下の至神に非ずんば、其れ敦れか、能く之れ 與せん。

と云ふが如きは、主として之れを形而上の方面より説明して終に道又は神と云ふ方面に發展せしめて、「神道教を設くる」と云ふ説を唱へて、鬼神を肯定し。祭祀を肯定して「道を顯にして、德行を神にす、是の故に與に酬酢すべく、與に神を祐すべし」と云ひ。又卜筮を稱讚して、「頤を探り、隱を索め、深を鈎し、以て天下の吉凶を定む」天下の眞實を爲すものは、老著龜より大なるは無し」と云ふて、凡ての事物を下するに著龜を假りて、卜するが如き方法を是認し。後世の所謂宗教的行爲に類するものとなり。更に進んでは、至誠感應の道を説いて、純然たる精神生活の域に入らしむる事となり、之れを再轉して、支那に於ける道教の發達を見るの因となつたのである。

チ 國民性に及ぼしたる易の影響

前項各節に於て説明したるが如く、易其のもの、本體が、如何なる場合にも相對的觀念を以て物に對し、又凡ての變化に應ぜんとするものであるから「各々性命を正しうして、太和を保全す。」と云ふ折衷主義は、支那の國民が世に處するの鐵則となり。又出來得べくんば、あらゆる場合に於て其の環境を破壊せずして、之れを改善せんとするの性格を養成し來りて、「多を哀し、寡を益し、物に稱ふて、平施す」と云ふが如き理想を以て、物をして其の平を得せしめんとする、所謂均産主義を發生し、「又揚益盈虚は、時と與に偕行するものである」と云ふが如き觀念を發生して、あらゆる變化に應じて、更に之れを驚かずして、直ちに其れに乗ずると云ふが如き、機會主義の人物を現はす事となつたのは、要するに易の感念が、人心に浸み込みたる結果であると思はれる。

故に吾人は支那の國民性を徹底的に理解せんとするには、易を熟讀することが、其の捷徑であると同時に、易を通じて社會の發達せる経路と、其の易を解釋せる諸傳に於て思想の進化せる跡とを翫味すれば、彷彿として其の身を太古の時代に置くの感を生ずると共に、各卦各爻の變化を見るに及んでは、是を複雑せる現代の社會に當拊めても、寸毫の矛盾を見ることなくして、事に觸れ物に

應じて、或は警惕せられ、或は策勵せられて、漠大なる利益を得るものである。故に吾人は此の機會に於て、讀者諸君は易を熟讀して、支那國民性の眞髓に透徹せられんことを勧めるものである。

第二節 儒教の精髓たる中庸

1 周末の思想界概観

周末に於ける思想界は、宗法主義を基本としたる國家組織に伴ふ當然の結果として、發生したる階級制度に對し、或は之れを咒詛し、或は之れを破壊せんとするの思想的傾向を生ずることとなり常識を本としたる、折衷主義を以て進まんとする、孔子中心の儒教の發達を見たる一面には、老莊の如き虚無超脱を旨として、儒教の唱ふる形式的の儀禮及び繁瑣なる社會組織を否認せんとするの一派を生じたるかと思へば、同じく孔子の流を汲みたるものでも、荀子の如きは、孟子の性善説に對して性惡説を高調すると云ふが如き有様であつて、周の末葉に現はれたる春秋戰國の變局は、支那に於ける思想界空前の活躍期であつて、殆んど無人の野に馬を驅るが如き奔放を示して來た。故に予は茲に之れを概説することとした。

由來周室の經綸は、前述の如く周公が其の衝に當りて、禮樂を以て治國の本となし、文物典章は燦然として盛美を極めたるも、終に繁文褥禮の弊に陥り。言論の自由は拘束せられ。新學説の提唱は之れを禁止せらる、と云ふ狀況なれば、有能の士は起つて之れが解放を求めんとするは當然であるが、此の秋に當りて、周室十三世の平王は洛邑に東遷して、王室の威信は益々失墜して、天下の諸侯は天子の命を奉ぜず、各地に割據して互に相攻伐することとなり。有能の士は起つて臂を振ふに便なる春秋の世となつた。

之れは即ち孔子が『周道衰微して、乾綱紐を解き、亂臣賊子が迹を當世に接して、人欲を肆にし、天理を滅する』と慨して、平王の四十九年以後の出來事を筆削し、之れを『春秋』と名づけ、嚴正の筆を以て其の正を正とし、其の邪を邪として、後世の亂臣賊子をして其の膽を寒からしめたる爲め、此の時代を稱して春秋時代と云はれて居るが、此れは神武紀元前六二年より、紀元一八〇年（西洋紀元前七二二年より四八一年）に至る、二百四十二年間の事である。

夫れより後の東周の威烈王の末年、即ち神武紀元二五八年（西洋紀元前四〇三年）この方は、後世史家の所謂戰國の幕となつて、周の初期には一千八百餘の諸侯（酋長の如きもの）が、春秋の初期には、僅かに百六十に減して、周の同姓の親藩では、魯、衛、鄭、晉、吳、燕、蔡、曹の八國と

思想・宗教

漢民族の思想的淵源たる易學

なり、異姓の諸侯では、齊、宋、陳、楚、越、秦、の六國は強盛なるも、其の他は皆前記の諸侯に併吞せられた。然るに此の時代に至りては、上記の諸侯は更に幾多の分合を経て、僅かに秦、燕、趙、韓、魏、齊、楚の七國となり。此の七國が互に其の衝を争ふて已まず。終に百八十三年後には秦の爲めに亡ぼされたのは、即ち神武紀元四五年（西洋紀元前二四六年）であつた。

かゝる政治上並に社會上の大混亂は、直ちに其の影響を思想界に及ぼすのは當然であつて、支那の思想界には空前の活氣を呈したる所以である。故に此の時代に發生したる各種の哲學は、前後を通じて四百年に亘る、王道の失墮を背景として、生れたものなれば、孔子が唐虞三代より、禹湯文武に至る宗法之義を祖述して、常識本位の倫理的徳治主義を高調するに反し、老子は虚無主義を高潮して、無爲の大道を提唱したる後を承けて、莊子及び列子は善惡を超越したる、死生一如、萬物平等の思想を鼓吹し、孟子は孔子の説を擴大して、經濟と道徳との調和を謀るには、其の基調を民本主義に置くべきものとなし、其の根據としては人の性は善なるものなれば、之れを存養すれば王道は直ちに行はれると云ふに對し、其の同學の荀子は、人生は虚偽を累積したるものである。故に其の本は人の性が惡であるからであると稱するものもあり、又墨子は愛を本としたる非戰論を高調し、楊子は快樂木位の人生觀を説き、韓非子は法治主義を以て、爲政の根本となす可きものとな

し、管子は功利主義的思想を以て、經濟政策を行はんとし。又其の一部を實行したるが、法家には申不害、慎子、商鞅等の諸家が現はれて、之れを君權擴張の具に供したる一方には、公孫龍は論理學的方法を以て一派を建てた。其の堅白異同論の如きは、最も有名なるものであるが、後世此の派を『名家』と呼ぶことあり。又縦横家と云ふ一派が顯はれたるは、之れは恰も論理學の正理派に對する、詭辯派の如きものであつた、其の末流には鬼谷子を始め蘇秦、張儀の如きものが現はれて、合縱連衡の策を説いて天下を横行したる外、兵家では孫、吳の二子が現はれた。かゝる時代の影響を受けたのが、即ち孔門の子弟であつて、大學及中庸の編纂せられたる所以である。

中庸の姉妹篇たる大學

元來易の原理に基いて、變に應じて其の進止を定むるのが君子なるに、春秋の末葉より戰國時代にかけては、前述の如き思想界の混亂を呈したれば、之れを訂正整理して、偏せず、黨せずと云ふ折衷主義を唱ふるの必要を感じたのが、儒教の勃興となり、又中庸の道となつた所以である。中庸の道とは『道の行はれざるは、吾れ之れを知る。智者は之れに過ぐるも、愚者は之れに及ばず。道の明ならざるは、吾れ之れを知る。賢者は之れに過ぐるも、不肖者は之れに及ばざるなり』

漢民族の思想的淵源たる易學

と云ふて居る所に、中庸其の物を得ることの容易でないといふを明かにして居るが、更に又之れを「天下國家は之れを均しふすべきものであり、爵録は辭すべきであり、白刃は履むべきであるも、中庸は能すべからざるなり」と云ふ言葉をして、人には智愚、賢、不肖の別があつて、決して單一なる標準を以て之れを律し得ざるものなれば、天下も之れを均し、爵録も之れを辭し、白刃も之れを履み得るが、中庸の道よりすれば、之れを爲すべくしても、之れを爲さざるのが、即ち中庸の道であるといふことを主張したる後、「上位に在つても下を凌がず、下位に在つても上を援かず、己を正うして人に求めず」と云ふて、總ての場合に過不及なくして、努めて平々凡々の道を辿らしめんとするのが、即ち中庸道である。

然れども斯くの如き、平々凡々なる中庸の道を以てしては、餘りに常識的であるから、其の姉妹篇たる大學に於ては、之れを「挈矩の道」と謂ふて居る。其の挈矩の道と云ふのは、「上の惡む所は以て下に使ふこと勿れ。下に惡む所は、以て上に仕ふる事勿れ。前に惡む所は、以て後にすること勿れ、後に惡む所を以て、前に從ふこと勿れ。右に惡む所は、以て左に交ること勿れ。左に惡む所は以て、右に交ること勿れ。此れ諸れを挈矩の道と謂ふ」と云ふのは、即ち中庸と共に、易を左より説明したるものである。故に之れを編纂したる曾子、子思等は、大學、中庸の二者は、易と

首尾一貫して、寸毫の差違なきものなるも、大學は主として實踐的の倫理方面を説いて身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平にしなければならぬ。夫れには、「明德を明にし、親を親とし、民を新にし、至善に止る」と云ふことを原則としなくてはならぬ。が、されば其の家を齊へるには、先づ其の身から修めねばならぬ。其の身を修むるには、先づ其の心から正しくしなくてはならぬ。其の心を正しくするには、充つ其の意から誠になくしてはならぬ。其の意を誠にするには、先づ其の知を致さねばならぬ。其の知を致すには、物に格らねばならぬ」と云ふて、其の方法を示したる後、更に物に格つて後、知致る。知致つて後、意誠なり。意誠にして後心正しく。心正しくして後身修まる。身修まつて後、家齊ひ。家齊ふて後、國治まる。國治つて後、天下平なり」と云ふが如き、循環式の方法を以て説明して居る。是れが即ち大學の要領である。

ハ 中庸の眞髓

倫理的方面を主として説明したる大學に比すれば、中庸は更に一步を形而下の方面に進めて、「天命之れを性と謂ふ。性に率ふ之れを道と謂ふ。道を修むる之れを教と謂ふ」と云ふ言葉を以て、開卷第一章として居るが、天命之れを性と謂ふといふことは、直ちに人生の本源と、人道の依つ

て立つ所以を明かにする言葉であつて、其の中には極精至微の意を含むものである。故に之れを簡単に説明すれば、

人が生れ出るには、必ず其の生れる可き性が有る。此の性は天から享けたものであるから、即ち天の命に依つて生れたものである。故に天の命之れを性と謂ふと云ふて居るのである。然らば此の天と謂ふのは、果して何物であるか、又命なるものは如何にして、之れを知ることを得るものであるが、又天は何を以て、必ず命じて之れを生ぜしむるものであるが、又性は何を以て、天命の性を享けねばならぬかと云ふことを知らねばならぬ。

然るに人の生れて身を有するには、父母が育生するものであると云ふことは、誰も知つて居るが、しかし未だ生れざる以前に於て、未だ母體に入らざる時代は、果して如何なる處に在つたかといふことは、知ることが出来ない。此の理は必ず聖人を待つて、後に始めて知る事を得るものである。故に聖人は人道を立つるには、人をして天道に基づいて、其の固有せる徳を盡さしむるものであつて、決して之れは疆爲せしむるものには非ずして、人性の固有せる徳を以て、人性必行の道を爲さしむるものである。故に性に率ふ之れを道と謂ふものであることを明かにして、太虚渾元の氣と、其の性命とを均しくして、生もなく、死もなく、寂然不動の境致より、天地自然

の運行に従つて、生育せられて行くのが、即ち道であるから。是の道を修めて、違はざらしむるものが、即ち教である。と云ふことを明かにするのが、中庸を一貫せる精髓である。

故に道なるものは、須臾も離る可からず、離る可きは道に非ず。是の故に君子は、其の睹ざる所を戒慎し。其聞ざる所を恐懼するは、陰れたるより顯はるゝ無し。故に君子は其の獨を慎むと云ふことを、修道の要則とするものである。斯くするに於ては、吾人の行爲は、直ちに天地萬物と其の性を等しくするものである。故に其の間の消息を、左の如く説明して居る。

喜怒哀樂の未だ發せざる、之れを中と謂ふ。發して皆節に中る、之れを和と謂ふ。中なるものは、天下の大本なり。和なるものは、天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。

と云ふて居るのは、中庸全篇の骨目である。

二 中庸の修養法

右の如き中和の境致に到達すれば、吾人は直ちに天地の造化に參はつて、萬物を化育し、天地と其の生命を等しくするものなるも、其の境致に達するには、如何なる修養方法が必要であるかと云ふに。之れは決して他に求むべきものには非ずして、自己自らが、之れに向つて進むより外に方法

はないのである。故に中庸の第二章には、自ら誠に明かにする、之れを性と謂ふ。自ら明かにする之れを教と謂ふ。誠なれば即ち明かに、明かなれば、則ち誠なり」と云ふて、自己の誠明を以て、性道の眞に達すると云ふのが、即ち教の本であることを明かにしたる後、然らば此の誠なるものは、如何なるものであるかと云ふに、「誠なるものは、天の道なり。之れを誠にするは、人の道なり。誠なれば、勉めずして中り。思はずして得。従容として道に中るは、聖人である。故に之れを誠にするもには、善を擇んで、固執せねばならぬ」と云ふ説明を施して、「天の道は、一點の虚偽を交へざる誠である。故に之れを誠にするのは、人の道である。故に苟しくも之れを誠にすれば、勉めずして中り、想はずして、得らるゝものであるから、従容自若として、其の道に中ることを得るものは、則ち聖人なるも、吾人が之れを誠にせんとするには、善を擇んで之れを固執せねばならぬものであつて、尋常一様の心懸けでは、到れるものではないと云ふことを明かにして居る。

斯くの如くにして、誠の道に進む時は、自然に能く人の性を盡し、又能く物の性を盡すことを得るものである。故に自然に天地の化育を賛して、凡ての曲折に通ずることを得るを盡性の學である」と云ふて、此の至誠の道を全ふすべきことを教へ、其の至誠を明にするに於ては、凡ての事象は之れを前知することを得るとて、左の如き説明を施して居る。

至誠の道は、以て前知(事物)す可し。國家將に興らんとするや必ず禎祥あり。國家將に滅びんとするや、妖孽あつて、著龜に見はれ、四體に動く。禍福の將に至らんとするや、善も必ず先づ之れを知り。不善も必ず之れを知る。故に至誠は神の如し。と

かゝる説明は、己に形而下なる實踐倫理の範疇を超へて、形而上の神學、又は宗教の領域を展開し來りたるものなるが、更に「天下の道は博なり。厚なり。高なり。明なり。悠なり。久なり。博厚とは、物を載する所以なり。高明とは、物を覆ふ所以なり。悠久とは、物を成す所以なり。」と云ふ語を繼げて、天地が覆載して、萬物を育成する所以のものも、又是れ誠の一字に外ならない事を高調して「誠なるものは、自ら己れを成す而已に非ずして、物成す所以なり。見へずして章はれ。動かすして變じ。無爲にして成る。」と云ふて居るのを見ると、中庸に於て稱へらるゝ所の誠は、佛敎に於て稱ふる所の眞如でもあり。又法性でもあり。又道家の所謂大道でもあり。又基督教で稱ふる所の唯一の神でもあると云ふ所まで、之れを擴大して居るものなれば、是の誠なるものは、小は人事百般の情態より、大は宇宙の本體に至るまでも、之れを包括して遺す所なく、天地に先立つて生れ。天地に後れても、尙ほ滅する事のない、所謂不増、不減、不垢、不淨の城に達するものでありと云ふて居る。

故に此の論法を以て進む時は、誠は即ち天地の主宰者でもあり。又宗教の教主でもあると云ふ所まで、之れを擴大し得るのであるから、儒教の思想も此所まで来ると、最早倫理哲學の範圍を脱して、一種の宗教的色彩を帯びるものなるに拘らず、雜然たる思想界を對照として、之れを大同の域に歸一せしめんとする、折衷主義より踏み出したるものなれば、飽く迄も其の立場に踏み止まりて一の哲學的體系を形成せざる可らざる所以は、蓋し其の出發點が社會改造、思想善導と云ふ、政治的の動機からしたる、當然の歸結である。

ホ 儒教哲學の體系

予は以上の説明を、より明瞭ならしむる爲め、左に之れを解説することとした。

- 一、至誠は、上は天神に通じ。下は人に通ずるものなれば、一旦之れを貫通すれば、至誠、天、神、人、の四者は一體となつて、渾然たる一の至誠教となる。
- 二、甲 之れを人よりすれば、内外の二者に分れて、内は身、心、意、知、萬物の五者となる。
- 乙 之れを外よりすれば、家、國、天下の三者となる。
- 丙 然るに善を擇んで之れを固執すれば、修身、正心、正意、致知、格物、齊家、治國、平

天下の八項となつて、内外の二者は合一せらるゝのである。

丁 故に之れを合一せしむるには、内の方面にありては、其の性を盡すこととなり。外の方面に在つては、人の性を盡すこととなり。物の方面にありては、物の性を盡すこととなつて、茲に始めて、所謂天地の化育に賛することとなるのである。

- 三、之れが地にありては、山岳、草木、禽獸、寶藏、河海、魚鼈、貨財等を載せるのである。
- 四、之れが天に在りては、日月、星辰となつて、覆ふのである。
- 五、右の如く天地の二者に依り覆載し、化育せらるゝものなれば、人は至誠を以て、其の性を盡

せば、天地の化育に参加することを得るのは、即ち至誠の道である。

以上は、春秋より戰國時代に至るまでの期間に、易を中心としたる大學、中庸に現はれたる、儒教主義の思想體系である。

第三節 春秋時代の鬼神觀

1 鬼神に對する概念

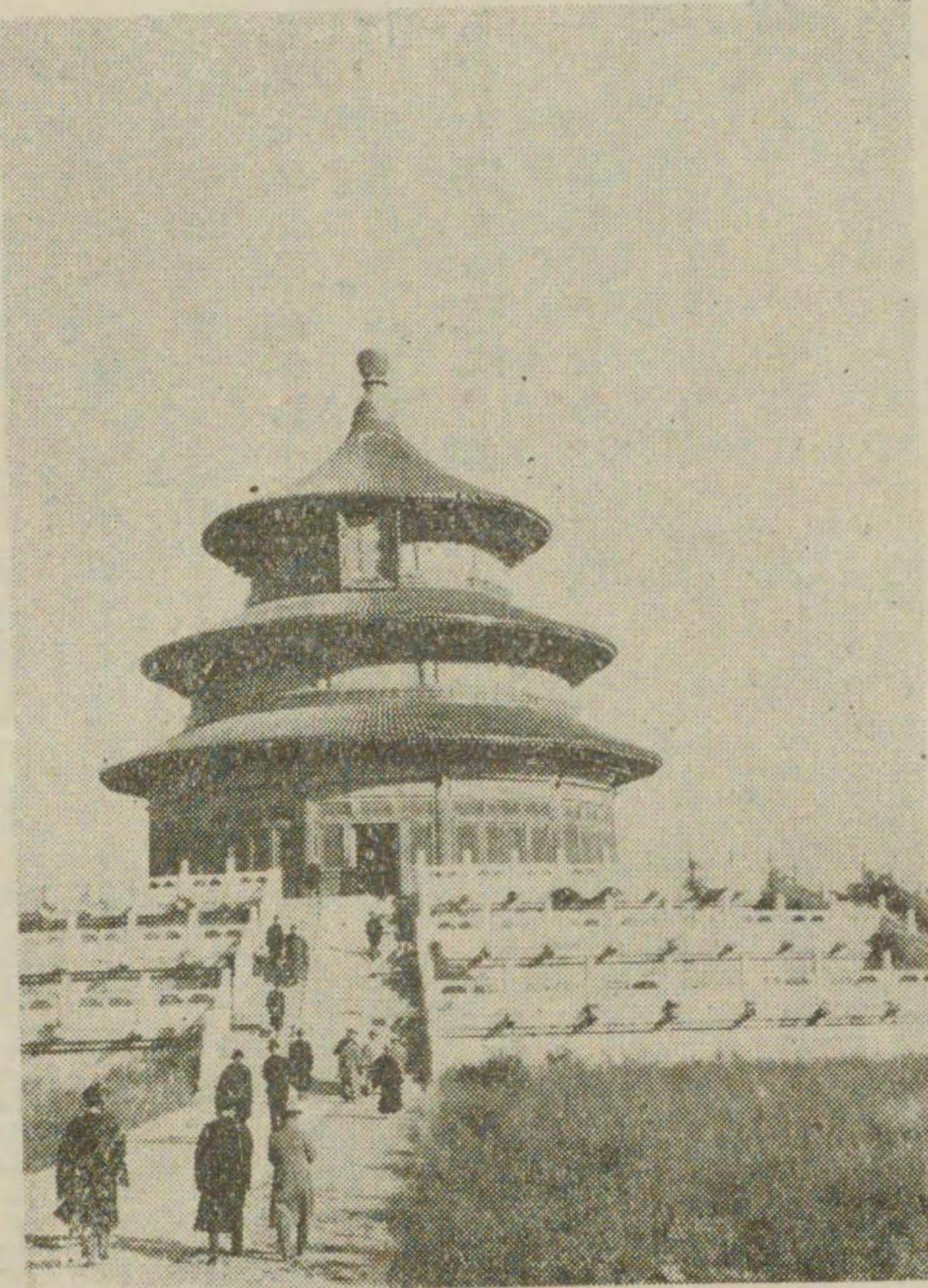
大支那系

以上の説明のみでは、儒教の説明は勿論、易及び學庸に顯はれたる、鬼神及び祭祀に對する觀念を明かにし得ざるを以て、本節に於ては、鬼神觀及び祭祀に對する觀念を説明することとした。支那に於ける神に對する觀念は、太古の時代より發芽し來たれるものであつて、伏羲氏が八卦を劃したるも、或る意味に於ては、八卦を通じて神と人との通路を開きたるものである。故に龜甲に現はるゝ紋様が、八卦に類して居ると云ふので、卜筮には之れを靈なりとして、用ひらるゝこととなつたのは、龜こそよゝ迷惑であるが、兎に角龜が卜筮の具に供せらるゝこととなつたのは、即ち神に對する觀念の濃度を増したる第一期であると云はねばならぬ。

由來上古の社會では、支那ばかりではなく、如何なる民族も母系中心の時代が繼續せられたる後母系より代りて父系中心の社會が形成せられ、男子が一家を繼承する時代となりたる後に、始めて祖先崇拜の風を生ずるものなれば、かゝる時代になりたる後は、各處の部落も統一せられ、有力なる王者の出現となつて、茲に始めて其の祖先を祭ることとなるものなれば、支那でも王者又は天子が、宗廟を造つて其の祖先を祭り、又其の祖先を以て天に配することとなつたのは、之れを思想的に觀察すれば、天子は即ち上帝の命を奉じて、萬民を子育するものであると云ふ觀念から、遂に天地の神を祭ると同時に、自己の祖先を祭ることとなり、神に對して之れを鬼と稱へることとなつた

思想・宗教

が、夫れまでは人智にて思惟すべからざる、日月、星辰、風雲、雷雨等の天體に現はる現象は勿論地上に現れて居る山川、草木に至るまでの總てを一種の靈あるものとして、祭つたと云ふことは、



天子民の爲に穀を祈る年殿

通りである。

然るに周の世に至りては、天地、日月、其の他の萬有に對してのみならず、民生に功勞ありし歴代の名君、又は偉人の靈を祭る方法を定めて禮記の月令には、天子が正月元旦より、十二月末日に至るまでに行ふべき祭祀に關する年中行事と、氣候

の變化に伴ふ祭祀の典禮を記してある。其の規定に依ると、天神では、即ち日月、星辰、雲雷、風雨までを祭り、地祇では、山川、社稷を祭る外に、百穀までも祈るものなるが、天神地祇の外には

漢民族の思想的淵源たる易學

宗廟にありて祖宗の廟を祭るは勿論、歴代の名君及び功臣の靈までを祭りて、即ち人鬼と稱して居る。

而して其の典禮には、天子親から行ふ大祀と、官を派して行ふ中小祀とがある。之れは即ち天子は、政教の一致せる社會の首長であるから、天地の間に存在せる主宰者は冥々の中より人に禍福を與ふるものなれば、之に對して歲時の祭を行ふのは、即ち民の爲めに禍を讓ひ、福を迎ふる所以である。と云ふ觀念から之れを行ふものなれば、大祀には大牢(牛羊豕)を備へて、天子が親祭する以外に、祖先に對しても、亦其の親疎遠邇の序に遵ふて其の禮を殊にし、社會又は國家に功業を樹てたる偉人傑士の靈は、必ず之れを祭るものとし、之れを怠るものは、社會道德の通念より云ふても、一つの悖徳漢となるは勿論、政治上より云へば、神聖なる職務を放棄するものとなるのである。故に武王が紂に對して革命宣言にも、其の罪惡の一項目には、祭祀を怠ることを述べて居るのを見れば明かである。されば舜が位を禹に讓るに當りても、先づ之れを堯帝の大廟に奉告して居るのは、人死すれば魂魄となつて、永久に宇宙間に存在すると云ふ思想より、死後の靈魂存在を肯定したからのことである。故に彼等は如何なる場合でも、此の鬼神に對する祭祀の禮は之れを怠つてはならぬと云ふのが、祭祀に對する觀念である。

然れども無数の神に對して、庶民が一々敬意を表することは、絶対に不可能であるから、天地萬有の神に對する祭祀は、之れを政務として天子の神聖なる職分となし、庶人にありては、天地、君父、師の三者を人生の三本として、朝夕に之れを禮拜する外には、祖先の靈のみを祭ることとなつて居る。而して此の風俗は、民國になりても南北支那の各地を通じて、殆んど一般的の家庭内に行はれて、未だ其の位牌の中にある『君』と云ふ字を除いて居らぬ所もあるのを見ると、恐らくは周代の遺風が、流れて今日に至れるものと思はれるのである。

孔子の鬼神觀

周代の祭祀は、國家重要な政務たりしことは、前述の通りなるが、其の祭祀の種類が多岐なるに對して、方法の多岐に亘れる點は、到底本篇に於て之れを盡すこと能はざるも、禮記の曲禮に『天子は天地を祀り、四方を祀り、五祀を祭りて(五行の氣の天に屬するものを五帝と云ひ。地に屬するものを五祀と云ふ)歳に偏くす。』と云ふて、天地萬有を祀るものなることを明かにし、『諸侯は方祀す』と云ふて、其の地方に於ける一方面的山川を祀り。又『五祀を祭りて、歳に偏くす』と云ひ、『大夫は五祀を祭りて、歳に偏くす。士は其先(祖先)を祀る』と云ふて居るのを見ると、大體に於て吾人が

漢民族の思想的淵源たる易學

前節に於て説明せる所と同じきものなるも、「天子は犧牛を以てし、諸侯は肥牛を以てし、大夫は牽牛を以てし、士は羊豕を以てす」と云ふて居るのは、各其の階級に應じて祭祀を行ふにも、其の範圍に廣狹があり、犠牲にも亦大小があると云ふことを示すものにして、禮記には、祭儀、祭統、問喪、喪服等の諸篇があつて、最も詳密にあらゆる場合の祭を述べてある。故に其の詳細なる祭祀の狀態を知らんとするには、禮記を熟讀するの必要がある。されど予はかゝる説明はこれを省きて祭儀篇に現はれたる、宰我と孔子の間に行はれたる、鬼神に對す問答を左に抄譯して、孔子の抱懐せる鬼神觀を明にすることゝした。

宰我曰く「予れ鬼神の名を聞くも、其の言ふ所を知らず」との問ひに對して、孔子は、氣なるものは、神の盛んなるものなり。魄なるものは、鬼の盛んなるものなり。鬼と神を合するは、教への至れるものなり。衆生は必ず死す、死すれば必ず土に歸す。之れ諸れを鬼と云ふ。骨肉は下に陰れて、野土となり。其の氣は上に發揚して、昭明、蒸蒿（薰氣の蒸發する姿を云ふ）悽愴となる。是れ百物の精なり。神の現はるゝなり。物の精に依つて、制して之れが極をなし。明かに鬼神に命じて、以て黔首（人民）の則となせば、百衆以て懼れ、萬民以て服するも、聖人は之れを以て、未だ足らずとなし、爲めに宮室を築き、爲めに宗桃（祭の順序）を設けて、以て親疎遠邇を

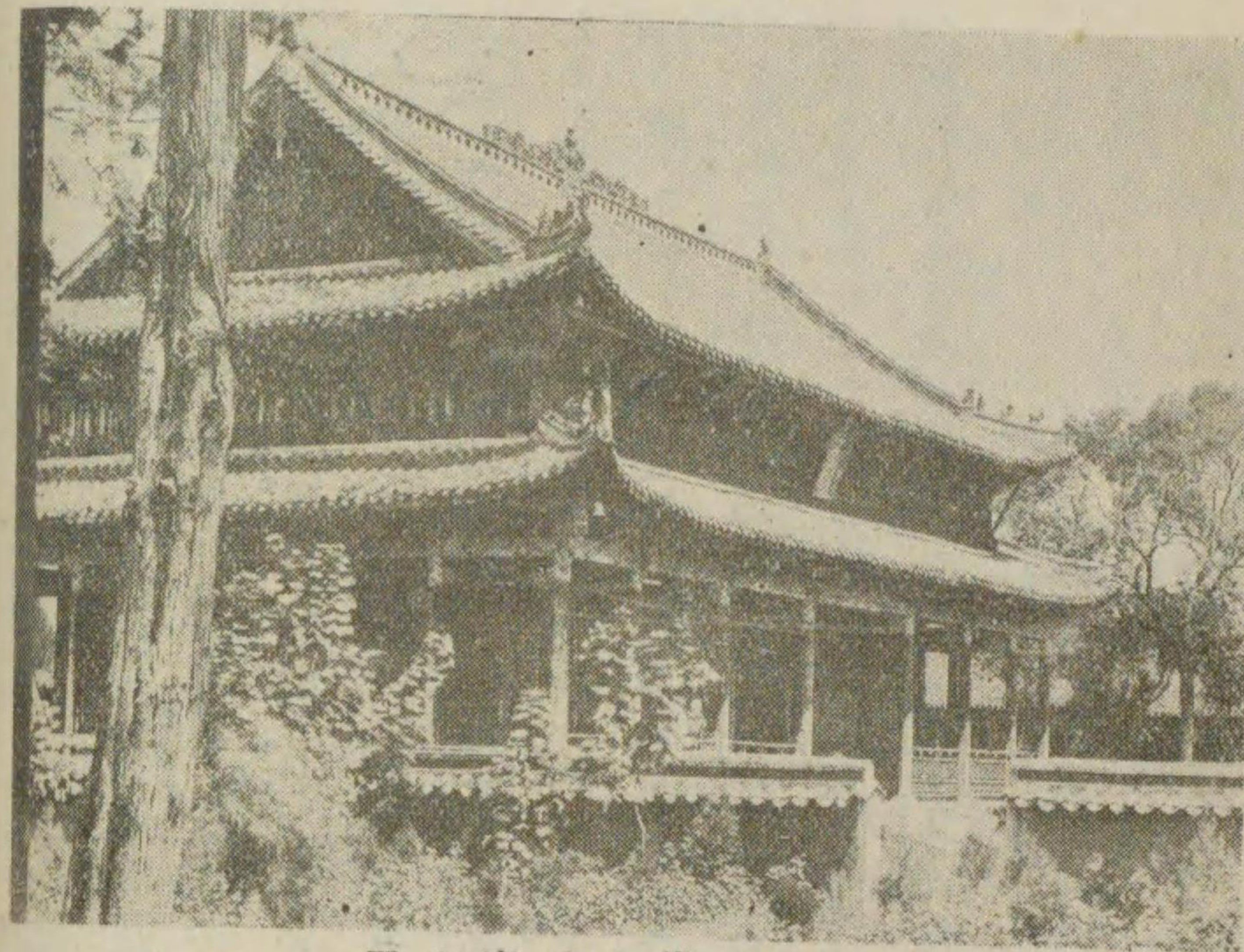
分ち、民は古に反り。始に復りて、其の因つて生ずる所を忘れざることを教ゆ、衆の服するは之れに依る。故に聰くこと且速なり。二端已に立ち、報するに二禮を以てし、朝事を建設して燎を燔き、瘞を瘞し、見ゆるに蕭光を以てするは、以て氣に報するなり。此れ衆に始めに反る事を教ふるなり。采稷を薦め、肝肺、首心を羞めて見へ。間に俠纒（二箇の瓦瓶）を以てし、加ふるに鬱鬯を以てするは、以て魄に報するなり。

と云ふて居るのを見ると、孔子の目に影じたる神は、即ち天地の精氣を指したるものにして、魄なるものは、氣の盛んなるものなりと云ふのを見ると、此れは肉體を有する吾人は、死後に於て骨肉は地下に陰るゝも、氣は上に發揚して、魄となりて持續するから、此れを鬼と名づけると云ふ説明を見ると、孔子は吾人の正氣は天に歸して、百物の精となり、神となつて現るゝものなれば、此の神と鬼とを合せしむるは、即ち教の極であると云へるは、靈魂の實在と、神の存在を肯定して、祭祀に依りて人生の過去及び未來に徹せしめんとするものであると云ふことが明かである。

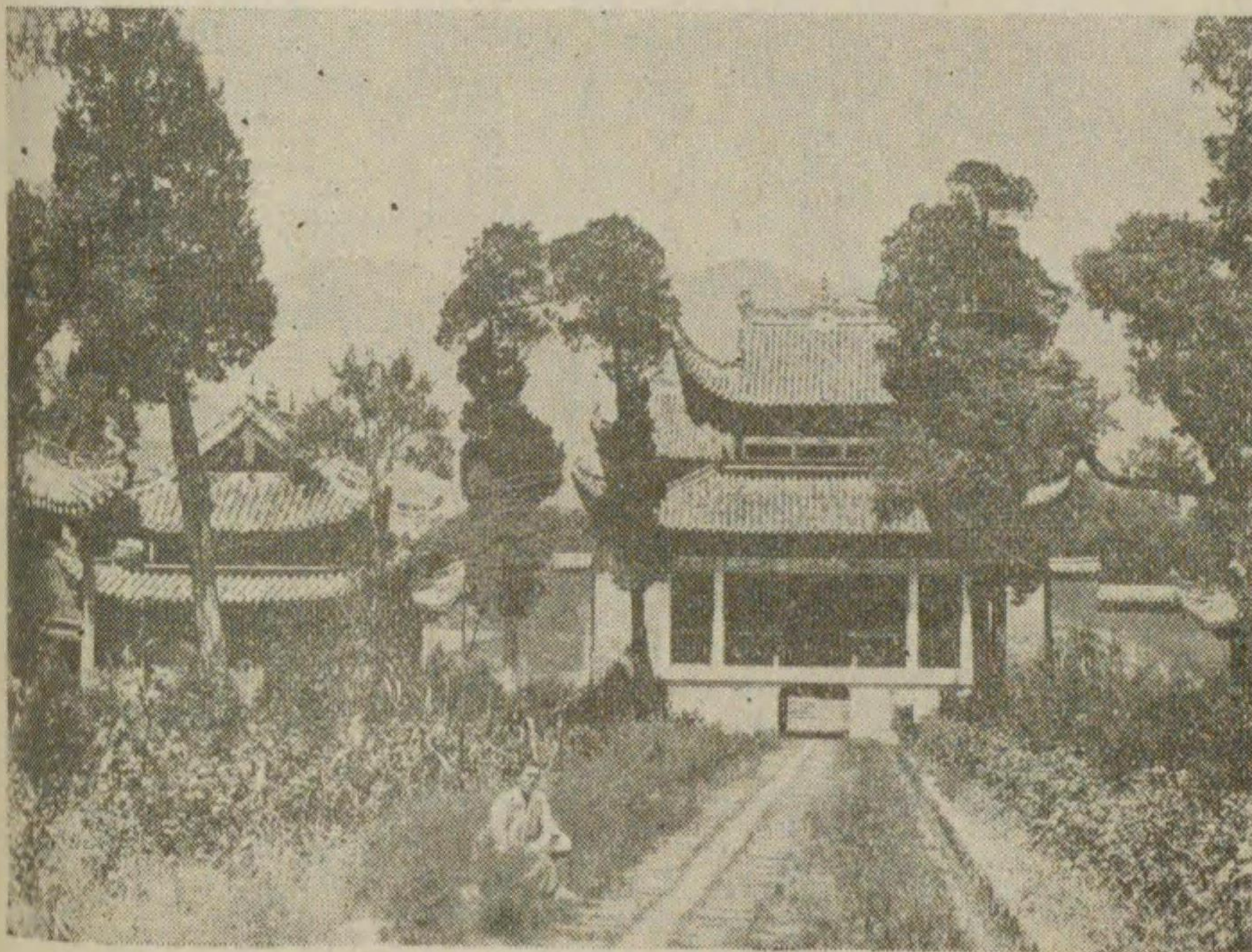
ハ 祭祀の意義

故に物の精に依つて、黔首の則となすと云へるは、即ち物の精を以つて之れを極則と爲し、又之

漢民族の思想的淵源たる易學

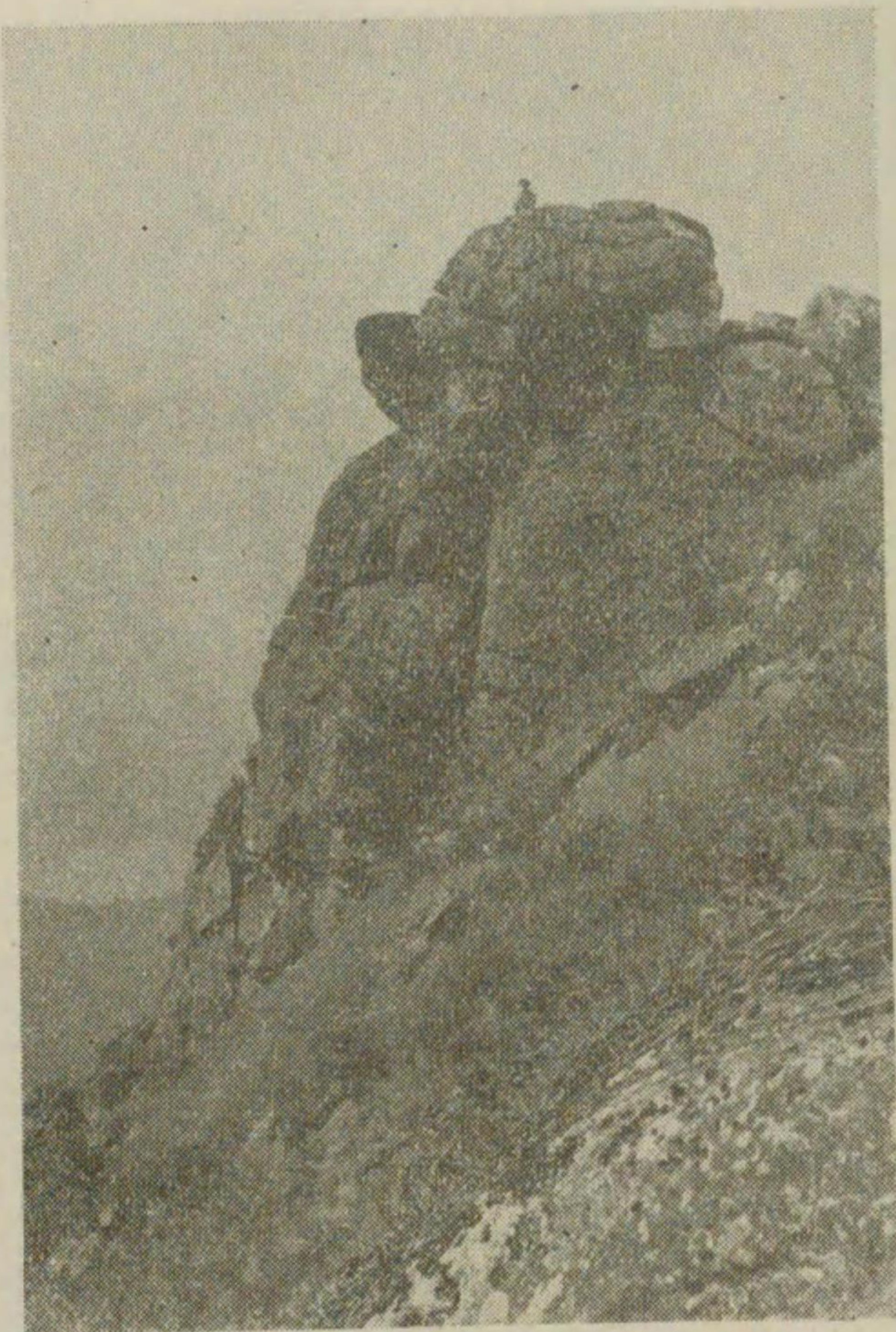


湖南衡嶽南岳廟大殿



湖南衡嶽南岳廟全景

これを鬼神と認めて、以て萬人の則とすれば、百衆は即ち自然に鬼神を懼れ、萬民は即ち之れに服することとなるものなるも、聖人は尙ほ之れを以て足れりとせず。鬼神の爲めには、宮室、宗廟を築



湖南南岳の捨身巖

既に宮室を築き、宗桃を設けると云ふ二端が立つたとすれば、即ち二禮（朝踐、饋熟）を以て、庭燎を燔き、羶郷を備へて、未明の靜肅なる時に於て之れを祭るは、即ち間ゆるに肅光を以て鬼に

漢民族の思想的淵源たる易學

報する所以である。朝踐とは、殆んど夜半にも近き、午前二時前後より、種々の犠牲を備へて夜氣沈々たる中にありて、嚴肅なる祭祀を行ふことを指すものであつて、之れは即ち民をして始めに反



湖南南岳の雲梯と行脚僧

て魄に報する所以であるといふことを説明したものである。故に孔子時代の鬼神とは、天地の精氣

と、死者の魂魄とを合したるものを總稱したるものであつて、此れ等の鬼神を祭るのは、即ち吾人が直ちに天地の精氣、又は自己の祖先の靈と相見るものであるから、尠くとも祭祀前の幾日かは、齊戒沐浴して先づ其の心を正しく、而して後、夜氣沈々たる時刻を撰びて庭燎を燔き、種々の犠牲即ち牛羊の肺肝等を供へて、之れを祭る有様は一種悽愴の氣に打たしむるものである。著者は曾つて前清の末年、二月上丁の夜半に、孔子廟の釋典に参列したることがある。之れは全く前に引用したる祭儀の文章其の儘であつた。故に此の儀式を見たる著者は、恰も其の身を農事の未だ發達せざる、數千年前の狩獵生活の時代に置くの感を抱いたことがある。而して此の感じ其の物が、直ちに報本反始の觀念を養ふ所以である。故に此れは餘談ではあるが、斯かる祭祀を見たる吾人は、其の瞬間に於て太古の時代に還元せしめられた感があつたことを一言書き加へて置く次第である。

二 易と卜筮

易は古代の民族が、凡ての疑問を解決するには、天又は神の暗示に據らんとするの風尚より、自然に發達したる通俗的のものであつた。然るに文王の象辭、周公の爻辭、孔子の十翼等が加はつて自然に神聖なるものとなつた。故に古代に於ける卜筮を主として發達したるものとは、稍々其の趣

漢民族の思想的淵源たる易學

大支那大系

を異にするものとなつた。従つて我國の神社、佛閣等に行はるゝ御闈の如く、各人が隨時に行ひたるものが、周代に至りては、官制の上に、巫又は祝と云ふが如き、神に仕へる専門家を置かるゝこととなつたのである。

故に易を繙けば、隨時隨處に吉又は凶と云ふ文字を以て、人に其の進止を定むることを教へたる例は乾の卦に「乾は天に亨る、貞に利し。」と云ふが如きは、即ち正しく固定して動かざるを以て吉とする意味を示し、又其の爻辭の初九では「潛龍用ゆること勿れ」と云ふて、男子が未だ其の時を得ざる、初期(即ち少年時代)に在りては、龍が淵に潛むが如く、自ら修養を事とし、決して世に出でゝはならぬと云ふ事を示し。第二爻の九二では「見龍田にあり、大人を見るに利あり」と云ふのは、已に青年時代を過ぐれば、恰も潛みたる龍が、平地に出でたるが如く、如何なる大人を見て差支えが無いばかりでなく、寧ろ進んで大人を見るのが吉であると云ふ事を示し。第三爻の九三では「君子は終日乾々として、夕まで惕若すれば、厲しけれども咎無し」と云ふて、既に初期に於ける慎密なる修養をなしたる後に出で、大人を見たるものなれば、一個の人格を完成せる君子であるから、終日乾々(正)として、夕に至るまで如何に奮厲しても、決して咎は無い。否必ず奮勵すべきものであると云ふ意味を示し。第四爻の九四では「或は跳つて淵に在り、咎無し」とは、即ち堂々

思想・宗教

たる所信を以てすれば、潑刺たる行動を爲しても、差支はないと云ふ事を示し。第五爻の九五では「飛龍天に在り。大人を見るに利あり」と云へるは、既に充分なる奮勵と努力を以て、恰も龍が飛んで天に在るが如き最高調の時であるから、大人に見えて充分なる經綸を行ふを以て吉とすることを示し。第六爻たる上九に至れば「亢龍悔あり」と云ふて、盛極まれば必ず衰へ、歡極まれば必ず哀みが伴ひ。滿つれば缺くるものであると云ふを示して、如何なる場合でも吉又は貞、或は利と云ふ文字を以て、其の行動の進止を示して居るのを見ても明かである。

次に又凶と云ふ文字を現はしたる實例を示せば、屯卦の第五爻には、「上九は其の膏に屯す。小なる時は貞吉なるも、大なる時は貞なれども凶」とあるのは、之れは其の屯すべからざる膏に屯して居るから、少時間なれば、正しくさへあれば吉なるも、大なる時は正しくても、凶であると云ふて其の場合々に處する進退の吉凶を示したものである。故に後世に至りては、最も神聖視せられてあらゆる思想、學術の淵源となりたる易も、古代には日常之れを使用したものなれば、孔子も此の點に關し、

昔三代の明王は、皆天地の神明に事ふるに、卜筮を用ひざるもの尤かりしは、敢て其の私製を以て、上帝に事へざらんが爲めであつた。是を以て、日月は犯さず、卜筮は違はず、卜筮は相襲

す、大事には時日あるも、小事には時日尤きも、筮する事もあつた。外事には剛日を用ひ。内事には柔日を用ひ。龜筮は違はず。

と云へるは、即ち此の卜筮は極めて太古の時代より行はれたものであつて、三代以來の明王は、天地神明に事ふるに、之れを襲りに私しない爲めに、某月、某日、某時に於て、何々の神を祀るとか、或は某の女を娶るとか、或は外敵に向つて戦争を開始するとか云ふ場合には、必ず豫め之れを卜して、其の吉又は凶を卜したるものなるも、此の卜筮は、決して違はぬものなれば、吉を欲して凶を得ても、決して之れを再びしてはならぬ。故に卜筮は相襲すと云ひ。

又大事は之れを鄭重にする爲め、其の時を卜するが、小事には必ずしも豫め其の時を定めなから、卜筮を用ひずとも可なるが、外事には剛日を用ひ、内事には柔日を用ゆると云ふは、之れは後世に於ては、晴天を以て剛日と云ひ、曇天又は雨天を以て柔日と云ふて居るが、茲に用ひられて居る剛柔の二者は、五行觀より發生したる甲子、又は星の二十八宿等の日を剛柔の二者に分たれ某日は剛なれば、某事を行ひ、某日は柔なれば、某事を行ふと云ふとあるも、卜筮は決して違はぬものなれば、一旦卜した以上は剛柔に拘らず、之れに據るべきことを示したものである。されば孔子も、極めて廣汎なる意味に於て、卜筮は必ず之れを用ゆべきことを示したものであると云ふ事が明かである。

ホ 漢民族の天命觀

支那の古典に於て頻々として逢着するものは、即ち天又は上帝と云ふ文字と共に、天命と云ふ文字である。就中、中庸の如きは「天の命之れを性と謂ふ。性に率ふ之れを道と謂ふ。道に従ふ之れを教と謂ふ」と云ふ三語を以て開卷第一章の綱領として居る。然らば此の天と云ふ文字は、如何なるものであるかと云ふに、首を上げて之れを望めば、蒼々たるものを見る。其の中には日月、星辰の運行もあれば、晝夜、寒暑の代序も、亦極めて規則正しきものがあつて、是には必ず冥々の中に一の主宰者があるのであらうと云ふ思想が、發達して天となつたのである。故に是の天に對しては絶大の信を拂ふに至つたものである。而して是の天と云ふ思想の發達したる順序に就いて、朱子は之れを、左の如き三種に説明して居る。

經傳中の天字は、自ら之れを分明に觀得せねばならぬ。蒼々たるものを説く者もあり。主宰を説く者もあり。單に理を訓ずる者もある。と云ふて、是の天と云ふ字に對して、蒼々たるものを指すと云ふのは、即ち形體的の天を説くも

漢民族の思想的淵源たる易學

のである。次に主宰の天を説くものは、必ず萬有を主宰する天がありとするものなるが、理を訓ずるを天と云ふのは、即ち善惡、正邪は勿論、四時寒暑の運行にも、必ず一の動かす可からざる理法がある。故に之れを名づけて天と云ふのである。目に見たる蒼々たる形體的の天に對しては、堯典に『帝は天の下に光る』と云ひ。又は『欽むこと皇天の若し』と云へるが如きは、即ち是れである。主宰的の天を説く者には、『天は有典を叙じ、我に五典（父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝）を勅す。五惇なる哉。天は有禮を秩し、我は五禮（吉（祭祀）凶（喪祭）賓（賓客）軍（軍旅）嘉（冠婚））に自る、五庸なる哉。天は有徳に命じて、五服（甸服、侯服、綏服、要服、荒服の稱）す。五章なる哉。天は有罰を討するに、五刑（墨、劓、剕、宮、大辟）あり、五用なる哉』と云へるは、即ち王者は、主宰者たる天の命を受けて、五典、五禮、五服、五刑を用ふるものであつて、自ら之れを用ふるものではないと云ふ思想を現はしたものである。

理法の天を説明するには、右の如き天と云ふ主宰者が、一人の天子に刑罰の大權を與へて顧みざるものに非ずして、『天の聰明なるは、我が民自ら聰明にし。天の明長なるは、我が民自ら明長にす』と云ひ。又『天の視るは、我民自ら視。天の聽くは、我民自ら聽く』と云へるが如きは、則ち理法的天を説明するものであつて、此れは天命を奉じたと云ふて、君主が絶對的の專制を行ふて、人民の疾苦を顧みざるが如き弊を矯むる爲め、理法の天を想像して、天は蒼々として上にあるも、天子の一舉一動は、億兆の民に命じて、之れを監視せしめて居る。故に天子は此の理法の天を畏れて、其の刑罰を慎まねばならぬと云ふのである。

されば古典に現はれて居る天と云ふ文字は、總べて友那に於ける道德の淵源と爲り、又理性の極致なるものなれば、後儒は或は此れを太極又は無極と唱へ。又此れを先天、後天の二者に分つて遂に道教の如き一種の宗教的體系をも形成することとなりたるも、要するに是れは獨り道教を生みたるのみに非ずして、政治的の經綸も、實踐的の倫理も、皆此の天と云ふ意味の範圍を出でざるものなれば、儒教の源泉も天字より出でたものである。故に支那に於ける天、又は天命と云ふ文字は此れを理論的に説明しても、亦之れを事實的に説明しても、決して相悖らざるものとなるのが、即ち彼等獨有の天命觀である。

へ 本章の總結

以上の如き方法を以て、人事を説明するに又天命を以てし。互に循環せる因果關係に立たしめたるが、終に其の思想を擴大して、草木、山川等の森羅萬象までも、天命に依りて生じたるものと

漢民族の思想的淵源たる學易

爲したる結果、一切の事象は、悉く一の生命を有する神又は神の現はれであるとして、萬有神教の如きものとなりたるも、其の反面には、又之れを道又は誠、或は性の一字に壓搾歸納せしめて、恰も唯一神教の如きものと爲し、實に伸縮自在の説明を施したる點は、即ち進化論者が科學的方法を以て社會の進化を説明せると同様に、彼等は彼等の心理學的發達の徑路を説くに當りて、恰も一種の心理學的進化論とも云ふ可き方法を以て、彼等の腦中に描きたる理想を基調として、政治方面では、禮樂刑政、祭祀の方面では卜筮其の他の方法に依りて、形而上より形而下に出入し事實の上に理想を推擴し、理想の上に事實を擴大して、終に一の體系を有せる彼等の宇宙觀、人生觀、鬼神論を成立せしめたるものなれば、彼等は實に行くとして可ならざるなき概を示したのである。

故に彼等の説明せる天を見ても、形體の天より主宰の天に進み、主宰の天より更に理法の天に進むと云ふが如き、思想的の進化の跡を示し。或は之れを演繹し、或は之れを歸納して、或る場合には一元論の如き立場に有るかと思へば、直ちに又二元論的方法を以て説明するが如き状態を呈するものなれば、唯一の神の如き絶対的の主宰者たる上帝を説くかと思へば、無形無臭の氣を捉へて之れを神となすと同時に、人の死したる後は、之れを肉體と精氣の二者に分ちて、直ちに之れを人格を超越せる神と合せしめて、鬼と爲すのみならず、此の思想を擴大して、遂に形體を有する山川、

草木に至るまでの萬有を捉へて、直ちに之れが神の表現であると同時に、山川、草木を始めその他萬有は、直ちに神であると云ふ域に進めしめて、終に萬有神教の如き形態の下に、社會の組織を完成したのである。

故に支那に於ける汎神的傾向は、決して單なる迷信より發したるものに非ずして、理法の上に事象を築き、事象の上に理想を築きて進みたる、精神科學としての發達を示すものなれば、之れを擴大すれば中庸の所謂「之れを放てば六合に亘り、之れを藏むれば退いて密に藏る」と云ふ言葉ともなり。又易の「寂然として動かす、感じて神に通ず」と云ふ言葉ともなつて、其の間に寸毫の矛盾を感じざる所か、即ち東方文化の特質である。而して其の源泉が即ち易であるから、此の易に包含せらるゝ思想は、此れを政治的方面より説明すれば書經となり。此れを社會的行爲に説明すれば禮記となり。此れを人情方面より説明すれば詩經となり。此れを倫理的方面より説明すれば大學となり。又此れを形而上の方面より説明すれば即ち中庸となるものであつて、其の間には宗教的思想もあり。又哲學的思想もあつて、實に燦然たる光輝を世界に於ける思想界に放つものであると云ふのが、即ち本章の總結である。

第四章 周末に現はれたる二大思潮

第一節 儒教の成立

1 宗法主義的社會の崩壊

周公に依りて建設せられたる社會は、一面に於ては極めて組織的のものであつたが、其の組織たるや、宗法主義による階級制度を基礎としたものなれば、其の究極する所は繁瑣極りなき儀式倒れのものとなつて、世人は漸く其の煩に堪へざるものとなり。周の東遷以後の社會は、統一より分裂せんとする傾向現出し、終に宗法主義的の社會の崩潰を意味する、春秋時代の大混亂を來すと共に思想界に於ては諸子、百家に依りて、種々の學説が唱へられたる中にも、老子の如きは其の繁瑣なる社會を超脱して、太古純朴の世に歸さんと欲して、所謂先王の遺法たる仁義禮樂を却けて、清淨無爲の生活を高潮して『聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍』と云ふが如き、危矯の言を發し、又『大道廢れて仁義あり。智慧出で大偽あり。六親和せずして孝子あり。國家混亂して忠臣あり。巧

を絶ち利を棄つれば盜賊あること無し』と云ふが如き言葉を以て、上古の世には仁義とか、聖智とか、巧利とか云ふもの無くして、自然に治まつた所以を高潮した。如斯きは、所謂宗法主義の社會を崩壊せしめて、復古的社會建設を夢想したるものなれば、老子の『朴を守り、素を見る』と云ふ主張は、即ち莊子に至つてこれを高潮した。例せば、其の天運篇に、

孔子行年五十有一にして道を聞かず、則ち南沛に之きて老聃に見えたるに。老聃は曰く『子來

れるか、吾聞く、子は北方の賢者なり。子は又道を得たるか』と。

孔子は曰く『未だ得ず』と。

老子曰く『子惡にか之れを求む』と。

孔子は曰く『吾之れを度數に求むること五年なるも、未だ之れを得ず』と。

老子曰く『又惡に之れを求むるか』と。

孔子は曰く『吾れは之れを陰陽に求むること十有二年なるも、未だ之れを得ず』と。

老子曰く『然り、道をして献すべきものならしめば、人は即ち之れを其の君に献ぜざるものなかるべく、道にして進むべきものならしめば、人は則ち之れを其の親に献ぜざるものなかるべ

周末に現はれたる二大思潮

く。道にして人に告ぐべきものなからしめば、人は即ち其の兄弟に告げざるものなかるべく、道にして人に與ふべきものならしめば、人は即ち其の子孫に與へざるものなかるべきに、しかも、其の不可なるは他なし。中、主なければ止らず、外、正ならざれば行はれず。中より出づるものは、外より受けず。聖人出でず、外より入るものは、内に主なく。聖人は隠さず。名は公器なれば、多く取る可からず。仁義は先王の遺徳なれば、止以て一宿すべきも久處すべからず。觀れば責め多し。古の至人は道を仁に藉り、宿を義に託して、以て逍遙の虚に遊び。苟簡の田に食し不貸の圃に立つを口し、逍遙無爲であつた。苟簡なれば養ひ易く、貸さざれば、出すこと無し。古は之れを采眞の遊と云ふた。富を以て是と爲す者は祿を讓ること能はず。顯を以て是と爲すものは名を讓ること能はず。權に親むものは人に柄を與ふること能はず。之れを操れば即ち慄み之れを舍つれば則ち悲しみ。一として其の處を闢ふて鑑むる所なく。休せざるは之れ天の戮民である。怨、恩、取、與、諫、教、生、殺の八者は、正器なれば、惟だ大變に循ふて、湮(ウヅム)すべきものに非ずして、能く之れを用ゆべきものである。故に正は正なるも、其の心に然らずと爲すものには、天の門は開かれない』

と云ふたとあるかと思へば、又孔子は、老聃を見て歸つてより、三日間は談をせざりしを以て、

弟子が問ふて、夫子は老聃に見て、又將に何を以て規めたかと云ふに對して、孔子は、我れ今茲に於てか、龍を見た。龍は合して體となり。散じて章となり。雲氣に乗じて陰陽を養ふものなれば、予は口を張つて嚙すことすら出來なかつた。故に予は又何をか老聃に規めんやと云ひたれば、子貢は然らば即ち人は尸居(動かさざる)して龍の如くに見へ。雷聲にして淵默。發動すれば天地の如きものがある云ふのは、即ちかくの如き人であるが、賜(子貢の名)も、亦得て觀る可きかと云ふて、遂に孔子の聲(紹介)を以て、老聃に見えた。然るに老聃は將に堂に据せんとして居つたが、子貢の訪問を受けて、微に應じて曰ふには

予は年運逝けり。子は將に何を以て我を戒めんとするか、子貢曰く『夫れ三皇五帝の天下を治むるは同じからざるも、其の聲名を係るは一である。しかるに先生は、獨り以て聖人を非となすは如何』と。老聃曰く『小子少しく進め。子は何を以て同じからずと云ふか』と。子貢曰く『堯は舜に授け、舜は禹に授け、禹は力を用ひ。湯は兵を用ひ。文王は紂に順ふて、敢て逆せず。武王は紂に逆して、敢て順せず。故に不同あり』と。老聃曰く『小子少しく進め。我女に三皇五帝の天下を治めたることを語らん。黃帝の天下を治めたるは、民心をして一ならしめたる爲め、其の親死して哭せざるも、民は以て非とせず。堯の天下を治むるは、民心を親しましめたる爲め、

周末に現はれたる二大思潮

民は其の親の爲めに、其の殺(喪)の禮を省(略)す(を殺する者あるも、民は非らず。舜の天下を治むるは、民心をして競はしめられたれば、民の孕婦十月にして子を産むも、子産れて五月にして能く言ふて、孩に至らずして始めて誰(彼此を見分けす)す。則ち人に始て天(短命早死)するものが出來た。禹の天下を治むるは、民心を變ぜしめたる爲め、人に心(變詐)ありて、兵に順じて盜を殺すも殺を非ずとするは、人自ら種(親疎の別を分つ)を爲して、而して天下のみとした。是を以て天下は大に駭き、儒墨皆起つて始めて倫を作くりて、今は女を婦とす、何をか言はむ。吾れ女に語らん。三皇五帝の天下を治むるは、名づけて之れを治むると云ふも、亂は焉れより甚だしきは莫く、三皇の知は、上は日月の明に恃り。下は山川の精に睨き、中は四時の施を墜る。其の知は屢(麤)の尾、鮮規の獸よりも慥しくして、其の性命の情に休んずることを得るもの莫し。而も尙ほ自ら以て聖人と爲すは、恥すべきである。夫れ恥すべきであると云ふたので、子貢は薙々(戰々兢々)然として、立つて安んじなかつた。

と云ふが如き論を以て、極めて靈快なる筆を用ひて、常に儒者の偏狹を笑ひ。寓言を以て奇幻を弄し。逍遙自適して端倪すべからざるの概を示して、老子の學説を高潮したのは、即ち宗法主義的社會に對する反感でもあり。又挑戰ともなつて結局宗法主義的社會の崩壞を來す、思想的の先驅となつたのである。而して此の思想は今に至るも、尙ほ儒教の倫理觀に對抗して、無爲超越を旨とする一派が絶へざる而已ならず、寧ろ現代の學說的批判を以てすれば、老莊の學派は支那に於て産出せる唯一無二の哲學となつて、新しき方面よりも研究を進められて來たのである。

口 防禦的態度に立ちたる孔子

右の如く、形式的、階級的、社會制度に反抗して、産出せる老莊學派が擡頭したる一面には、楊朱の如き極端なる快樂説を主張して『人生は朝露の如きものなれば、吾人は須らく徹底的の快樂を以て、此の世を過さねばならぬ。故に僅に一毛を抜けば、天下を利益することがあつても、之れを爲すことを肯せず。又天下の富を盡して、我が一身に奉ずる者があつても、我れは之れを取るものではない』と云ふ説を主張して止まざる者があるかと思へば、其の反對に又墨子は、兼愛を以て主となし、『天は既に尊くして、萬物を主宰するものであることを知つた以上は、盍んぞ天に敬事し、又天に則りて、人を兼ね愛せずして可ならんや』と云ふ説を主張すると同時に、彼は又奢侈を排斥し、節儉を尙び、音樂を去り、喪儀の禮を省き、人生れるも、歌(歡)はず、人死するも喪に服せず、博愛衆に施して、其の住居、衣服、飲食等を素樸にして、困窮を以て其の意に介せず』と云ふ

周末に現はれたる二大思潮

一派も發生した。

次に法家には、商鞅、李斯。兵家には、孫子、吳子。經濟學者では、管子、晏子等の諸家が前後に簇出し。又詭辯家としては文公孫龍の如きものが現はれて、堅白異同の辯を弄して居る。此の論旨は『堅、白、石、は三とすべきか、曰く不可である。二とすべきか、曰く可である』と云ふて居る。而して其の理由とする所は、『眼は惟だ石を見、惟だ白を見るのみなるも、其の堅きことを知らない。然らば之れが白石と云ふべきものなるも、手一度び其の石に觸るゝ時は、即ち其の堅きことを知るものであるが、しかし其れが石であると云ふことを知らないから、即ち之れは堅と言はねばならぬ。故に、堅と、白とは、到底之れを合一することは出来ないのであると云ふが如き、論理學的方法を以て、所謂名學と稱する一種の學派を發生した。其の外更に鬼谷子等に依つて權謀術數を弄して、天下を操縦せんと欲し。儒、墨、法、名等の諸學說を綜合して、其の策を施すに便したれば、其の末流には、蘇秦、張儀の如き者が輩出して、合縱、連衡の策を以て天下に遊説して、戰國の末年を賑かしたのである。

斯くの如き、思想界の混亂は、將さに古今未曾有の戰國の前驅たる、春秋時代に行はれたるを以て、此の時に産れたる孔子は、三皇五帝以來の宗法主義に依つて、組織せられたる社會の中心勢力たる君子を以て自ら任じ、慨然として起ち勤くとも古代の民族多數が、最も尊崇せる宗法主義的社會を擁護するの必要より、

世道衰微して、亂臣、賊子並び起り、生民を塗炭の苦に陥らしむるを以て、孔子は先王の道をして、蒼生を救はんと欲し。天下に周遊したるも、到る所旺盛を極むるものは霸道であつて、孔子の抱懐せる主張は、終に之れを行ふに由なければ、晩年其の郷國に歸つて、禮、樂、詩、書、易、春秋等の諸經を筆削して、茲に儒教の大成を遂げたのである。而して其の態度は、飽く迄も易、春秋等の諸經を筆削して、茲に儒教の大成を遂げたのである。而して其の態度は、飽く迄も不偏不黨の中庸の道を以て、社會に横流せる風潮を防禦して、之れを先王の禮樂に依る、治法の範圍に收めんとしたのである。故に孔子自身としては、畢生の努力を以て造り出したる儒教の體系に對しても、述べて作らず、信じて古を好み。唯堯舜を祖述し、文武を憲章して、朝に道を聞けば、夕べに死すとも可なりと云ふ、純一無雜の信念を以て、終始一貫、王道の維持に任じたのが、即ち孔子一生の志業であつた。然るに生前に其の道を行ふに由なかりし孔子は、其の死後に至つて、萬世の儀表と仰がれ、二千餘年の今日まで、世道人心を維持して來たのが儒教である。

周末に現はれたる二大思潮

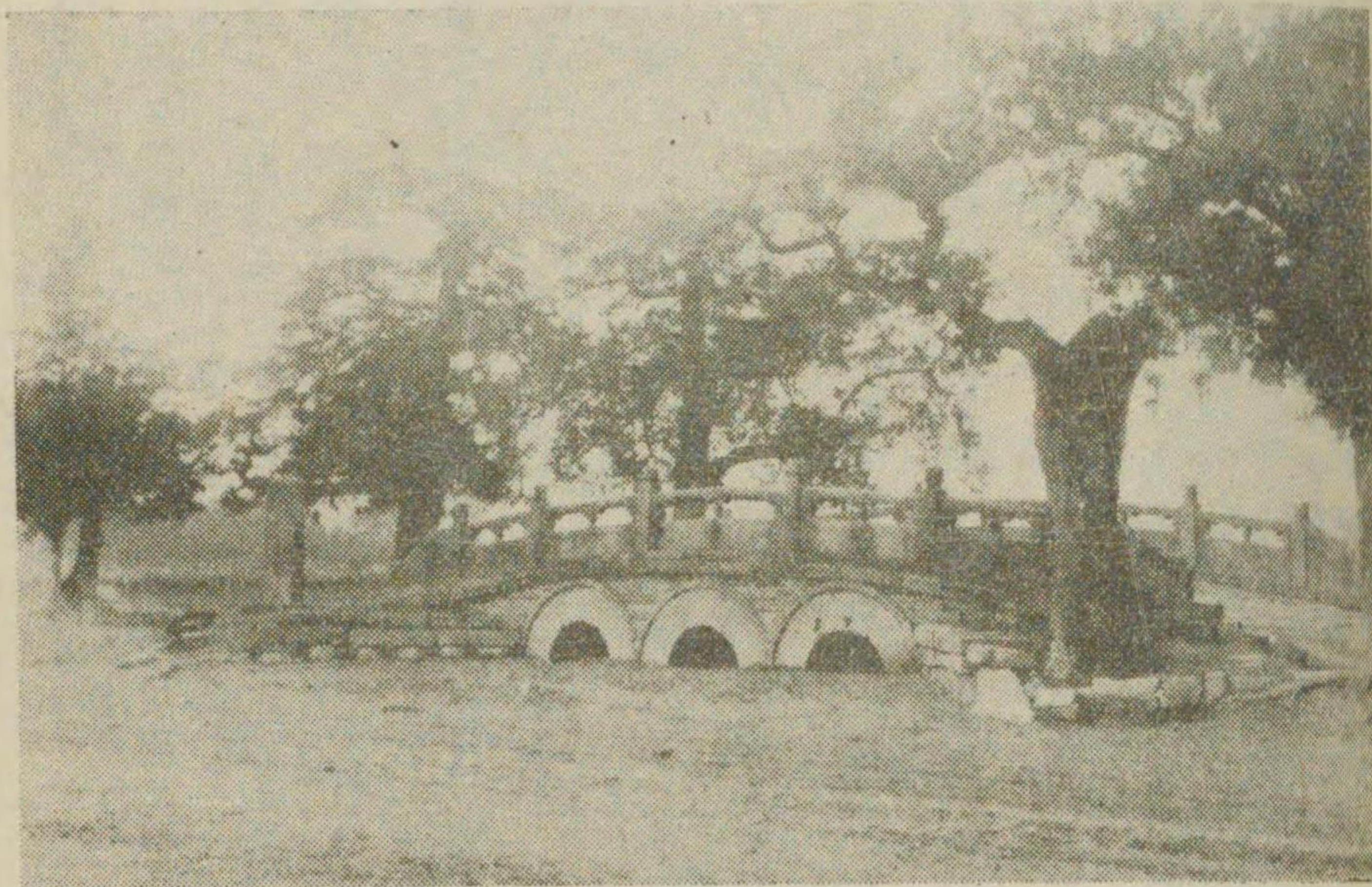
系大那支大

の一生は、革命的の手段に依らずして、改造主義に依つて進まんとするのが、即ち其の志業であつた。然るに其の志は之れを實現するに由なきを以て、之れを春秋に現はしたるが、幸に其の門下には、子思を初め多數の門弟があつて、其の道を祖述し。孟子に至つては、極めて勇敢に楊墨等の諸派と闘ひ。終に孔子は千古不磨の聖人として、百世の後までも、其の生命を傳へたるに依り、後世に至つては、孟子を呼ぶに、孔子に續くの亞聖を以てせられ。殊に孟子の民主主義を加味したる儒教は、今尙ほ社會に活躍して居るのである。

ハ 孔子の家系と其の人格

孔子、名は丘、字は仲尼、魯の襄公二十一年十月二十一日、即ち我神武紀元一四九年（西歴紀元前五二二年）に生れた。其の郷國は今山東省たる魯國の昌平郷、諫邑であつた。父の名は紇と云ひ。諫邑の大夫として勇名があつた。母の顔徴在が尼山に祈つて、孔子を生んだから、仲尼と字したのである。其の先は宋の公族であつて、周の成王が殷の紂王の庶兄微子啓を封じて、殷の祭を存せしめたのが宋であるから、孔子は即ち殷人の子孫であると云はれて居る。幼にして父を喪ひ。母の手で育てられたが、兒童嬉戯の時に在つても、常に俎豆を陳ねて禮容を設けたと云ふから、禮儀を重んずるの端は、已に幼時より發したのである。

教宗・想思



橋津文の阜曲東山

周末に現はれたる一大思潮

然れども家計貧なりしたため、常に自ら我は小にして賤なり。故に鄙事に多能であると云へるは、蓋し偽らざる告白であると思はれる。故に季氏の吏となれば、其の量（榘）は平かとなり。又乘田の吏となれば、畜類は繁殖したと云はれるのは、蓋し小より貧賤にして、計數にも明かにして、畜産にも通じて居つたと云ふ事が想像されるのである。學問に對する志は、幼時より既に確立せられたものであるから、晩年に「我れ十有五にして學に志し。三十にして起ち。四十にして惑はず。五十にして天命を知り。六十年にして耳順ひ。七十にして心の欲する所に從へども短を踰えず」と云ふ述懐を見ても明

かである。

是と同時に、孔子は斯文を以て己の任とし、陳蔡の野に於て陽虎と云ふ悪人と間違へられて、拘禁せられたる時に、門弟子は皆恐怖したるに、孔子は更に恐るゝ所なく「文王既に没して、文茲に在り。天の將に斯文を滅さんとするや、死に後れたる者は、斯文に與ることを得ざるも、天の未だ斯文を滅さざるものなれば、匡人も夫れ我を如何せむ」と云ふて、文王没したる以後の斯文は、即ち自己の維持する責任である。故に若し天が斯文を滅ぼすものなれば、文王の死に後れたる我等は斯文に與ることを得ざるものなるべきに、天が斯文を滅ぼさざる證據には、現に自分が斯文を以て任じて居るではないか。然らば匡人と雖も斯文を以て任じて居る、我を如何ともすることは出来ないのであると云へるは、孔子が先王の道を傳へるは、即ち自己の天職であるとの信念を顯はしたものであつて、實に躍如たる孔子の面目を見るに足るものである。而して孔子は常に王道を以て天下を救はんと欲して「如し我を用ふるものあれば、我は其れ東周を爲さんか」と云ふて、東遷以後の分裂せる天下も、先王の道である大同主義を以てすれば、之れを統一し得と云ふ志を述べ、又或る時は「苟くも我を用ふるものあれば、期月にして可なり、三年にして成ること有らん」云ふて、若し自分が其の局に當れば、一ヶ月にして其の政治の大綱を

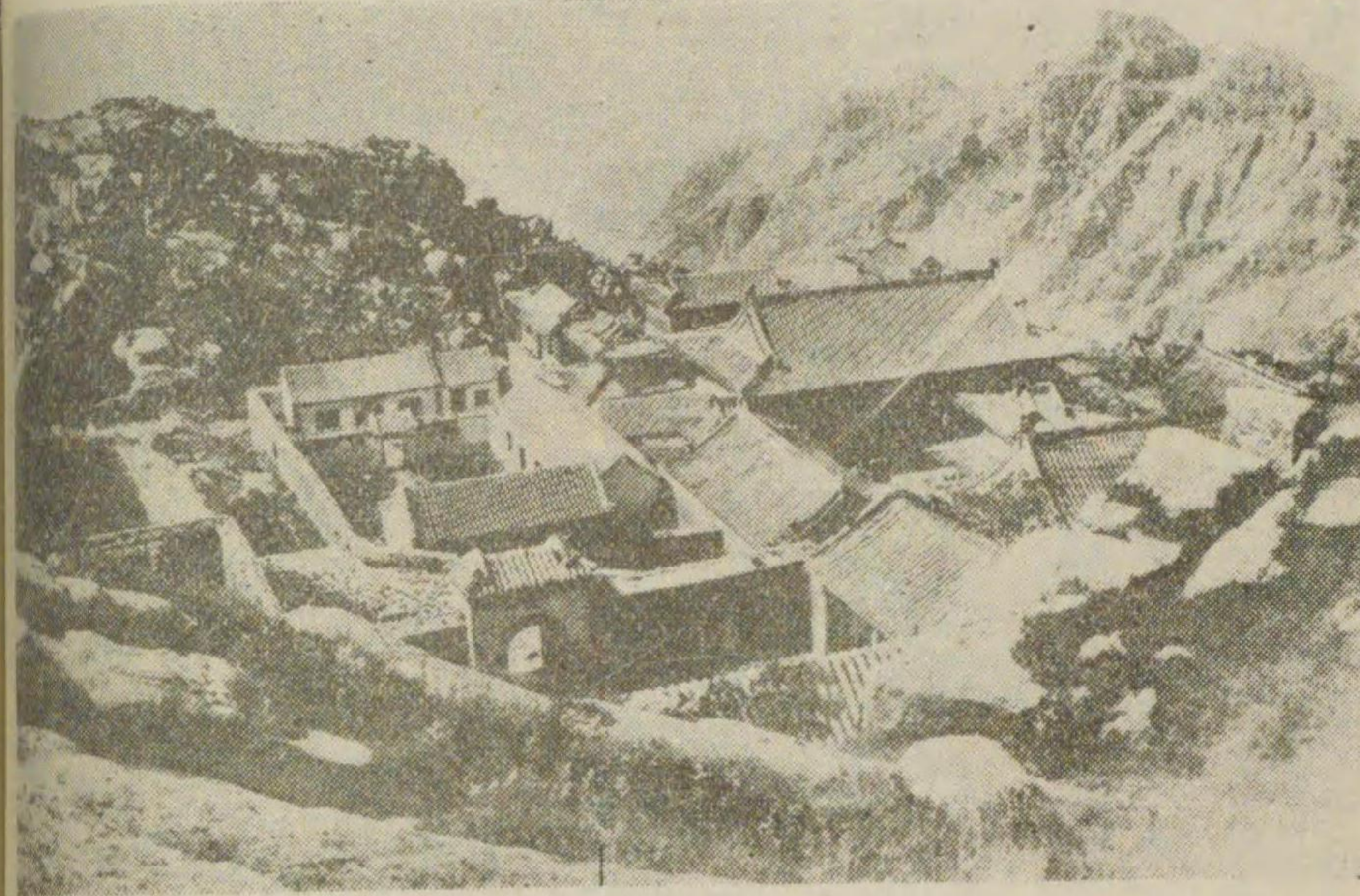
確立し、三年の後には、必ず其の成果を示して見せると云ふ意味であつて、かゝる述懐は、孔子の言行を集めたる孔子家語、又は論語等に出て居るものにして、其の學をなす所以のものは、天下を匡救せんが爲めであるから、四方に周遊を試みても、天下の諸侯は一人として孔子の道を用ゆるものがなかつたにも抱らず、孔子は尙「一以て之れ貫く」の態度を以て道の爲に終始し、其の間に決して奇矯の行爲もなく、常に中庸の道を以て仁を行はんとして、多數の門弟子の教育にも、克己復禮を主として、意なく、執なく、固なく、我なしと云ふ四勿の道を以て之れを率ゐ。及門の弟子三千人の中にて、身六藝に通ずる者七十餘人の多きに達し、德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓政治には冉有、子路。言語には宰我、子貢。文學には子游、子夏等があつて、後世之れを孔門の十哲と唱へられて居る。故に孔子は、周末の思想混亂の世に産れて、後世所謂儒教を大成し得たのは其の人格と學問との力が、偉大であつたと共に、其の思想が穩健であつたからである。

二 儒教の繼承者

孔子は前述の如く「意なく、執なく、固なく、我なし。」の四勿を以て、克己復禮の道を體得せしめんと欲して、多數の門弟子を養成せられ、其の及門の子弟三千中には、有名なる人材も輩出した

周末に現はれたる二大思潮

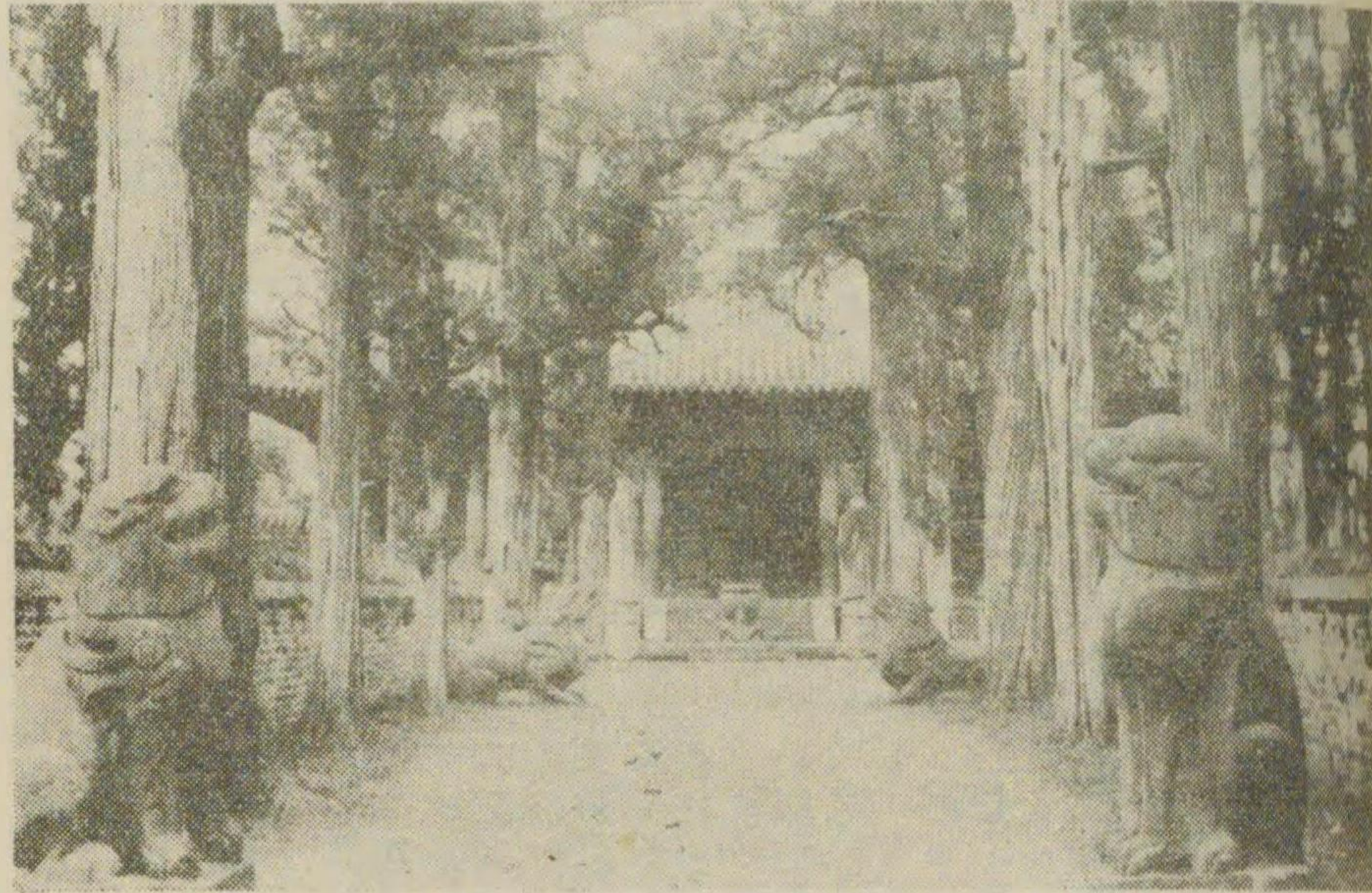
大支那大系



山東泰山聖丹廟全景

るも、孔子自身は其道が天下に行はれざることを知つて、魯の記録を筆削して、『春秋』と稱する一書を著はされた。其の眞意は、天子は天下の賞罰を行ふべきものなるに、周室が衰微して之れを行ふに由なければ、孔子は先王の大道に基づいて春秋を著し。正を正とし、邪を邪として、あらゆる事件を直筆し、天下後世の亂臣、賊子は、其の筆を見て其の膽を寒からしめたるが、其の他六經も之れを筆削して、所謂斯文の命脈を續がれたのが、即ち孔子晩年の仕事であつた。而して其の春秋は筆を魯の哀公十四年春『西に狩して麟を獲たり』と云ふ所で絶ち、哀公十六年四月(己丑)十四日を以て年七十有三歳を以て世を去られた。此れは神武紀元一八一年(西洋紀元前四七九年)であつた。

思想・宗教



曲阜至聖林孔子墓門

孔子の逝かれたる後、其の門弟子は孔子一代の言行を集めて、論語を編纂し。又孔子の門弟曾子の教へを受けたる、孔子の曾孫子思は中庸を作つて、孔子の道を祖述し。又孔子より後るゝこと五十年にして生れたる、孟子は子思の門に入りて、王を尊ひ覇を卑め、仁義を重んじ功利を輕んじ。性善の説を唱へて、天下に周遊して其の志を行はんとしたるも之れも亦用ふるもの無かりし爲め、遂に退いて其の徒萬章等と共に、孟子七篇を著はした。此の孟子は大學、中庸、論語、孟子と共に四書として、孔子の筆削せる詩、書、禮、易、春秋の五經と共に、儒教の根本經典となり、今に至るも世道人心を維持して居る。孟子の思想は今日の所謂民主主義を以て、仁義の道を説いた所に、其の進歩的傾向があつて、頗

周末に現はれたる二大思潮

る味ふべきものがある。

ホ 本節の總評

以上は極めて簡単に儒教の發達せる概略と、此れを祖述せる人物の一端を述べたるが、儒教の修養方法は、大體に於て博文、約禮の二者に分かれたれ。其の文を博うするには、詩書等の書に依りて其の智識を博うし。之れを約するには禮を以てして、此れを政治的、又は社會的方面に及ぼさんとするものである。されば倫理的方面に於ては自ら其の身を修むるを以て第一歩と爲し、此れを政治的、又は社會的に現はすには、禮を以て其の形式を整へんとしたるも、惟だ此れを形式のみに流しめたのでは何等の效果もないから、人の喜ぶ時には必ず喜び、悲しむ時には必ず悲しましむるも其の要點は、必ず是が其の節に中らしめねばならぬ。夫れには、内面的の修養として、精神上の敬を體とし、和を用とすることが必要である。故に博文と云ひ。約禮と云ふも、皆己を修むを以て本と爲すと云ふ所に歸着せしめ。飽く迄も、折衷主義に依る、社會改良を目標して、此れを實踐躬行に依りて、實現せしめんとするのが、即ち儒教の特色である。

第二節 道家思想の醞釀

1 古代に於ける民間の信仰

形體の天より、主宰の天に進み、更に理法の天に進みたることは、既に前章に於て説明した通りである。されど是れ等の天は、何れも皆無を本として畫きたるものである以上は、更に其の無に進めて有形のものたらしむる必要がある。故に天の命に依りて生れたる吾人類も、死すれば亦鬼となつて、其の魂魄は永遠に存在するものなれば、此れに對しては、犠牲を備へて祭祀を行ひ。死に事へること生に事へるが如き方法を以てし。死者に對する喪禮は勿論、是れが爲めには、宗廟を設けると云ふが如き有様は已に述べた通りなるも、かゝる方法のみにしては未だ主觀的に自己と神との交通を全ふすることが出来ぬから、終に卜筮其の他の方法を以て、神と人との交通の道を啓かんと欲し。此れに必要な史祝と云へる神に事ふる専門家を置いて、卜筮を行はしめたるも、尙ほ夫れのみにては満足すること能はずして、吾人は直接神と交通し。又神と一致せんとするの欲水が顯はれ來りて、其の道に進まんとしたのが、即ち道教の起源である。

周末に現はれたる二大思潮

然らば此の道教は、如何なる経路に依つて其の道に進まんとしたかと云ふに、三皇五帝以來の有
名なる聖人は、元來自然力の働に依つて生れたるものなるが、其の此れを生きたるものは、即ち
陰陽二氣の精たる神である。故に此の神の本體たる天地の精氣と交通し、又は一致するには、凡て
の虚偽を棄て、純真なる太古時代の精神生活に還元せねばならぬ。此れを例せば華の對人が、帝
堯を祝して『天下道あれば、物と皆昌え。天下道なければ、徳を修めて間に就き、去つて十仙して
彼の白雲に乘し、帝郷に至れば、何の恥がこれあらん』と云ふが如きは、其の史實の確否を別とし
て、即ち彼等の思想が古代より流れて居つた一種の資料である。又大禹が九鼎を造りて、上帝、鬼
神を饗したと云ふが如きは、即ち陽性の氣の澄みたる神と、陰性の精たる鬼とを合せて之れを祀つ
たものであつて、此の上帝、鬼神と云ふ四字の中には、天地の精氣は勿論、自己の祖先に至るまで
の凡ての靈を包含したものであるから、孰れも皆道教建設の資料となつたのである。

又生死の問題に對しても、太禹が江を渡るに際し、黃龍船を蓋ふて將に覆らんとするに臨み。
禹は天を仰いで『我れ命を天に受け、力を盡して萬民の爲めに勞するものなれば、生は寄にして死
は歸なれば、龍を見ること、猶ほ蝦蟇の如し』と云ふて顔色を變ぜなかつたと云ふが如きは、禹が
主宰の天たる萬有の主宰者より命を受けて、天に代りて萬民を治むるものなれば、吾人の存在せる

現在に、恰も他處に寄宿せるが如きものなるが、一朝にして此の生を終れば、直ちに主宰者の所在
地たる帝郷に歸ることを得ると云ふ信念に立脚して居つたと云ふ事を示す材料である。又周の文王
が西伯として天下の諸侯を率ゐるに當り、關南四十餘國の諸侯が、皆其の徳を仰いで受命の君と稱
したと云ふが如きは、明に主宰の天を認識したる事を示す適例である。

又卜筮はあらゆる場合に於て、堯舜時代より行はれたものにして、西伯が將に狩獵に出んとす
るに當つても『龍に非ず、麕に非ず、熊に非ず、羆に非ず、虎に非ず、貔に非ず、獲る所のものは
霸王の輔ならん』と云ふ言葉を下し得て出獵したるに、果して東海の濱に釣を垂れ、老年にして困
窮せる呂尚と、渭水の陽に遇ひたる西伯は、大に喜んで吾が先君大公(公季)は『將に聖人ありて周
に來るべし。周は因つて以て興らん』と云はれたことがあるが、子は眞に是れなるか、我が大公の
子を望むや久しかりしと云ふて、之れを太公望と曰ひ、車に乗せて俱に歸へり立て、師と爲し。師
尙父と稱したと云ふが如きは、あらゆる場合に卜筮を行ふて、神意に依つて事を決せんとしたるは
上古以來の風俗であつたことを示すものである。

口 社會の進化と精神上の不安

周末に現はれたる二大思潮

然れども未だ此等の信仰と、風俗とを打つて一丸となして、之れを宗教とするまでには到らずして、天子は祭政一致の主権者として、高く萬民の上に立つて、此等の信仰と風俗とを、躬親此れを實行するを以て其の天職とする云ふ域までに進み來りたるも、天子を通じて彼等の有せる信仰と風俗を行はるゝのみにては、到底彼等自身の精神的満足を得ること能はざるを以て、彼等は何等かの方法を以て、彼等自身の精神的の満足を得んとするの欲求を生じたるも、此れを満足せしむる適當なる方法と、其の教主とを得ることが困難であつた。然るに周末に到りて思想界の大變動を來すと共に、社會に即して社會そのものが、即ち天の命に依りて發達したるものなる以上は、此の命に依つて道を行はしめねばならぬ。夫れには中庸の道を講ぜねばならぬと云ふ儒教が、孔子に依りて大成せられたるも、儒教のみにては、到底精神上的の満足を得る事の出來ない者が、多數を占めて來た。

此の時に當つて、老子は起つて高く清淨無爲の旗を翻へし。此の無爲の世界に到達するには、仁義、禮智等の人為的の虚偽を棄てねばならぬと云ふ、實社會を超越したる、極端なる無爲主義を高潮した。之れに繼いで起ちたる莊子又は列子等も、亦各其の説を敷衍して、或は虚無主義を唱へ。或は現實を離れたるユートピアを以て、人をして無何有の郷に入らしめ。又極端なる唯心的の理論を説いて、主觀的の天地を闢撥せしめんとするものも現はれた。故に此の時代に於ける支那の思想界には各種の哲學と宗教とを産出すべき、精神科學の最高潮期を示したるが周の世は終り秦の世を経て、漢時代に至りて、終に道教と云ふ一の宗教が建設せらるゝこととなつた。故に之れを一言にして盡くせば、春秋以後の思想界は、道教と云ふ一種の宗教を産出せんとする、醞釀時代であつたと云ふことを斷言し得るのである。

ハ 老子と道教

然らば老子と道教とは、果して如何なる交渉を有せしかと云ふに、老子の主張したる哲學と、後世に行はれたる道教とは、全く没交渉なるに拘らず、前述の如く當時の支那民族は精神的の欲求として、其の戴くべき教主と、其の之れを表現すべき方法とを求めつゝあり、時になれば、偶然にも現實を超越せる老子の出現を見た云ふことは、精神界に於ける盟主として仰ぐに最も適當なるばかりでなく、多數の學者は之れを祖述し擴大して、老子に繼ぐに莊子あり、莊子に繼ぐに列子ありと云ふ有様なれば戰國の幕を破つて、始皇の統一の世となりても、其の統一は破壊的の統一にして陳勝、吳廣等先驅とし、終に十數年を出でずして秦の世は崩壊し、漢の高祖の世となつても、所

周末に現はれたる二大思潮

謂道教的の色彩は、益々其の濃度を加へつゝありしが、しかし未だ老子を仰いで、教主とするまでの運動は現はれなかつたのである。故に嚴格なる意味を以て之れを云へば、後世の道教と老子とは全く没交渉であつたと云ふのが至當である。

然らば是の老子は如何なる人であつたかと云ふに、明確なる事實を知るに由なきも、漢の司馬遷の筆になりたる史記列傳には、

老子は楚の苦縣厲郷曲仁里の人にして、姓は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃と曰ふ。周の守藏室の史であつた。孔子周に適き、將に禮を老子に問はんとしたるに、老子は曰く、子の言ふ所の者は、其の人と骨と皆朽ちたり。獨り其の言あるのみ。且つ君子は其の時を得ざれば、則ち蓬累して行くと。吾れ之れを聞く、良賈は深く藏して虚なるか若く、君子は盛徳ありて、容貌愚なるが若しと。子は驕氣と、多欲と、態色と、淫志とを去れ。是れ子が身に益無し。吾が子に告ぐる所以は、是の若き而已と。孔子去つて、弟子に謂つて曰く、鳥は吾其の能く飛ぶことを知り。魚は吾其の能く游ことを知り。獸は吾其の能く走ることを知る。走る者は、以て罔を爲す可く。游ぐ者は、以て綸を爲す可く、飛ぶ者は、以て矰を爲す可きも、龍に至つては、吾其の風雲に乗じて、天に上るを知ることを能はず。吾今日老子を見るに、其れ猶ほ龍のごとき邪と。

老子、道徳を修む。其の學は自ら隠して、名無きを以て務と爲せり。周に居ること之れを久しうして、周の衰ふるを見。廼ち遂に去つて關(函谷關)に至る。關令尹喜曰く、子は將に隠れんとするかと。彊ひて我が爲めに書を著はせと。是に於て老子は廼ち書上下編を著はし、道徳の意を言ひ。五千餘言にして去り。其の終る所を知るもの莫し。或人曰く、老萊子も亦楚人なり、書十篇を著はして、道家の用を言ふ。孔子と時を同ふすと云へり。蓋し老子は百有六十餘歳。或は二百餘歳なりしとは、其の道を修めて壽を養へるを以てなるか。(以下略)

と云ふが如き人物であつて、其の事跡に至りては、明瞭を缺いて居るが、之れを如何にして、道家の祖と仰ぐに至つたかと云ふに、老子に、道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。無名は天地の始めにして、有名は萬物の母なり。故に常に無欲にして、以て其の妙を觀。常に有欲にして、以て其の微を觀る。此の兩者は、出を同じくして、名を異にす。同じく之れを玄(天)と謂ふ。玄の又玄なるは、衆妙の門なり。

と云ふ開卷第一章が、既に形式を脱して、道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは常の名に非ずして、名の名づくべきものは、即ち何れも其の本體とは遠きものなれば、名の名づく

周末に現はれたる二大思潮